

新たな世紀王になってしまった俺が神喰いの世界を駆ける

カオスロイドR

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

神様の夫婦喧嘩に巻き込まれて命を落とした高校生の主人公が体内に神秘の石キン  
グストーンを埋め込まれて（強制的に）次代の神候補にされて修行として（無理やり）G  
Eの世界に転移させられた話。

リンドウ「いいか、この作品に関する注意事項は三つ」

一つ、作者の下手くそな文章力。

二つ、主役の仮面ライダーBLCAKは南光太郎じゃなくてオリ主。

三つ、作者はGEに関してにわかレベルだからキャラ崩壊が凄まじくてこんなの○○

じやないって思うかもしけねえし設定に関して原作とは違う矛盾が生じているかもしない。

以上の事が気に食わなかつたら『戻る』もしくは『↑』で元の画面に戻つてくれ。  
・・・あ、これじや四つだ。まあいいか。

ごめんなさい上の注意事項、思いついたらどうしてもやつてみたかつたんです。  
以上の注意事項でも大丈夫な方はどうかこれからもこの作品をよろしくお願ひします。

タグは随時追加予定。

25話の完成度 70%

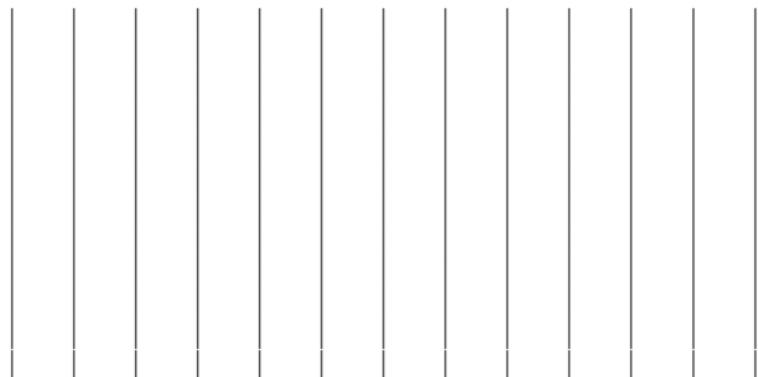
1  
2  
話  
1  
1  
話  
1  
0  
話  
9  
話  
8  
話  
7  
話  
6  
話  
5  
話  
4  
話  
3  
話  
2  
話  
1  
話

目

次

108 99 85 74 66 55 46 39 28 19 11 1

2  
5  
話  
2  
4  
話  
2  
3  
話  
2  
2  
話  
2  
1  
話  
2  
0  
話  
1  
9  
話  
1  
8  
話  
1  
7  
話  
1  
6  
話  
1  
5  
話  
1  
4  
話  
1  
3  
話



251 242 227 216 206 199 187 171 160 150 143 138 121

# 1 話

「どうしてこんな事になつたんだろう・・・」

荒れ果て窓のガラスも割れて野ざらしになつた廃墟のビルの一室で男が独り焚き火を起こして暖をとつていた。

ただこの男見た目が普通ではなかつた。

全身が黒い筋肉でおおわれて、目が赤く複眼になつており手首と足首には二本の黄色の帯状のラインと間に赤いラインが巻かれており、最も特徴的なのは腰に赤い宝石が埋め込まれた大きな銀のベルトが巻かれている。

「さすがにこの姿じや人のいる所には出られないな。現に挨拶したらみんな逃げるしアラガミと勘違いされてゴッドイーターに追い掛け回されたからな・・・」

「ここに来てだいたい半年か・・・長いようで短いような」

柱に顔を向けると柱には正の文字が書かれていた。

これは俺が太陽が昇る日の出の時に拾つた釘で柱に一本の傷を付けていつたものだ。

正の文字が六個と傷が一本溜まるとそれを丸で囲む。

今はそれが六個溜まつた。

つまり六ヶ月分半年と言う訳だ。

半年前の俺はどこにでもいるただの高校生だった。

ある日、学校が休みで家で留守番をしながらゲームをしていたら突如轟音が鳴り響き俺の家に大きな隕石が落ちてきて俺は家ごと隕石に潰されて命を落とした。

その後気がつくと俺は申し訳なさそうに俺をチラチラと見る白髪のおじいさんと若いきれいな女性の前に立っていた。

おじいさんの方は神様で若い女性は奥さんだそうだ。

なんで神様が目の前にいるかと尋ねたらなんでも俺の家に落ちてきた隕石の正体はこの二人が夫婦げんかして怒った奥さんが神様めがけて投げた茶碗でそれが外れて下界の俺の家に落ちたそうだ。

茶碗を投げるつていつの時代の夫婦げんかやねん・・・

ケンカの原因は二人の間に子ができなくその事でお姑さんにねちねち攻められて旦那が護ってくれなくついに奥さんの怒りが爆発したのが原因らしい。

家庭の事情に俺を巻き込まないでください。

お詫びとして俺を養子にして次代の神候補の一人にすると言つてきた。  
嫌です、めんどくさいので生き返らせてくださいとお願ひしたがすでに俺の肉体はミンチより酷い状態で生き返らせる事はできないと言われた。

ナンテコツタイ・・・

ショツクで思わず下を向くと腰に何か巻かれていた。

なんかすごい見た事あるんだけど。

これってあれだよね仮面ライダーBLACKのベルトだよね。  
なんで外れないの？

おもちやじやないのこれ？

え？ 実在してたの？ てつきりお話の中だけかと思つてた。

おのれゴルゴム！ ゆ、 る、 さ、 ん、 !!

神様曰くなんでも神候補になる為には用意された世界に送り込んでそこで夭寿を全うするという試練との事だ。

ただその世界は余りにも過酷な為に神様が救済処置として俺に与えたそうな。  
父さん母さん、 あなたの息子は神様に改造人間にされました。

悲しんでも仕方ない。

とりあえずこの世界に送り込まれるか聞いておくか。

まあ俺の体内にはキングストーンがあるし大抵の世界なら生きて天寿をまつとうで  
きるだろうな。

・・・ そう思つていた時期が俺にもありました。

俺が送り込まれる世界。

それはGOD EATERの世界でした。

待たんかい！ゴルア！

なんでよりによつてあんなアラガミが暴れまわる世紀末ヒヤツハーな世界に送り込まれなあかんねん！

せめてもつと平和な世界に送れ！

色々あるだろ学園ものとか日常ものとかさ。

「もう決まつた事だ、諦めろ」

「ふざけんな！」

俺は両手を拳にして仮面ライダーBLACKの変身ポーズをとる。

「変……身！」

右腕をまつすぐ横に伸ばすとベルトのバックルからまぶし過ぎるくらいの光が溢れ出した。

ドクンツ…

体が熱い：なんだこれ…

い、痛い！痛い！痛い！

よく見れば体の至る所から大量の汗と関節から蒸気が吹き出し筋肉が盛り上がり骨

が軋む。

身体が変化する成長痛のような痛みに耐えながら皮膚が緑色に変化してバッタ男の姿になり強化皮膚【リップラスフォーム】が全身を覆い黒い太陽【仮面ライダーBLACK】に変身を果たした。

「変身できたか、つまりキングストーンはお前と完全に適合したという事だ」

勝手な事ばかり言いやがつて。

嬉しそうに笑う諸悪の根源に俺の中ではにかが切れた。

とりあえず一発殴る。じやないと気が済まん。

「トオ！」

ジャンプしてパンチを繰り出そうとする。

「愚かな、神に逆らうとは！カアアアアア！」

「うわああああ！」

しかし神が手をこつちに向けて念力で吹き飛ばされた。

大神官ダロムかこいつは！

「夫になにするのよ！」

さらに奥さんの目が光ビームが飛んできた。

「痛つ！熱つ！」

この攻撃は：

目からビームつて奥さんはビシュムかよ！

その後何度も倒されて立ち上がり立ち向かつたが返り討ちにされ、やがて力尽き負けてしまい氣絶した俺は穴に落とされて無理やりGOD EATERの世界に送還されてしまつた。

変身したばかりの今の俺の実力じや奴らには勝てないのか…。

なら向こうで強くなつてやる

天寿を全うして再び戻れたら覚えてろよ。

薄れゆく意識の中。

俺は自分をこんな目に合わせた連中に復讐を誓つたのだつた。

そして俺は荒野のど真ん中で目を覚ます。

ここがGOD EATERの世界か：

あるのは岩や砂ばかり。

木も鳥も動物もいない。

なんにもないな。

こんな寂しい世界でこれから五万年間の間、生きていいないといけないのか。

取り忘れたのかせめてもの情けなのかキングストーンは没収されずに体内に残つて

いる。

よかつたこれがなかつたら生きていけない所だつた。  
ただ困つたことが一つある。

それは元の人間の姿に戻れない事だ。  
どんなにやつても元の姿に戻れない。

つまりこれから先このままというわけだ。

向こうの腹いせなのが原因は分からぬ。

ただ分かるのはいきなり人生の難易度が上がつた。

これじやあ人前に出れない。

いくら正義のヒーロー仮面ライダーの姿でもこの世界じや知られていなからバッタの怪物もしくは新種の人型アラガミと思われる。

もしかしたら大丈夫かなと思つて試しに人前に出たら悲鳴を上げられて通報を受けたゴッドイーターに追いかけられて散々な目にあつた。

こうして俺は人前に出られなくなり、オウガテイルなどのアラガミに襲われたけど仮面ライダーの力でそれを退けて彷徨つていたら廃墟と化したビルを見つけてそこに人知れず隠れ住んで今に至る。

「はあ・・・寂しいよ帰りたいよ」

体育座りして落ち込んでいたら背中を軽く突かれる。

コツン

振り返ると緑色の車体と俺と同じ赤い複眼の目をしたバッタをモチーフにしたようなバイク。

「俺を慰めてくれるのか?バトルホッパー」

俺の背中にあつた正体は生きているバイク『バトルホッパー』の前輪。

そうだよつて答えるかのように目が点滅するバトルホッパー

「ありがとうバトルホッパー、そだよな俺は独りじやない。おまえがいるんだよな」

立ち上がりバトルホッパーの頭を撫でる。

バトルホッパーは俺と同じように神に送還されたようでこの世界に送られて気を失つてた俺が目を開けた時に傍に立つていた。

バトルホッパーがいなかつたら俺は気を失つたままアラガミに喰われていただろうな。

「そだなお腹減つてから気が滅入るんだ。なにか食べ物を探しに行こうか」

立ち上がり体に付いた砂を払つていると

「誰か助けて!!」

女の子の叫び声が聞こえてきた。

「今のは悲鳴は！」

慌てて外を見るところの時代では珍しい裕福そうな服装をした女の子が一匹のオウガテイルに追われていた。

いけない！ 急いで助けないと

ビルから飛び出そうとするとバトルホッパーの前輪に足を取られて転ばされる。

「なにをするバトルホッパー！ 急がないとあの子が!!」

ファン！ ファン！

何かを訴えかけるように左右に首を振り警告音を出す。

どうしたんだ一体？

あ・・・ふと自分の姿を確認する。

そうだ今の姿は人間じゃないんだ。

この姿を見られたら怖がられて石をぶつけられる。

はじめて人前に出たあの時の様に・・・

もしここに住んでる事がばれたらゴッドイーターがここに来て追われる。

前に追われた時はバトルホッパーがいてくれたから逃げられたけど今度もうまくいくとは限らない。

捕まつたら解剖されて人体実験の材料にされるかも・・・

でも一緒に逃げてくれたバトルホッパーには悪いけど目の前で助け呼ぶ女の子を見捨てる事なんてできない。

ここに住んでるのがバレたらまたどこかに引っ越して逃げればいいだけだ。

俺の意志が固いと分かるとバトルホッパーは道を開けて乗れと言つてるように目が点滅する。

「ありがとうバトルホッパー」

俺はバトルホッパーに乗るとフルスロットルで走り出しビルから飛び出すと急いで襲われている女の子の方に向かつたのだつた。

つづく

## 2話

「ハアハアハア……た、助けて……」

私、エリナ・デア＝フォーゲルヴァイデはオウガテイルと呼ばれるアラガミに追われていた。

アラガミ、当然この世界に現れた様々な姿をした異形の怪物。

鉄でも生き物もなんでも捕食して人さえも襲う怪物だ。

そしてそれを狩るのがゴッドイーターと呼ばれる人たち。

でもゴッドイーターじゃない私達はアラガミに太刀打ちできなくあまりの無力だ。

「行き止まり!? もうだめ……」

壁に追い込まれて私がもう逃げられないと理解したのかアラガミはよだれを垂らしながらゆつくりと近づいてくる。

私のお兄ちゃんはゴッドイーターをやつていたけどある日突然いなくなつた。

みんなお兄ちゃんは死んだつていつてるけどそんなことない！

お兄ちゃんはきつと生きてる。

きつと怪我して動けなくなつてているんだ。

早く見つけてあげないと。

私はお兄ちゃんが最後に任務で出かけたという場所を調べて見つからないようにこつそり抜け出して来たけどアラガミに見つかり襲われた。

「助けて・・・お兄ちゃん!!!」

アラガミの牙が私に届こうとした瞬間

横から来たバイクの前輪がアラガミの頭に叩きつけられてアラガミが跳ね飛ばされた。

「君! 大丈夫か?」

バイクに乗つっていたどうみても人間じやない黒い人が私に声をかける。

え? ええ? なにこれ目の前に黒い怪物が? もしかしてアラガミ? でも人の言葉を喋つているけど。

「さあ早く! 早く逃げて!」

「は、はい」

なにがなんだか分からぬけど私は急いで物陰に隠れた。

「オウガテイルが一匹、まだこの近くに生き残りがいたなんて」

なるべく平穏に暮らしたいからこの周辺のアラガミは再生できないようにコアを破壊したり匿名で近くのゴッドイーターがいるフェンリルに送りつけたりして粗方始末したと思つたのに。

？  
群れで行動するオウガテイル一匹なんて群れからはぐれたのが迷い込んできたのか

どつちでもいい。

降りかかる火の粉なら倒するだけだ。

突進してくるオウガテイル。

俺はバトルホッパーを操りながら突進を躊躇してすれ違う度に蹴つたり殴つたりする。本来アラガミを構成するオラクル細胞には普通の攻撃じや傷一つ付けられないがこの姿なら攻撃は通り傷をつけることができる。

もしかしてこれもキングストーンの力なのかな。

この半年間オウガテイルの群れやザイゴートの群れに追われながら戦つて戦い抜いて今まで生き残ってきたんだ。

オウガテイル一匹なら俺とバトルホッパーでなんとかなる。

「ライダーチョップ！」

突進や尻尾から放たれる針を掻い潜り攻撃をし続ける

やがて疲れたのかオウガテイルの動きが鈍くなる。  
今がチャンスだ。

バトルホッパーを止めて降りると腰に巻いたベルトに両手の握りこぶしを当てると  
体内のキングストーンが活性化してベルトの中央が輝き出し体に力があふれてくる。

「トアア！」

両腕を曲げ構えたあとジャンプした。

「ライダー・パアアンチ!!」

右手を拳にして突き出した紅い拳がオウガテイルに当たり煙を出しながら転がる。

「ライダー・キイイック!!」

さらに再びジャンプして右足を前に出し赤い蹴りがオウガテイルに直撃して転びながらコアごと爆発四散した。

勝つた・・・

俺は着地して中腰からゆっくり立ち上がり物陰に隠れている女の子の方を見る。

俺と目があつた女の子はビクつと小さな体が反応する。

・・・そうだよね。この姿はアラガミと同じ怪物だ。

「怖かつたよね、ごめんすぐ離れるから、このあたりにはもうアラガミはいないけど危ないからすぐ家に帰つた方がいいよ」

「・・・・ま、まつてよ！」

俺はバトルホッパーに跨り発進しようしたら声をかけられた。

「た、た、助けてくれて・・・あ、あ、ありがとう！」

女の子は足が震えながらもはつきりとお礼の言葉を言つてくれた。

「私はエリナ・デアリフオーゲルヴァイデ、エリナでいいわ」

「僕はBLACK、仮面ライダーBLACKだ」

オウガテイルを倒したあと、倒れているビルの柱に横に並んで座り自己紹介をしていた。

なんだろこの女の子と黒いバツタ男が並んで座るシユールな光景。

「BLACK・・・さん？」

BLACKさんつて世紀王の正式名称であるブラックサンを思い出すな。

まあいいけど。

エリナちゃんは自分の事や家の事を話してくれた。

エリナちゃんは生まれつき体が弱く故郷の歐州の空気が合わず、遠く離れたこの極東に引っ越しをして静養していたそうだ。

そして俺もこれまであつたアラガミとの戦いやここに流れ着くまでの旅での出来事

など色々な話をした。

さすがに神様に改造人間にされてこの世界に送り込まれた事は言わずある日起きたらこの身体になつて家から追い出されたと誤魔化しておいたけど。

「ふう、んアンタも大変だつたのね」

打ち解けてくれたのエリナちゃんの言葉遣いがフランクなものになつてゐる。  
まあ気にしないからいいけどね。

「あのエリナちゃん、その・・・僕の事怖くないの?」

「ううんそりや最初見た時は怖かつたけど私を助けてくれたし話してみたら意外と普通で私を食べるつて訳でもないし今はそんなに怖くないよ」

「・・・そうかよかつた」

そう言つてもらえると嬉しいな。

「ここに来るまであまりいいことなかつたから

「ところでエリナちゃん、なんでこんな危ない所に一人でいるの?」

そう聞いたらエリナちゃんの表情が曇る。

もしかして俺、聞いてはいけない地雷を踏んだ?

「私、お兄ちゃんを探しに来たんだ」

「うん、エリックは私のお兄ちやんでゴッドイーターなんだ」

「ゴッドイーターなのか、あんまりゴッドイーターにいい思い出ないんだよね。

「エリックは華麗でとつてもカッコよくていつも私に優しくしてくれて遊んでくれたし新しい洋服を買ってもらう約束をしてくれたの」

楽しそうに話すエリナちゃん。

本当にお兄ちゃんが好きなんだな。

「・・・でもエリックが会ってくれない」

さつきまで楽しそうに話していたエリナちゃんが寂しそうにつぶやく。

「・・・みんながエリックが死んだなんて嘘を言うの、お父さんもいつも悲しそうで・・・

それって・・・。

獰猛なアラガミを相手にするゴッドイーターは危険な職業だ。

いくらアラガミに対抗できる神機をもつゴッドイーターでも命を落とす事がある。もしかしてエリックも・・・

「・・・本当は分かつてた・・・もうお兄ちゃんは生きていなって」

「エリナちゃん・・・」

エリナちゃんは現実を受け入れようとしていたんだ。

でも受け入れたら大好きなエリックが亡くなつた事を認めてしまう事になる。

それが辛くてできなかつたんだ。

僕は自分の胸に引き寄せた。

「B L A C Kさん？」

「泣きたいんでしょ？思いつきり。泣いたらいいよ。ここなら僕以外誰もいなし僕は人に会う事から絶対に喋らないよ」

「で、でも私が泣いたらエリックやお父さんが心配する・・・」

「僕はエリックさんに会つた事ないけどエリナちゃんの話を聞いていたらエリックさんも大好きでエリナちゃんが辛そだつたらエリックさんも辛いと思う。だつたらここで思いつきり泣いてエリックさんやお父さんとびつきりの笑顔を見せてあげた方がいいよ」

「エリック・・・エリック・・・わああああ！」

気の利いた言葉が思い付かなかつた僕はエリナちゃんが泣き止むまでぎゅっと抱きしめて頭を撫で続けた。

願わくは少しで早くエリナちゃんが立ち直つてくれる事を神様なんかじやなくてエリナちゃん自身の心に祈りながら・・・

つづく

# 3話

エリナちゃんが落ち着くまで待つて家に送り届ける為に僕はバトルホツパーの後ろにエリナちゃんを乗せてフエンリル極東支部通称『アナグラ』の近くまで来ていた。  
「じゃあエリナちゃん。申し訳ないけどこれ以上アナグラに近づくと見つかりそうだから僕はこの辺で失礼するよ」

幸いこの辺りはアナグラの近くだからアラガミの気配はない。

これならエリナちゃん一人でも大丈夫だ。

「うん、ありがとうBLACKさん、バトルホツパー」

バトルホツパーから降ろしてたエリナちゃんがバトルホツパーを撫でる。

そういえばバトルホツパーを紹介して乗せてあげた時、バトルホツパーが生きていると知つて驚いてたな。

エリナちゃんが泣いたあの後、泣いてすつきりしたエリナちゃんが笑顔を見せてくれた。

「うん可愛かったけど僕は□リコンやないで。

「BLACKさんも一緒に来ればいいのに・・・」

「いや僕はダメだよ。こんな姿だからね」

「ほんと人の姿に戻れたら僕もアナグラに行けただろうな・・・。

「でもBLACKさんは悪い人じやないし人間も食べないんでしょう?」

「そうだけどそれでもダメなんだ。誤解させてアナグラ全体を混乱させるわけにはいかないからね」

「でもあんな寂しい所に一人で何て・・・」

「・・・その気持ちだけで十分だよ。ありがとね」

そう言つてエリナちゃんの頭を優しく撫でる。

「うう・・・子ども扱いしないでよ」

そう言つてるけど気持ちよさそうに目を細めてるエリナちゃん。

本当にいい子だな。

「あと僕の事は秘密にしてもらえないな、それと危ないからもうあそこには来ちゃダメだよ」

「・・・うん分かってる、だれにもBLACKさんの事は言わないしもう行かない」

「ありがとう、元気でねエリナちゃん」

「こつちこそ助けてくれてありがとう、またねBLACKさん!」

手を振ったあとエリナちゃんは家に帰つて行つた。

またね・・・か、もう会う事はないだろうけど久しぶりに人と話せて僕も楽しかったよ。

エリナちゃんの背を見送り見えなくなると俺はバトルホッパーに乗り隠れ家に帰るのだった。

だがこの時の僕は知る由もなかつた。

もう二度と会う事はないと思っていたエリナちゃんに近いうちにまた再会する事になるとは・・・。

BLACKとエリナが別れたその頃。

ここはフェンリル極東支部にある支部長室。

そこに四人の人物が集まっていた。

「君達に来てもらつたのは他でもない。この半年間の間に鉄塔の森から周囲約二kmのアラガミが減少している現象が起きている」

椅子に座つているのは白いコートを羽織つた男性。

名前はヨハネス・フォン・シックザール

フェンリル極東支部の支部長だ。

「あまり考えたくないがもしかするとアラガミ同士が捕食しあっている事態が起きているかもしれない。そうなればかつてないほどの恐ろしいアラガミが誕生してしまうかもしれないのだ」

「アラガミを捕食つて共食いですよね、そんなことありえるんですか？」

モデルを思わせるようなスタイルと大胆な服装をしている女性が質問する。

女性の名はを楠サクヤ。

この極東支部のゴッドイーターの一人だ。

アラガミはその特性上捕食したものの性質を受け継ぐ性質がある。

例えば戦車などの兵器を捕食してキャタピラのような足とミサイルを放つアラガミ『クアドリガ』がいい例だ。

「ない：とは言い切れないよ、残念ながら我々はアラガミに関してすべて分かつていて訳ではないからね」

女性の質問に隣に立つ眼鏡を掛けた男がお手上げといった表情の男性が答える。

眼鏡を掛けた男性の名はペイラード・神。

アラガミ技術開発統括責任者だ。

「半年前に匿名でアラガミのコアが送られてくる事件があつたのを覚えているだろうか？」

「ああそんな事もあつたつけ、誰か知らねえが変わつた奴もいるなと思ったが…まさか？」

ヨハネスの問いに煙草の匂いのする背中にフェンリルの紋章が刺繡されたコートを着て前髪で片目が隠れた男が答える。

彼の名は雨宮リンドウ

第一部隊隊長でこの極東支部最強のゴッドイーターだ。

「そう、正確にはこの半年で送られてきたコアの数は全部で72体。調べた結果それがすべて鉄塔の森で生息していたアラガミだつたと分かつたんだ」

ヨハネスの言葉に神が付け足す。

「この二つの事態に関連性がないと言い切れん。だがどちらも半年前から鉄塔の森で起きており偶然とは思えない」

「そしてアラガミを殺せるのはゴッドイーターの神機しかいない…がゴッドイーターならコアを神機で捕食すればいい。しかしそれをせずに我々に提供するのは神機以外でアラガミを殺している事になるね」

オラクル細胞を持つアラガミは通常では傷つける事さえできず神機でしか殺せない。

「そんな、ありえない…」

これまで当たり前だったその常識が覆される事実に驚くサクヤ。

リンドウも平然を装っているが内心驚いている。

「そこで第一部隊は鉄塔の森に赴き何者が潜伏しているかを調べて捕獲、場合によつては抹殺も許可する」

「僕もヨハンと同意見の結論に至つた。ただ僕としてはぜひ捕獲を推奨したいね神機以外でアラガミを倒せる力とコアを提供してくれた知性の持ち主、実に興味深い」

嬉しそうにそして楽しそうな榊。

「りょくかい。ちよくら行つて調べてきます」

リンドウはそう言うとさつさと退室していった。

「リンドウ！まつたく…では第一部隊はこれから鉄塔の森に赴き調査を開始します」

「ああ、よろしく頼む」

慌ててサクヤがリンドウについて行つた。

「じゃあ僕も研究があるので失礼するよ」

榊も部屋から出て行つた。

残されたのはヨハネス支部長ただひとり。

「神機以外でアラガミを殺せる者…か、もしかするとそれが私の探している“特異点”なのだろうか…」

誰にも聞かれることなくそう呟くのだった。

場所は変わつてアナグラの廊下。

リンドウとサクヤが会話をしながら歩いていた。

「それでリンドウどうするの？」

「んうとりあえず会つてみない事には分からねえな、俺としては話が通じて素直に捕獲

されてくれるなら楽でありがてえんだけど」

頭をかきながらそう答えるリンドウ。

「はあ、まつたく貴方つて人は…」

呆れてため息を吐くサクヤ。

扉が開くと大広間のような広い部屋にいてそこには受付をする女性や品物を売つて  
いる男性、そして腕輪を装着しているたくさんのゴッドイーターが集まつていた。

ここはアラガミの中にあるエントランス。

アナグラの中で一番人が集まる場所だ。

すれ違う人と軽く挨拶しながらリンドウとサクヤが一組の席に向かう。

そこには高校生くらいの二人の男性と女性が雑談をし、一人の男性が壁を背に腕を組  
んでいた。

「おう、お前ら支部長直々の任務が来たぞ準備しろ」

「し、支部長直々つて！いきなりなんすか！」

「コウタうるさいよ、けど支部長から直々つて穩やかじやないですな」

黄色の帽子とノースリーブの青年が驚きのあまり立ち上がり茶髪のサイドポニーの女性が青年を窘める。

青年の名は藤木コウタ

女性の名は神咲ユウカ

二人共つい最近入隊したばかりの新人のゴツドイーターだ。

「つつても調査だからな、まあ場合によつては戦うかもしけねえが」「・・・相手は？」

「アナグラにわざわざアラガミのコア72個を送りつけてきた奇特な奴」「分かった・・・」

フードを被つた褐色の青年が壁から離れて準備を始める。

褐色の青年の名はソーマ・シックザール。

リンドウやサクヤと同じ第一部隊所属のゴツドイーターだ。

「うし、準備できしだい第一部隊出撃するぞ！」

「はい！」

「・・・大変だ、急いでBLACKさんに知らせないと！」

つづく

慌ただしいアナグラで出撃準備する第一部隊の話を聞いてしまった小さな人影がアナグラを飛び出した事に誰も気づいていなかつた。  
神喰いと神候補ゴッドイーター ブラックサンが出会うまで残り2時間。

## 4話

「どうやらあの建物が奴の根城みたいだな」

雨宮リンドウ率いる第一部隊は鉄塔の森に到着していた。

「でもアラガミが火を使うかしら？まさか食べ物を焼いて食べるんじやあるまいし」

サクヤが覗く双眼鏡の先には煙が上がるのが見えていた。

「どうだつていい、行けば分かる事だ」

神機を肩に担いだソーマが煙が出ている建物を睨んでいる。

「でも本当にアラガミなんでしようか？人が住んでいるだけなのでは？」

そう尋ねるのは新人の神崎ユウカ。

「いや、いくらなんでもこんな所に人が住んでるわけないでしょ」

藤木コウタが呆れながら否定する。

「まあアラガミだと人間でだろうと誰かいるのは確かなんだ。どちらにせよほつとくわけにはいかん、いっちょ乗り込んで確かめてみるとするか」

「了解」

ビルに入っている第一部隊。

中は薄暗く昼間でも日の光は入つてこず薄暗い廊下が続いていた。

先頭を歩くのはリンドウ。

「ちよつとコウタ押さないでよ！男なら前を歩きなさい！」

「お、俺こういう雰囲気つて苦手なんだよ」

次にユウカが歩き後ろをふるえながらついてくるコウタ。

「静かにしろ、見てみ」

リンドウが親指で窓を差し示し合図を送る。

二人が窓を覗くと焚き火に当たる人の背のようなものが見えた。

「いくぞ3・・・2・・・1・・・GO！」

「動くなゴツドイーダーだ。手を上げてゆつくりこっちを向け」

リンドウが警告するが人影は動かない。

「おい何とか言えよ」

「コウタ罠かもしれん、不要に近づくな」

リンドウが止めようとしたがコウタが神機で人影を突くとドサッと崩れ落ちた。

「なんだよこれ、ボロ布をかぶせた泥の塊じやん！」

「もしかして囮!?」

コウタとユウカが驚きの声を上げると同時に外でバイクのエンジン音が響いた。

ふつはつはつはつは！ 残念だつたなゴッドイーターの諸君。君たちの行動はこの『センシティブイヤー』でまるとはつきりお見通しだつたのだよ。

ビルの裏口からこつそり抜け出してバトルホッパーに乗り込んでいた。  
嫌な予感がしてセンシティブイヤーで周辺の音を拾つたらこつちに俺を捕まえに来る男女のゴッドイーターの会話が聞こえて急いでダミーを作つて置いて正解だつたぜ。

それにもなんでここがバレたんだろ？

もしかしてエリナちゃんが・・・。

いや違うな、あの子はそんな子じやない！

きつと他の何かが原因だ。

俺は最低な考えを振り払いバトルホッパー走らせていると。

バトルホッパーの右側面を何かが当たり爆発した。

「うおおお！」

爆発の衝撃でバトルホッパーは横にふつ飛ばされ乗つていた俺は放り出されてしまつた。

「いたた・・・一体何が？」

まさかビルに入つたゴッドイーターのほかにも仲間がいたのか。

「逃がしはしないわよ」

何かが飛んできた方を見るときれいお姉さんが煙の立つ神機の銃口をこちらに向けていた。

つてか今の神機から放たれた砲弾かよ。

そうだ、バトルホッパーは無事か？

バトルホッパーは着弾した右側面から白い煙を出していて目が点滅していた。

「バトルホッパー！」

駆け寄るとしたその瞬間。

「なっ！」

嫌な予感を感じてすぐその場から前転して移動するとさつきまで立つてた場所にお姉さんとは別のフードを被つた青年が持つたサバイバルナイフの刃のような神機を叩きつけて地面が衝撃でえぐられる。

なんて威力だ・・・まともに当たつてたら潰されてた。

「チイ・・・」

フードの青年が神機を刃先をこちらに向けて睨みつけてくる。

「変な仮面を被つてゐみたいだがお前アラガミか？」

「違う、僕はアラガミじゃない」

「・・・マーナガルム計画つて知つてゐるか？」

「いや知らないけど、何のこと？」

「そうか・・・知らねえならそれでいい」

神機の刃を物凄い速度で横薙ぎに振るう。

うあつと斬撃が一段と鋭くなつた。

あれでまだ手加減していたのか。

ゴッドダイマーはやつぱり敵にまわすと恐ろしい存在だな。

氣を引き締め直さないと。

「どうやらリンドウさんの二重作戦うまくいったみたいですね」

フードの青年と戦つていると先ほどビルに入つた女の子の声が聞こえてきた。

これだけはつきり聞こえるつて事は外に出てきたか。

「ああ、どうやら奴はコンゴウと同じで耳がすごくいいようだからな、でなければたつた一人で周辺のアラガミを駆逐なんてできやしねえ。だから本当の作戦は筆談で知らせて俺たち突入組とサクヤとソーマの外組に別れて正解だつたぜ」

「すげえさすがリンドウさん」

「褒めても何も出ねぞコウタ、それより急いでソーマ達の加勢に向かうぞ」

「はい！」

「でもなんでソーマとサクヤさんの二人なんだ？俺も外組ならよかつたんじや？そしたら怖い思いせずに済んだのに」

「アンタじや静かになんかできなくて作戦がバレるからに決まつてるでしょ  
「ひ、ひでえ俺だつて作戦中ぐらい静かにできるよ！」

「おしゃべりしてないで早くサクヤたちと合流するぞ」

「あ、はい」

リンドウつていつたか、油断できない相手だ。

仲間と合流して俺の包囲網ができてゆつくり近づいてきて距離を縮めてくる。  
そしてついに壁際に追い込まれて包囲されてしまった。

「…僕に何の用だ？ フエンリルにゴッドイーターを送られるような恨みを買った覚え  
はまつたくなんだけど？」

「しゃ、喋った！？」

「う、うそ…」

黄色の服と茶髪のゴッドイーターの二人は人間の姿じやない俺が人語を使つた事に  
驚愕の表情にある。

フードとお姉さんとリンドウつて人は冷静だ。

仮面ライダーを知らなければこの姿じやそう思われても仕方ないか。

「なあにフェンリルにコアをプレゼントしてくれたお礼を言いたくてな、ちょっと俺らと一緒にアナグラの方までおとなしく来てくれないか?」

はつきり分かる。

このリンドウって人つて一番強い、俺じや勝てない。

ふざけた口調で言つてるが要は俺を連行しに来たわけね。

マズツつたな途中からコアを破壊するのが面倒になつたからアナグラに送つてたのに・・・最初から全部壊せばよかつた。

「断つたら?」

「多少強引なエスコートになつちまうかな」

リンドウから殺氣放たれ。

ですよね、仕方ないこうなつたら。

腰に手を当てる。

警戒するゴッドイーター達。

「キングストーン! フラッショ!!」

「くつ! しまつ!」

「目が痛くて前が見えない!」

ベルトから太陽の輝きのような強烈な光が放たれ、まともに光を浴びてしまつたゴツ

ドイーサーは目を眩ませた。

キングストーンフラッシュ。

エネルギーの結晶体であるキングストーンのエネルギーを一度に放出する技だ。

この技は今回使つた目くらましだけでなく透明になつた敵ををあぶり出したり、また常識では考えられないような現象を引き起こしたりできるとつておきの技のひとつだ。

悪いねフエンリルに捕まつてモルモットにされたくなんだ。

神機なしでアラガミに対抗できる俺の力はフエンリルにとつたら喉から手が出るほど欲しいだろうし。

それにこの力の源であるキングストーンが奪われたら俺の命がないから身を守る為に奪われるわけにはいかない。

その目も時間が経てば後遺症もなく回復するよ。

「くそつまだ死にたくない！どこだ！どこだ！？」

目が見えなくなり襲われる恐怖に駆られた黄色のゴッドイーサーが見えない中、神機を撃ちまくる。

「やめろコウタ、味方に当たる」

リーダー格の男が怒鳴るが聞こえていないようで撃ち続ける。よし今のうちに逃げよう。

そう思つたその時。

「BLACKさん」

まさかこの声!?

危ないからもうここに来たらダメだと言つておいたのに・・・どうしてここに!  
声がする方を見るとこつちに駆け寄つてくるエリナちゃん。

「そこか!」

黄色のゴッドイーターが音を頼りに銃口を向ける。

射線上にはエリナちゃんがいてこのまま避けたら当たる。

マズイ、目つぶしのキングストーンフラッシュがアダになつてしまつた。

あいつ、パニックで俺とエリナちゃんの声が聞き分けられないのか。

「やめろコウタ撃つな!」

「くらえ! 怪物!」

いち早く目が回復したリーダ格の男が射線状のエリナちゃんの存在に気づいて叫ぶ  
が無情にも黄色のゴッドイーターの神機から砲弾は放たれた。

「え・・・?」

驚いて立ち止まつてしまふエリナちゃん。

このままじや砲弾が当たつてエリナちゃんが死んでしまう。

・・死なせるものか!!

そう思つたら俺の体は即座に動いた。

「トウア！」

空中で大きく前転しながら飛びエリナちゃんの前に立つ。

両手を広げてエリナちゃんを庇う為に盾となり放たれた砲弾はよりによつて急所のキングストーンがあるベルトに直撃して砲弾が爆発する。

「ぐうつうあああ!!!」

「BLACKさん！」

右膝を突き、背中か仰向けに倒れこんでしまいエリナが泣きながらBLACKに駆け寄る。

「あいつ、子供を庇つた・・・?」

「BLACKさん！BLACKさん！」

驚くりンドウの声と泣いているエリナちゃんの声がする。

弱つたな、泣かせるつもりなんてなかつたのに。

「ああ…エ、エリナちゃんが…大丈夫？怪我はない？」

涙を拭おうと手を上げてエリナちゃんの頬を優しくなでる。

「大丈夫だよ、庇つてくれから…ごめんなさい…ごめんなさいBLACKさん…」

死なないで死なないで！」

「よか…つた…」

「BLACKさん？ねえ起きて？BLACKさん！BLACKさん!!」

エリナちゃんの頬を撫でてた手が力なく地面に落ち最後に泣きながら必死で僕の名を呼び続けるエリナちゃん顔を最後に痛みで意識を失つてしまつた。

つづく

# 5話

「ううん…………ジョオオー!!」

ハアハアハア……な、なんだ夢か。

変な夢見たな。

内容はもう覚えていないけど。

懐かしいようなそうでないような。

まだ疲れてて寝ぼけているのか？

でもそろそろ起きないと……あれ、起きれない？

「……つてなんじゃこりやああ!!」

なんでベットに寝かされて鎖で縛りつけられてるんだよ。

動けないので首だけ何とか動かして左右を見ると体育館のような広さの手術室みたいな部屋。

まだ夢の中なのかこれ？早く起きないと。

「お目覚めかね？その鎖は対アラガミ防壁と同じ素材の特別製だ。たとえ君がアラガミでも切る事はできない」

ジタバタ暴れていたらスピーカーから夢の中で会つた男と同じ声が部屋全体に反響する。

・・・なんかこの声を聞いてると昔の戦友と一緒に戦つた日々を思い出しそうになる。そんな思い出なんかないのに。

落ち着け、えつと寝る前は確か・・・そうだゴッドイーターが来て。

それから戦つて、そんでもつてエリナちゃんに砲弾が・・・そうだ!?

「おい! エリナちゃんは? 気絶した僕の近くに女の子がいただろ、あの子は無事なのか?」

「まさか報告書に書いてた通り人の言葉が使えるとは・・・だがまだ自分の立場を理解していいようだな。質問をしているのはこちらの方だ君に質問する権利はない」

「うつせえ! 教えねえとおでこにフォークを刺すぞ! -こら!!」

くそ、エリナちゃんがどうなつたかを知るまでは何があつても絶対に話せねえぞ。

「あの子は無事だよ、今我々フェンリルが保護して事情を聞いている。もちろん危害なんて一切加えてないし君が盾になつたおかげでかすり傷一つしていない、だから安心してほしいな仮面ライダーBLACKさん」

ギャーギャー文句を言つていると足元から声がして頭を下に向けるとメガネの男がニコニコしてこつちを見ていた。

「榊博士、何度も言うようだが公私の区別はつけてもらいたいと言つてるのだが」

スピーカーから呆れたような男の声がする。

このメガネのおっさん、榊っていうのか。

「いいじやないかヨハン、このまま続けても押し問答が続いて時間の無駄だよ。それに彼を強引に連れてきたのは我々の非礼だ。ならまずこちらが折れて誠意を示さないとね」

うんこつちのスピーカーから流れる声のヨハンつて奴よりこつちのメガネの榊つておっさんの方が紳士的だな。

ただ手に持つているメスさえなければだけど。

メガネが照明の光で反射して怖えよ。

まあそれよりエリナちゃんが無事で本当によかつた。

「君は優しいねあの子が無事と知ると殺気が消えた。今自分が置かれている状況よりも庇つた女の子の心配をするなんて」

「そんなんじやないですよ、あの子は僕を心配して来てくれた。だから僕もあの子を心配して何も問題ないでしょ?」

「うん、まつたくもつて君が言つてる事は正論だね」

「榊博士、そろそろこちらが話をしたいのだが」

痺れを切らしたかのようスピーカーの声が割って入ってきた。

榊つて人と違つてこつちは空氣の読めねえおっさんだな。

「おつとそろそろヨハンが本氣で怒りそうだ。そうそう君の名前を我々が知つたのはあの子が言つていたからだよBLACKさんを返せつてね、あの子は話と勝手に抜け出したお説教が終わつたら親元に帰すから安心していいよ、あとこのメスは君の皮膚が固くて役に立たなさそうだ」

メスをケースにしまいニコニコと笑いながら榊は部屋から出て行つた。

「さて話は脱線してしまつたが元に戻して続けようか仮面ライダーブラック、君の本名となぜ君がそんな姿をしているか答えてもらえるかね？」

どうしてそんな姿をしているのかと聞かれてもな。

まさか神様に改造人間にされてこうなりました。

なんて言つても信じてもらえないだろうし、本名は・・・あれ？俺の本名なんだつけ

？

思い出せない、どうしてだ？

とりあえずヨハンという男には朝起きたらこの姿になつていたと誤魔化し、本名は覚えていないと話した。

それを聞いてしばらく無言だつたが『まだ聞きたい事はあるが後日にしよう』と言い、

部屋の照明を消され真っ暗になつた。

おいせめて鎖ぐらい解いてから灯りを消せよ。

まあ部屋を真っ暗にして精神的に追い詰めるつもりだらうけどこの姿の目は闇の中でも昼間の様に見えるから問題ないんだけどね。

この鎖もパワーストライプスを使つて力を入れたら引き千切れそうだ。  
でも捕まつてピンチには変わりない。どうするべきか・・・。

そういえば砲弾をまともに当たつたバトルホッパーは大丈夫なのかな?  
俺と同じようにアナグラのどこかに閉じ込められているのか。

それともあのまま放置されているのか。

もしそうならアラガミに食べられていなければいいけど・・・

あ、やっぱ・・・眠く・・・なつてきた・・・まだキングストーンのダメージが回復して・・・いないのかな。

とりあえず・・・誰か来たら・・・すぐに起きれる・・・ようしな・・・と・・・。  
睡魔に負けて俺の意識は失つて眠つてしまう。

その頃サクヤの砲撃を受けたバトルホッパーはアラガミに捕食されないようにと第

一部隊の手により回収されアナグラにある整備室に運び込まれて調査をされていた。

「うん全然わからないや、分解しようにもネジ一本見つからないし、デザインも独特でこんなバイク初めて見たよ」

スパンを持ちながらバトルホッパーを色々な角度から見て悩んでいるの神機整備担当の楠リツカ。

頭にゴーグル頬にオイルが擦れた跡とタンクトップにオーバーオールを着たユウカやコウタと同じくらいの女性だ。

「とりあえず保留かな。気になるけど先に今日使つた神機のメンテナンスを済ませないと」

リツカは持つていたスパンを片付け、灯りを落とし扉を閉めて神機が保管されてある別の整備室に向かつて行つた。

しばらくしてだれもいなくなり真っ暗になつた整備室でバトルホッパーの目が赤く光る。

バトルホッパーは生体マシン。

生きているのである。

ネジなどあろう筈がない。

少々の傷なら自ら修復することができる。

そして今！静かに息をひそめ！受けた傷を再生させながら仮面ライダー救出の機会を伺っていた。

つづく

## 6話

次の日、アナグラの会議室に極東支部の幹部クラスヨハネス支部長、サカキ博士、リンドウ、そして一人の女性が集められていた。

内容は突如現れたイレギュラー『仮面ライダーBLACK』の今後の処遇について。意見は即処刑すべきと開放すべきで割れている。

会議は荒れに荒れていた。

「アラガミを素手で駆逐するあの力がいつ我々に向けられるか分からない。 そうなる前に処刑すべきだ！」

処刑を進言しているのは女性。

彼女の名は雨宮ツバキ。

第一部隊雨宮リンドウの姉で元神機使い。

今は引退し極東支部で指揮と統括をしながら神機使いの教官として後輩ゴッドイーター達を厳しく鍛えている。

「ちよつと待つてくれ！」

「なにかな？ リンドウ君」

ヨハネス支部長がリンドウに尋ねる。

「恥をさらすようで情けねえが俺達が視界を潰されたあの状況であいつは逃げられたのに子供の盾になつて砲弾から庇つたんだ。つまりあいつには人間の心があるつて事だろ。そんな奴が人を襲うなんて俺には思えねえ」

「奴の力がいつ我々に向けられるか分からん、危険因子は早急に排除すべきだ」「アイツはそんな奴じやねえ！アイツが子供を庇う所を俺も見たし報告書にも書いてあるだろう」

「演技かもしけんだろう」

「演技？何の為だ？アナグラここに潜入する為か？だつたら捕まるリスクを背負うより忍び込んだ方がまだ生き残れる可能性がある。一緒にいた女の子の証言で人は食わないと言つていたし証言にあつたオウガテイルと今回の件であいつが人間に友好的なのは確定的だろ、だつたら早く解放してやるべきだ！」

机を叩き立ち上がりながら説得するリンドウ。

「私情を捨てろリンドウ！これは極東支部全体にかかる問題なのだと、私情で極東支部全体を危険に晒すつもりか！」

アラガミと戦う神機使いは体内にオラクル細胞で普通の人間より力は強い。  
しかしそれでも素手でアラガミを倒すことはできない。

もしアラガミと戦つてゐる時にBLACKが乱入して神機使い達を襲撃してきたら……。

そう考へると解放して放置などしておくわけにはいかなかつた。

「私情じやねえ！姿形は俺達と違うが人の心をまだ保つてゐる。いつからフェンリルは人殺しの集団になつたんだ」

「なんだと!!」

怒鳴りながら立ち上がるツバキ。

「二人とも落ち着きなさい。まず彼がアラガミかそうでないか報告を聞いてそれから考えよう」

白熱する姉弟の間にヨハネス支部長が割つて入りリンドウヒツバキも落ち着きを取り戻し席に着く。

「では榊博士、彼について何か分かつた事は？」

「結論から言わせてもらえば彼はアラガミじゃないよ」

ヨハネスが視線を榊に向けると榊がメガネを指で軽く上げる。

「ふむ、その根拠は？」

「彼が氣絶している間にくまなく調べてみたが彼のどこにもオラクル細胞はない、そしてアラガミ指数もまったくのゼロを計器が示してゐる。導き出されたこれらの答えか

「ら彼がアラガミでないとしているという事になるね」

「アラガミでないのならあの異形な姿はなんなのですか？」

もつともな疑問にツバキが訪ねる。

「それについても答えは出ている、それがこれさ」

榊が封筒から何かを取り出し机の上に広げた。

「それは？」

「彼の身体をX線で撮影してたレントゲン写真だ。ほら彼の腹部をみてござらん」

サカキが指さす先には白く丸い影が写っていた。

「この丸い石のような影から出ている触手が彼の神経すべてに結合している。あの姿はこれが原因だろうね」

「では外科手術でこの影を取り除けば彼は元に戻ると？」

「可能性はあるねヨハンだがおすすめはできない。なぜならこの影と彼の神経は完全に結合してしまっている。この石を彼の身体から取り除いたら彼は間違いなく死ぬね」

サカキ博士の報告を聞き会場が静まりかかる。

アラガミでなく人間。

その事実に会議室は先ほどと打って変わつて静まり返る。

「これで分かつたろう、やっぱりあいつはアラガミじやねえ」

「だがそれでも奴が危険な存在であることには変わりない」

BLACKがアラガミでないと知り喜ぶリンドウ。

しかしそだ納得していないツバキの一言で打ち消される。

ツバキは公私の区別がつき自分にも他人にも厳しい厳格な性格で訓練の厳しさから陰で鬼教官など呼ばれ恐れられている。

がしかしそれは教え子の命を誰よりも案じており、その厳しい態度もアラガミとの戦いに送り出した教え子達が少しでも生き残る確率を上げる為の思いがあつた。

「……ちつ分からず屋が」

姉の思いも言つてゐる危険性も頭では理解できる。

しかしそれでも感情では割り切れずリンクドウは苛立つた表情で立ちあがり頭をかきむしりながら扉に向かつて行く。

「待てどこへ行く！」

「頭を冷やして一服してくる！」

「おい待て!? 全くあいつは……」

「まあいいじゃないか少し白熱しそぎた。ここで我々も休憩を挟もう」

「……申し訳ありません」

「構わないよこの問題はデリケートな問題だからね」

榊とヨハネス支部長にツバキは謝罪し会議は一時休憩となつた。

「おう、なにやつてんだ？」

煙草を吸おうとエントランスに向かうリンドウは廊下を歩いていると部屋の前でソワソワしているユウカとサクヤを見つけて声をかける。

「ここは・・・コウタの部屋か」

『藤木コウタ』と書かれた部屋の主を知らせるネームプレートを見て事情を察した。

コウタはあの後、目が回復して自分があやうく子供を撃とうとしてた事を知りショックを受け部屋に引きこもつていた。

「さつきから声をかけているんだけど返事もないし中に入ろうにも鍵が掛かっていて」

辛そうに話すサクヤ。

「ちよつとコウタ返事くらいしなさいコウタ！」

ドンドンとユウカが扉を叩くが返事が返つてこない。

「はあ仕方ねえ先にこつちの問題から片付けるか」

リンドウが一息吐きユウカに『退いてろ』と声をかけると。  
ドゴッ!!

無言でドアを蹴破つた

「・・・」

突然のリンドウの行動に思考が追いつかず呆然とする女性陣。

「ノックはしたし入るぞ」

「・・・いやいや！ノックてレベルじゃないでしょ！・・・つてそうじゃなくて何やつて  
るんですかリンドウさん！」

立ち直り部屋に入つて行こうとするリンドウを止めようとするユウカの肩をサクヤ  
が掴む。

「ここはリンドウに任せましょう」

「サクヤさん・・・分かりました」

コウタの部屋の中でユウカはサクヤと一緒に部屋から離れていった。

凄まじい音がして何事かと他のゴッドイーター達が集まってきたが何でもないと説  
明する破目になる事を二人は知らない。

リンドウが部屋に入り暗闇の中でベットに座りうなだれているコウタを見つける。  
ドアを蹴破った時の音にも微動だにしていない。

落ち込むコウタをリンドウが見つめる。

無言でコウタの横に座るリンドウ。

「・・・怒らないんですか？」

「パニつくるのは新人にはよくあるこつた、むしろ止められなかつたりーダーの俺が悪い」

「…俺、母さんと妹の為に神機使いになつたのにあいつが庇わなかつたらあと少しで妹と同じくらいの女の子をこの手で…」

後悔に振るえて泣くコウタ。

今回のコウタの行動は報告書にも書かれてツバキからも厳重注意を受けていた。

「…今日はたまたま運がよかつた。だが次があるとは限らねえ反省して次に生かせ、いいな」

コウタの頭を手に置き軽く左右に揺らすとリンドウは部屋から出て物陰から見ているユウカを見て去つて行つた。

「さて待たしてすまなかつたね、君の処遇が決まつたよ」

数日後、起こされたベットに鎖で縛られた僕の前に立つのはヨハネス支部長、サカキ博士、初めて見る見た事ない女性、そして最後にリンドウさんだ。

「まずは紹介しておこう彼女は雨宮ツバキ。この極東支部で指揮を統括しながら教官をしてもらつていて」

ヨハネスの隣にいた女性が一步前に出る。

「雨宮ツバキだ」

「はじめして仮面ライダーBLACKです」

このツバキって人やけに敵意むき出しに睨んでくるな。

これは最悪な方向に転んだか?

処刑すると言つたらパワースライブで鎖を断ち切つて大暴れした後、脱走してやる。

こつちだつて死にたくないから大人しく殺されるわけにはいかないんだ。

俺は次にヨハネスから出る言葉を待つていつでも動けるように準備した。

「仮面ライダーBLACK、我々エンリル極東支部の仲間になつてもらえないだろうか?」

・・・え?

処刑でも解放でもなく仲間になれ?

最初この男が何を言つてるのかよく分からなかつた。

つづく

7  
話

ヨハネス・フォン・シツクザールのフェンリル極東支の加入の誘いから数日後。僕は考えて考えて考え抜いた結果、この話を受けることにした。

なれないサバイバル生活と孤独感で心が荒みかけていた僕にとつてこの話が出た時は渡りに船だつた。

でもかといってフェンリルそのものを全面的に信用したわけじゃない。

まず条件として僕の存在を本部に報告しないと約束させたらを以外にもヨハネス支部長と榎博士はあつさり承諾した。

何か二人には思惑があるのか？

まあいいそれならこちらにとつて好都合だ。

そして僕を使った命懸けな人体実験などを参加させない事。

特に体内のキングストーンを奪われたら命に関わる。

そして雨風を防ぐ部屋と神機使いと同じ金額の給料を要求し通した。

強硬手段に出て来たらさすがに敵対する覚悟あるがここで誘いを断つたらアラガミ

だけでなくフェンリルまで敵に回す事となる。

後ろ盾もないこの荒れ果てた世界でライダーの姿のままでは人間社会にも溶け込めない。

その上アラガミだけでなくフエンリルまで敵になつたら生きていくのは難しい。  
さすがにそれだけはできるだけ避けなければ・・・。

この勧誘の裏にはアラガミに対して少しでも戦力が欲しいフエンリルの・・・いやヨハネス支部長の思惑がある事を榎博士から聞かされた。

僕の力がいつ極東<sup>自 分 達</sup>支部に向かれるか分からぬ。

僕の抹殺を推進するリンクウさんのお姉さん率いる処刑派と僕を信じて釈放を望むリンクウさん率いる解放派の議論は平行線で真っ向対立。

極東支部で神機使い達に影響のある二人がこのまま仲たがいしてしまえば極東支部は二つに割れる。

そこで妥協案として僕の首に爆弾付きの白いチョーカーを付けてフエンリルと敵対したら僕を爆弾で始末する案が実行された。

スイッチを持つのはヨハネス支部長と榎博士の二人。

リンクウさんのお姉さんもスイッチを持つ事を要求したそうだがヨハネス支部長から処刑派だった君に安易に使われたら困ることで却下され悔しい思いをしたらしい。

話を聞かされずいぶんと身勝手な理由だと思った。

怖いのは分かるけど僕はフェンリルに敵対する気は一切なかつたのに。  
だがこちらにとつてもメリットがないわけじゃない。

まだライダーの技と力をまだすべてを引き出せていない今の僕はゴルゴムと戦つた  
仮面ライダーBLACKに比べたらはつきりいつて弱い。

今の僕の強さは大人の熊とほぼ同じくらいの大きさでそれ以上のオウガテイルやサ  
イゴートのような小型アラガミとようやく互角といつた所だ。

だがこの世界には小型アラガミより大きく強い中型や大型、さらには堕天種や接触禁  
忌種、最も恐ろしい指定接触禁忌といった凶暴で強いアラガミがウジヤウジヤいる。

そんなアラガミと対峙した時、僕は確実に捕食対象になつてしまふのは間違いない。  
だがアラガミ退治専門のフェンリルに入れれば独学では限界だつたアラガミに対する  
知識も増え、格闘経験もない素人の僕でも専門の特訓で戦い方や体の動かし方を学べば  
今よりさらに強くなれると判断したからだ。

かつて甲羅の硬い力ニ怪人にライダーパンチを破られ特訓した強化ライダーパンチ  
で甲羅を破り力ニ怪人を倒した本物の仮面ライダーBLACKのように。

フェンリルが僕を利用してアラガミを狩ろうというなら僕の方もフェンリルの組織  
力を利用してやる。

アラガミはもちろんだが僕には目標があるので弱い今まで簡単に死ぬわけにはいかない。

強くなつて天寿を全うした時、目の前に現れるであろう僕を改造人間に変えたあの神共をぶん殴るという目標が！

次の日、僕は第一部隊と顔合わせの為に榎博士の研究室に来ていた。

「で、これがそのチョーカーですか？」

榎博士から説明を聞かされた僕は白い革製の留め具が狼の牙の形になつていて、チョーカーをベタベタ触る。

素材がいいのか付けている違和感もない。

「おつとあまり触らない方がいい、無理に外そうとしても爆発する仕組みだからね」

「げっ！」

相変わらず微笑んでいる榎博士のとんでもない言葉を聞き慌ててチョーカーから手を離す。

第一部隊メンバーの同じ年くらいの男女二人が慌てて僕から離れてた。  
リンドウさんとお姉さんとフードの人、爆発して巻き込まれるかもしれないのに動じてない。

「これが修羅場を潜り抜けたベテランの神機使いなのか。

「すまねえな、姉上を説得できなくそんな物騒なモンを首に巻く破目になつて」

リンドウさんが申し訳なさそうに頭をかく。

「そんなリンドウさんが頭を下げないで下さいよ、このままだと極東支部は俺の所為で崩壊してたし、それに俺がこんな姿でしかも素手でアラガミを引き裂く力まで持つてます。怖がつて警戒するのは当たり前ですよ」

「しかしょ……」

まだ申し訳なさそうなリンドウさん。

いい人だな。

「それに屋根と壁があつて食べ物も出して貰えるんです。あそこで生活してた頃に比べたら天国ですよ」

「おまえ……ああ分かつた、これからもよろしくなダチ公」

そう言つて俺の胸を叩くリンドウさん  
ちよつと痛い。

「私は橘サクヤ。これからよろしくねライダー君」

「こちらこそよろしくお願ひします」

「俺は藤木コウタ……あの時あんたの事を撃つてごめん、そしてあの女の子を助けてく

鉄塔の森

れてありがとう」

あの時？…ああ、砲弾を撃った奴か。

「僕が助ける為にやつたことだから気にしなくていい、それより謝るならエリナちゃんに謝つてくれ」

「エリナちゃん…ああ、あの子にはきつちり謝つて許してもらつたよ」

許してもらつたか…

あんな怖い思いしてエリナちゃんは簡単に許したのか分からぬけど後は当人同士の問題だから僕がこれ以上踏み込んで出しやばる訳にはいかないな。

「…そうか分かつた、よろしくコウタさん」

「コウタでいいよあとで一緒にバガラリー見ようぜ」

右手を出して握手を求める。コウタもその手を取つて握手をする。

「コウタ、どさくさに紛れてアンタの趣味に無理やり巻き込まない、私は神咲ユウカよろしくねライダー」

「ソーマだ…ようこそクソツタレな職場に」

笑顔のユウカさんとぶつきらぼうなソーマさんの紹介が終わり、第一部隊との顔合わせが終わつた。

「あと、はいこれ」

「これって腕輪？」

榊博士が机の引き出しから赤い腕輪を取り出して僕に渡す。  
確か神機使いの人はみんな付けてたな。

「榊博士、まさかそれは？」

どうしたの？サクヤさん、この腕輪になにか？

「おっと誤解しないでほしい、その腕輪は本物じやなくて本来の機能をオミットして  
ビーコンと通信機だけ内臓した模造品なんだ。少なくとも知らない人が君の力を見て  
もその腕輪を見たら神機使いと錯覚して無用な誤解が減ると思うよ」

ん？『だけ』って事は他の神機使いの腕輪にはなにか別の機能があるのか？

「あとこれは僕からの入隊祝いだよ」

僕の疑問を遮るように榊博士が箱から折りたたまれた黒色の革ジャケットと赤いマ  
フラー、黒の革ズボンを取り出した。

「君がフェンリルに少しでも早く馴染めるようにサイズに合わせて用意したんだ。よ  
かつたら着てみてくれないかな」

榊博士、そこまで考えてくれたんだ。

なら断る理由なんてないじゃないか。

「ありがとうございます」

僕はズボンを穿き、背中にフェンリルの紋章が入ったジャケットに袖を通しベルトは外に出したいので前は閉めず、赤いマフラーを手に取つて見てみる。

赤いマフラーか。

そういえば最初の仮面ライダーである仮面ライダー1号も首に赤いマフラーを卷いていたな。

あまり信じている方じやないけどなんだか運命的なものを感じる。

「どうかしたのかい？ マフラーはチョーカーを隠せたらいいと思つて用意したがもしかして気に入らなかつたかい？」

いつまでもマフラーを付けず手に取つてじつと見て動かない僕に榎博士が声をかけてきた。

「あ、いえそんなんじやないです。ちょっと赤いマフラーには思い入れみたいのがあつただけですからあんま気にしないでください。」

爆弾チヨーカーが隠れるようにマフラーを巻いてそして最後に貰つた飾りの腕輪を左手首に付ける。

右側だとライダーパンチした時に壊しそうだから左側に付けるか。

左手首に付けて眺めて見る。

意外と軽いな。

「これなら戦つてゐる時に邪魔にならないですみそだ…。」

「どう…でしようか？」

両手を広げながら恐る恐る聞いてみる。

似合つてないつて言われて笑われたらどうしよう。

「おう、バツチリだぜ」

「よく似合つてるわよ」

「カツコいいぜ」

「ええ、とつても」

よかつたリンドウさんとサクヤさん、コウタとユウカが褒めてくれた。

なんか久しぶりに人の温かさに触れて泣きそう。

「そうそう、その服はアラガミ纖維でできているからちよつとやそつとのアラガミの攻撃じやまず破れないから思いつきり動いても大丈夫だよ」

「ええ！い、いいんですかアラガミ素材つて結構貴重なものなんじや？」

あ、ユウカさんとコウタが驚いてる。

つて事はやっぱ貴重なもんなんだ…。

そんな貴重な物を簡単に渡していいのかな。

「大丈夫、素材はその為に僕がリンドウ君に頼んで集めてもらつたんだ、お礼ならリンド

ウ君に言つてあげなさい」

「リンドウさんが！」

榊博士の言葉に僕とユウカとコウタがリンドウさんの方を見る。

当のリンドウさんは嬉しそうに笑っていた。

「リンドウさん、ありがとうございます」

リンドウさんに對して感謝を込め頭を下げる。

「気にすんなよBLACK、巻き込んじまつたせめてもの詫びだからどうつてことねえよ」

リンドウさんが僕の肩に手を置く。

「ようこそフェンリル極東支部、通称『アナグラ』に」

榊博士がそう言い第一部隊のみんなが笑顔で迎えてくれた。

これで僕はフェンリルに入隊したんだな。

もう後には引き返せない。

そうだ僕はもう元の世界に帰る事も普通の人間に戻る事もできないんだ。

ならGE世界初の本当の仮面ライダーになつて人類の自由と平和の為に戦つてやる。

かつての歴代ライダー達がそうしてきたように。

新たな誓いを胸に色々とトラブルがありながらもアナグラでの新たな生活がはじ

まつた。

づく

## 8話

榎博士の研究室で服と腕輪を貰い第一部隊と挨拶済ませた僕は他の部隊や職員の方々と挨拶する為、エントランスに移動していた。

「な、なんだよあれ？」

「ほんとうに人間なのか？アラガミじやないのか？」

黒い革のような皮膚に紅い複眼、二本の触覚が生えている見た目がバッタの姿である仮面ライダーBLACKの姿の僕を見てザワつく神機使いや職員達。

混乱を防ぐ為に榎博士とツバキ教官から僕が人間とは違う姿の理由は非合法な組織に誘拐され改造された結果だと説明された。

まあ改造してくれたのは組織じゃなくて神様だけどね。

神機使いや職員達は噂や話が流れていたようだが実際にその姿を見たら動搖を隠せないようだ。

アナグラでは神機使いの神機は保管室で保管している。

もし神機を持つていらないアナグラの中で襲われたら命がないと考えていた。特に戦う力のない一般職員は恐れているのが見ていて分かる。

安全策に首に爆弾を仕掛けられているとはいへ彼らからしたらいつ爆発するか分からぬ爆弾を抱えるようなものだからな仕方ないか。

見た目は人間サイズの黒いバッタだもんな。

早く人間に戻りたい。

人間に戻れる方法をサカキ博士も協力してくれて言つてくれたけど自分でも探さないとな。

「今日から一緒に極東支部に入隊する仮面ライダーBLACKです。よろしくお願ひします」

僕に対する反応はそれぞれ様々だ。

「大森タツミだ。よろしくな」

「台場カノンです、よかつたら私の作つたクッキーですけど食べてください」「ブレンダン・バーデルだ、期待しているぞ」

僕を素直に受け入れてくれる人達。

「雨宮ツバキだ、この極東支部に来たからには勝手な事はさせんから覚悟しておけ」

「ジーナ・ディキンソンよ、ふふ知つてる? 狼<sup>フエンリル</sup>は獲物を仕留める時、自分の牙を相手の喉笛に突き刺して仕留めるの。あなたの首にある狼の牙がそうならないよう気を付

けなさい」

口では歓迎しているが警戒している態度の人達。

「カレル・シユナイダーだ。いい金儲けの話があつたら隠さず話せ怪物」「…小川シュンだ。化け物が服着て人間の恰好しても化け物には変わりねえよ」

明らかに敵意を向けてくる人達それぞれだつた。

まあしかたないかと思つていたら、僕を罵倒したカレルさんやシュンさんに對してコウタとユウカが怒つてくれた。

…ありがとうコウタ、ユウカ。

僕も化け物と言われて慣れたと思つたけどやつぱり傷つかないわけない。

だから庇つてくれる仲間ができて嬉しいよ。

色々あつたけど受付のヒバリさん、万事屋さん、清掃のおばちゃん、極東支部にいる職員すべての人と挨拶を済ませる。

受け入れてくれた人もいたけど大半の職員にはやつぱ怖がられてるな。

「BLACKさん…」

挨拶を済ませた後、一人座ついたら僕が目覚めた事を知つたエリナちゃんがやつてきた。

「エリナちゃん！大丈夫だつた？」

立ち上がり声を掛ける。

サカキ博士は大丈夫と言つていたけどやつぱり直接見ない事には安心できなかつた。

「BLACKさん！」

僕の顔を見た瞬間大泣きしながら抱き着いて來た。

泣きながら「ごめんなさい」「ごめんなさい」と何度も謝つてくる。

そつか僕が庇つて捕まつた事を自分の所為だと気にしてたんだな。  
僕はもう大丈夫だよ僕こそ心配かけて「ごめんね」と前と同じように泣き止むまで何度も頭を撫で続けた。

「君がBLACK君か」

今の時代に珍しい裕福そうな男性が声をかけてくる。

娘つて事はこの人はエリナちゃんのお父さんか。

「娘を助けてくれてありがとう、君が助けてくれなかつたら息子に続いて娘まで失う事になつていて本当にありがとう」

僕の右手を両手で握手される。

「・・・あの俺が怖くないんですか？」

今で会つた人は僕の子の姿に恐れ、怖がつていたのこの人は怖がつていない。

「どんな姿であろうと娘の恩人が怖いわけないだろう。それに華麗なフォーゲルヴァイ

デ家の人间が噂や姿形だけで物事を判断するなどしない」

握手している手に力が籠められる。

力を籠める事で怖くないと証明しようとしてくれてるんだ。  
エリナちゃんのお父さんもいい人だな・・・。

そしてお父さんから極東に来た理由とエリックさんの事を教えてもらえた。  
エリナちゃんは今は完治しているが生まれつき体が弱く欧洲の空気が合わず、遠く離  
れたここ極東で病気療養していた事。

そして兄のエリックさんは一人で療養する妹が寂しがらないようにそしてエリナ  
ちゃんをアラガミから守る為に貴族の家督を捨て神機使いになつて欧洲地区から極東  
支部に転属したそうだ。

エリナちゃんの為にそこまでできるなんて並大抵の覚悟ではできない。  
すごいな素直に尊敬する。

エリックさんつて立派な人だと・・・。  
一度会つてみたかつたな。

「おいなんだあれ？」

「なんだろ？」

エリナちゃん親子と雑談していたら周りが騒がしくなつた。

「えっと・・・またバツタ?」

「だ、誰も乗つてない無人のバイクがエレベーターに乗つて出てたぞ!」

「アラガミの襲撃か!ヒバリちゃんは俺が護る!」

あわてふためく神機使いや一般職員さん達。

「あれは調査中だつたバイクだ!なんでここに?」

リツカさんの声を聞き僕の頭の中になにかが走る  
バツタ・・・無人のバイク・・・まさか!?

「すみません、ちよつと失礼します」

いやな予感がしてエリナちゃんのお父さんと別れ、人ごみをかき分けて騒ぎの中心で  
あろう前に出てみる。

そこには僕の愛車バトルホッパーがエンジン音を鳴らしウイリーしながら首を左右  
に振り前輪で威嚇していた。

「バトルホッパーだあ!」

後ろからついて来たエリナちゃんが嬉しそうに声を上げる。

『ファファファ』

エリナちゃんの声で僕に気づいたバトルホッパーが前輪を下ろし目を点滅させながら  
僕に近づいてすり寄ってくる。

うん、バトルホッパーだね。

でもなんでバトルホッパーがここに？

周囲はアラガミ防壁に囲まれていて警備は厳重でエリナちゃんが使った抜け道はもう使えないのにどうやつて入ってきたの？

「あ、そういうライダーのバイクを回収してたの本人に伝えるの忘れてた」

「ちよつとリンドウ！」

騒ぎに駆けつけたリンドウさんと伝え忘れてた事に怒るサクヤさん。

リンドウさん、ちゃんと教えてよ・・・

その後バトルホッパーをなんとか宥めて生体マシンだと説明して迷惑をかけた事を謝罪した。

リンドウさんが伝え忘れてた事も発覚した為、責任の半分はリンドウさんに向けられバトルホッパーもなんとか受け入れてもらえ多少トラブルはあったが極東支部に無事入隊する事ができた。

ただ目をキラキラした榎博士に質問されまくり、リツカさんが分解して調べさせてくれと言われたが丁重に断るのが大変だった…。

つ  
づ  
く

## 9話

フエンリルに所属してから数日が経ち、僕は新人ゴッドイーターがフエンリルに配属してすぐに受ける基礎体力の強化と基本戦術のカリキュラムを受けていた。

何でアラガミを倒してきた僕が今さらアラガミを倒すカリキュラムを受けているのかと思う人がいるだろう。

現にコウタとユウカにもそう言われた。

でも駄目なんだ。

我武者羅だけじやこの先を生き残れない。

なぜなら素人の僕はアラガミや神機使いの事、力の使い方に関してまったく知識がないからだ。

前半の二つはとにかく力の使い方というのは例えば一人で五体のアラガミを相手にするとしたらどうすればいいかと聞かれたとしよう。

答えは簡単だ。

四体倒して余力を残した状態のまま最後の一體を倒す。

これが模範解答だろう。

だが現実は計算式のようにそう簡単にはいかない。

アラガミと一言で言つても種類は多く小型から大型の大きさ、火や水や雷や毒針などの攻撃方法、そして強さも多種多様だ。

例えは最初から全力でいって強い四体を倒せたとしてもスタミナが無くなり疲労で動きが鈍つた所を最後の弱い一体目に潰されてしまうかもしれない。

また不測の事態として六体目が現れる可能性があるかもしれない。

つまりいかに力を温存しつつ己の力を理解して一番弱いアラガミを見抜き、弱点を突いて効率的に倒す術を学ぶ為にカリキュラムを受けることにしたのだ。

昔の人は言つていた。

敵を知り己を知れば百戦百勝

実際その通りだと思う。

知識による想像力は力だ。

想像力が増えればそれだけ対処方法が広がる。

これは極東支部に来る前にあつた半年間のサバイバル生活でアラガミとの闘いで殺されそうになりながらもピンチを切り抜けて導き出した答えだ。

午前中は講師に榎博士を迎へ、博士の研究室でのアラガミの生態に関する講義を受け  
る。

これには僕の他にコウタとユウカも参加していた。

「さて、いきなりだけど・・・ライダー君はアラガミってどんな存在だと思います？」

「誰かが人工的に造った生物兵器の生れの果てかなと思つてます」

榎博士が訪ねてきたので思つていた事を素直に応える。

「なるほど実際に面白い発想だね」

「いやいや発想がぶつ飛びすぎだろ」

「そうよ一般的には『人類の敵』『絶対の捕食者』『世界を破壊するもの』って認識されるのに生物兵器って誰が造つたって事になるし造つた人はまともじやないわ」

コウタとユウカは納得できないようだ。

でもまともじやないから例え神様でも善悪とか倫理感とかなしで命を弄ぶ行為を平気でやれるんだよ。

まあ実際に体験してみないと分からぬから仕方ないか。

「いやいやライダー君もユウカ君も認識としては間違つていない、むしろ、目の前にある事象を素直に捉えられている」

「でもさすがに生物兵器はさすがに・・・」

「じゃあ、ユウカ君は何故どうやつてアラガミは発生したのか？って考えたことはあるかい？」

「なぜ発生した……ですか？……すみません考えたこともなかつたです、突然世界各地に現れたので……」

「そう君達も知つての通り、アラガミはある日突然現れて爆発的に増殖した。まるで進化の過程をすつ飛ばしたようにね」

だからあえて生物兵器だと言つた。

どう考へても進化論を無視してゐるから自然に発生したとは考へられないからな。

「ふあああああ……なあなあ、この講義なんか意味あんのかな？アラガミの存在意義なんかどうでもよくね？」

講義に飽きたコウタがつまらなさそうにボヤいてゐる。

けどなコウタ、知識は応用して工夫すれば弱点を探す武器になるんだよ。

特に命懸けな神機使いならなおさらだ。

なにがどう役に立つか分からないから覚えていて損はない。

それに誰にも話す気はないけど別の世界から來た僕が世界に來た時はすでにアラガミは存在し世界は荒れていたんだ。

だからアラガミの存在意義には興味がある。

「コウタ、マジメに聞きなさいライダーの邪魔になるでしょ」

「そうかね？アラガミには脳がない心臓も脊髄すらもありはしない」

「うわ！」

榎博士がいつのまにコウタに近づいていた！  
え？ クロツクアップ？ ポーズ＆リストアートしたの？

いや違うな、改造人間は人間と異なる時間軸で生きているから停止系の技は効かな  
いって本編BLACKの中で言つてたし。

じやあ普通に移動した事だよな。

気配を一切悟らせないなんて。

榎博士ほんと何者だよ・・・。

「私たち人間は頭や胸を吹き飛ばせば死んじやうけどアラガミはそんなことでは倒れな  
い。アラガミは考え、捕食を行う一個の単細胞生物——『オラクル細胞』の集まり・・・  
そう、アラガミは群体であつてそれ自体が数万、数十万の生物の集まりなのさ」  
・・・改めて聞くとアラガミってほんとにとんでもない存在だよな。

細胞一つ一つが意志をもつて いるんだから。  
まるで知能を得たアメーバだ・・・。

「そしてその強固でしなやかな細胞結合は既存の通常兵器では、まつたく破壊できな  
んだ。じやあキミたちはアラガミとどう戦えばいいんだろうね？」  
「えっと、それは神機でとにかく斬つたり撃つたり・・・」

慌てふためくコウタが身振り手振りで説明する。

そんな焦るコウタのあらかさまな態度に呆れるユウカ。

「そう結論から言えば同じオラクル細胞が埋め込まれた生体武器『神機』を使ってアラガミのオラクル細胞結合を断ち切るしかない・・・と今までそう思っていたが例外が現れた」

サカキ博士が僕を見る。

すみせませんね、『オラクル細胞なしでアラガミを殴り飛ばす例外』を作つてしまつて・・・。

僕の不貞腐れた態度に苦笑するユウカとコウタ。

「だがそれによつて霧散した細胞群もやがては再集合してあらたな個体を形成するだろう。彼らの行動を司る司令細胞群・・『コア』を摘出するのが最善だけど、これはなかなか困難な作業なんだ。」

そういうえばサバイバル時代に倒したアラガミのコアをフェンリルに一つ一つ送つてたけどあれ結構めんどくさかつたからな。

途中からはコアもそのまま碎いていたけどあれでも完全に死んでいないのか・・・。完全に人類は追い詰められてるな。

どうすればアラガミを完全に死滅させることができるんだろう。

ほんと厄介な生物だよ。

「神機をもつてしても、我々には決定打がない。いつのまにか人々はこの絶対の存在をここ極東地域に伝わる八百万の神に喻えて『アラガミ』と呼ぶようになったのさ」

神様もアラガミと一緒にされるなんてとんだとばつちりだな。

まあ俺の知ってる神も結構ゲスかつたけど。

くつ、あの顔を思い出したらなんかムカムカしてきた。

「さて今日の講義はここまでとしよう。アラガミについてはターミナルにあるノルンのデータベースを参照しておくこと、いいね？」

講義を聞き終わりユウカはアラガミについて考えコウタがやつと終わつたかといった感じであくびをする。

そして僕は今日教えてもらった事を復習して午後からの実技訓練に備えるのだつた。

午後の時間はツバキ教官から過去のデータを元にしたホログラムのオウガテイルの形をしたダミーアラガミと戦う基礎訓練を叩きこまれていた。

「どうしたライダー、そんな事では命がいくらあつても足りんぞ！もつと機敏に動け！」

「は、はい！」

「返事する暇があるなら体を動かせ！」

ツバキ教官の特訓は過酷の一言だつた。

なにしろ格闘経験もない素人の僕が一から鍛えるのだ。  
楽な訳がない。

ホログラムのダミーアラガミと戦いながらツバキ教官からチームでの戦いの立ち回り方や力の使い方を習う。

・・・死ぬ！ 実戦前に絶対死ぬ！

なんだよオウガテイル十匹にコクーンメイデン十匹つて！

こつちは俺一人だぞ。

いくら訓練用のホログラムだからって体に受けた痛みは本物で結構痛いんだ。

「何をやつている！ そんな事で実戦で生き残れると思つてるのか！」

ツバキ教官が怒鳴ると共にオウガテイルの尾から針を飛ばし、コクーンメイデンが上空に撃つたジャベリンが俺目掛けて降つてくる。

やばいこのままだと直撃する。

こうなつたら・・・！

「キングストーンフラッシュ！」

拳をベルトのバツクルの上で重ね、バツクルから光とエネルギーが放出され針やジャ

ベリンが跳ね返されてオウガテイルやコクーンメイデンに逆に突き刺さる。

跳ね返った針が目や体に刺さり痛みで苦しむオウガテイルの群れ。

コクーンメイデンの群れも同様にジャベリンが突き刺さつていて怯んでいる。

「今だ！」

バイタルチャージをしてエネルギーを溜めるとアラガミの群れめがけて突撃する。

まずはやつかいな固定砲台のコクーンメイデンから潰す！

コクーンメイデンは動かないけど連携されたら厄介だからオウガテイルよりも先に潰すした方がいい。

「ライダーチョップ！」

動きの鈍つたアラガミの群れに飛び込み赤く輝くチョップがコクーンメイデンの身体を切り裂く。

「ライダーパンチ！」

次にひるんでいるオウガテイル十四の頭部にライダーパンチを浴びせて駆け抜ける。

バジ・・・バジ・・・バジ・・・

切り裂かれたコクーンメイデンと頭部が陥没したオウガテイルの群れは消滅してい

く。

ツバキ教官いわくこのホログラムは設定したダメージを与えると自動的に消える仕

組みらしいからだ。

「ハアハアハア・・・」

自分の右手を確認する。

パンチもチョップの威力も訓練の成果で以前よりパワーアップしている。

以前はオウガテイル一匹を倒すのにライダー・パンチとライダー・キックを浴びせてやつとだつたのに・・・。

でも今はたつた一発のパンチで倒すことができた。

間違いない・・・この身体も本編BLACKと同じで戦えば戦うほど力が増して強くなっていくんだ。

でも力を増せば増すほど俺は人の枠からかけ離れていく。

「よくやつたライダー、今日の訓練はほぼ完璧だ。だが慢心するなよ今の貴様はようやく羽根が生え始めたヒナ鳥だ」

「・・・ありがとうございます」

肩で息をしてながら特訓室から出て通路を歩きながら先ほどの実戦訓練を思い出す。

『化け物』『怪物』

その言葉が頭をよぎる。

僕はこれからどうなつていくんんだろう・・・。

つづく

# 10話

僕、仮面ライダーBLACKはフェンリル極東支部ことアナグラで榎博士の講義やツバキ教官からの戦闘訓練といった研修を受けていた。

研修が終われば民間の協力者として改めてフェンリル極東支部に所属し討伐増援の任務を行なう事となる。

しかし正式な異動が決まるまでのしばらくの間は雑用を手伝つたり休日はコウタとユウカさんとバガラリーを見たりやソーマやリンドウさんやサクヤさんに同行してミッショングに参加したりする毎日だ。

ここ数日の研修の間に実力や人柄を認められて畏怖していたツバキ教官や第一部隊と第二部隊以外の神機使い、怖がつていた職員さん達から徐々に受け入れられている気がする。

そして地獄の研修と見習い期間が終わり臨時として手が足りない部隊に回ることになり本当の戦いが始まつた。

今日の任務は大森タツミさん率いる防衛班『第二部隊』と共にアラガミ防壁を突破して中央施設に収容できない住民の住む外部居住区に侵入したアラガミの駆逐と住民を

護る緊急任務だ。

外部居住区は中央と違ひ約13万人の人々が掘つ立て小屋を建て配給や他の住民と物々交換をしながら暮らしている。

みんなアラガミに苦しめられながらも落ち込むことなく逞しく活氣があふれ必死に今を生きてるんだ。

そんなささやかな幸せをアラガミなんかに滅茶苦茶にされてたまるか。

俺はバトルホッパーで現場に急行し少し遅れてジープに乗った第二部隊が到着する。

現場に着くとオウガテイル3体とコンゴウ1体が家を破壊して瓦礫を捕食しながら暴れていた。

「あいつら！ よくも」

「落ち着け、まずは住民の避難からだ」

「は、はい」

普段調子のいいタツミさんが本気の顔になつてゐる。

そうだ、まずは逃げ遅れた住民の安全が最優先だ。

このヒリヒリするこの空氣と緊張感。

一人の時にはなかつた。

これが本当の実戦…。

俺とカノンさんが囮になつてアラガミを引き付けてその間にタツミさんとブレンダンさんが住民の避難誘導を行う。

本来なら新人の俺が危険な囮でなく避難誘導係にまわるべきなのだが俺の姿を見て住民が混乱して怖がるといけないので俺が囮になると進言した。

俺を仲間と思つてくれているタツミさん達はあまりいい顔しなかつたが説得して分かつてくれた。

こればかりは仕方ない。

そしてアラガミ達を引き連れて戦うには十分のスペースがある広場に誘い込んだ。カノンさんの神機は射撃の遠距離型の神機だ。

前のミッショングで第一部隊のサクヤとミッショングを行つた時立ち回り方は習つた。遠距離型の神機使いとペアを組む時の戦いの方は近距離パワーファイターの俺が陽動して遠距離神機使いが後方からバツクアップ。注意すべき事は先行しすぎないようにして支援の射程内で戦う。これが基本戦術。

これでいいかと思つたんだけどな・・・。  
背中痛い・・・。

「住民の避難は完了した、あとは合流してアラガミを叩くだけだ」

「すぐそつちに行くから待つてろよ」

俺の左手首にあるダミー腕輪から通信が入る。  
ブレンダンさんとタツミさん達からだ。

その後タツミさん達と合流してアラガミを迎え討つ。

「ブレンダン、取り囮むぞ！」

「了解した」

まずとタツミさんとブレンダンさんが一匹のオウガテイルにショートブレードを突き刺し、バスター・ブレードを振り下ろしオウガテイルは血を拭き出しながら息絶える。まずは一匹・・・。

「アハハハハ！くたばれ!!」

「ライダーアパンチ!!」

性格が豹変しているカノンさんの援護射撃とライダーパンチで2匹目を倒す。

二匹目！

「ライダーチョップ！」

バトルホッパーに乗り猛スピードで走り出しすれ違いざまに紅く光るライダー・チョップをオウガテイルの足に叩き込み体勢を崩す。

「タツミさん今までです！」

「おうよ！」

ブレークを掛けてターンして僕の声を聞いたタツミさんが倒れている最後のオウガテイルに飛び移り頭部にショートブレードを突き刺し止めを刺した。よしこれでオウガテイルはいなくなつた。

あとはコンゴウを倒すのみ。

オウガテイル3匹が倒されてなおコンゴウは怯まず寧ろ戦意が高まつていた。

コンゴウ・・・ノルンのデータベースによれば、巨大な猿のようなアラガミで武器は肉弾戦を得意とする打撃と俊敏な動きで転がりながらの突進して襲いかかってくる。

また背中には遠距離攻撃用のパイプが付いていてこのパイプ状から空気を体内に摑り込み空氣弾を発射するだつたな。

耳がよく、音に反応してすぐ集まる為、集団で来られると厄介このうえないが幸い一匹だけのようだ。

「トオ！」

ハイキックでコンゴウの腹部を蹴り上げる。

「トオ！トオ！」

次にパンチとキックの連打を頭部と腹部に浴びせる。

負けじとコンゴウも拳で殴りかかつてくる。

「なんてすごい力だ……」

コンゴウの拳をなんとか捌きながら何とか距離をとる。

当たればライダーとはいえただじやすい。

コンゴウを結合崩壊を起こせるのは三か所。

尻尾と背中のパイプ、そして顔に付けてる仮面だ。

「ハアアアアア!!」

「アハハ背中のパイプ壊れちゃったねえ!?」

そのうちに尻尾はブレンダンさん、パイプはカノンさんが破壊してくれた。

あとは仮面のみ。

尻尾とパイプが破壊され逆上したコンゴウが見境なしに暴れ出す。

マズイこのままだと被害が広がる。

けど疲れまわるコンゴウに近づくこともできず頭に血が昇つて痛みを感じていないのかカノンさんの射撃も効いていない。

「だつたらこうすればいいのさ」

タツミさんがコンゴウに向かつて走り出す。

「タツミさん無茶だ！」

「まあ、待ていいから見てろ」

「ブレンダンさん？でも・・・」

タツミさんを止めようとした逆に僕がブレンダンさんに止められる。

「あらよつと！」

タツミさんはコンゴウが薙ぎ払つて起こす散弾のように飛んでくる無数の細かい瓦礫の破片を目にも止まらない速さで回避し生身の身体で当たれば即死するであろうコンゴウの巨大な拳を掻い潜つた。

そして・・・

「おりやああ!!」

そして下から上に振り上げる一撃がコンゴウの顔にある仮面を壊し最後の結合崩壊を起こした。

すごい・・・

僕はその動きに思わず見とれてしまった。

これがベテランゴッドイーターの戦い方・・・。

「仮面ライダー今だ！」

「はい！トウ!!」

ライダージャンプで高く跳ぶ。

タツミさんが作つてくれたチャンス無駄にはしない。  
いくぞこれが特訓の成果だ。

「ライダー・キック！」

仮面を破壊され怯んでいる所に訓練で編み出した新ライダー・キックを顔面に叩きこむ。

今までのライダー・キックは右足を突き出し蹴るだけの技だつたけど新ライダー・キックはバイタルチャージしてジャンプしたあと空中で右足を曲げて相手に当たる瞬間思いつきり蹴り出す技だ。

右足を曲げるのは屈伸運動を加える事でジャンプした時の地面を蹴る力が従来のライダー・キックの威力にプラスされて威力が数倍にはね上がつていて。

ありがとうございますツバキ教官。

「お前のジャンプ力は他の神機使いにはない目を見張るものがある、それをキックに活かしてみせろ」

教官が僕にそうアドバイスをくれたおかげです。

着地すると断末魔を上げ赤い炎に包まれながらコンゴウは爆発四散した。

榎博士の講義どおりならこれでもオラクル細胞は死滅してないんだ。

いずれあのコンゴウだったオラクル細胞も時間が経てば新しいアラガミになつて甦

るんだろうな。

どうすればこの負の連鎖を断ち切る事が出来るんだろう・・・。

「うおおおおおお！」

いきなり爆発のような歎声が上がり思考の海から現実へと引き上げられる。

「な、なんだ？」

辺りを見回すと避難していた住民の皆様が駆け寄つてくる。

やばい！隠れない。

この姿を見られたらタツミさん達まで疑惑の目を向けられ何を言われるか分からない。

逃げようとするとカノンさんとブレンダンさんが僕の腕をつかむ。

「ち、ちょっと放して！」

「のままだと第二部隊のみんなが・・・。

「バッタの兄ちゃんもありがとな」

「え？」

タオルを巻いたタンクトップの筋肉質のおじさんが笑いながら僕の肩を組む。

「ありがとう助けてくれて

「護つてくれてありがとう」

男性や女性、大人や子供が次々と僕の周りに人が集まつてくる。  
その表情は恐怖でなく笑顔だつた。

「は、はいどうも・・・」

まさかお礼を言われるとは思わなかつたから拍子抜ける。

よく見るとブレンダンさんとカノンさんが微笑みながら侵入してきただすべてのアラガミを退けコアを回収しているタツミさんの方に向かう。

そうかわざわざ俺にトドメを譲つてくれたのはに俺の印象をよくするためだつたのか。

ありがとうございますタツミさん、カノンさん、ブレンダンさん  
素顔だつたら絶対に顔が真つ赤になつてただろうな。

しばらくして住民たちも落ち着きそれぞれの家に帰つて行つた。

僕もタツミさん達と合流して作業を手伝わないと。

「タツミさん、カノンさん、ブレンダンさんお疲れ様です」

「おう、お疲れさん」

「お疲れ様です。すごいほんとに本当に神機なしでアラガミを倒すなんて」

「ああ、おつかれ・・・ところでライダー、背中は大丈夫なのか?」

「うう・・・」

ブレンダンさんの言葉に気まずそうになるカノンさん。

俺のジャケットの背中は焦げて少しだけ黒くなっている。

実はタツミさん達が住民を避難させる為囮になつてコンゴウとオウガテイルと戦闘中、敵からでなく味方のカノンさんから三発ほど背中にバレット弾を喰らわされた。いわゆる誤射つて奴だ。

実はカノンさんは普段は優しい女の子なのだがいざ戦闘になるとなんというか……うん優しそうな性格が180度変わって戦闘狂になつてしまふのだ。

しかも射線上に入れば例え味方がいても容赦なくバレット弾をぶつ放す。

背中にバレット弾を喰らう度に「射線上に入るなつて、私言わなかつたつけ？」と戦闘狂モードのカノンさんに怒られた。

その為にカノンさんは極東の神機使いから『誤射姫』と不名誉なアダ名を付けられてしまつてゐる。

もつとも誤射を受けてしまつたのはカノンさんの所為じやなくてまだチーム戦をうまく立ち回れない俺の所為だからな……。

アナグラに帰つたらジャケットを焦がしてしまつた事を作つてくれた榊博士とリツカさんに謝つて反省してこの失敗を次にいかさないとな。

「はつは・・・ま、まあその第二部隊の恒例行事みたいなものだから・・・」

恒例行事で背中を焼かれたらたまらないんですけど・・・

「恒例行事って何ですか!? タツミさんひどい! ヒバリさんに言いつけます」

「な! カノン、それはしだろ!」

ヒバリさんはエントランスでミッショングの受付と戦闘時のオペレーターを兼任している女性でタツミさんの思いの人だ。

まあヒバリさんはあまりタツミさんに関心を持つていないけど。

「ライダーさんにもクツキーもうあげませんからね」

「え? 僕まで巻き込まれた!」

カノンさんが材料が手に入つたら時々作ってくれるクツキーは美味しいから楽しみにしているのに。

おのれタツミさん。

カノンさんのクツキー楽しみにしてるのに。

食べ物の恨みはお世話になつたとはいえそれとこれは別だ。

え? 仮面してるのでどうやつてクツキーを食べてゐるかつて?  
はつはつは決まつてるじやないか。

不思議な事が起こつたんだよ。

・:冗談だよ、なぜかこの姿でも食べ物を口に近づけたらいつのまにか口の中に入つ

てるんだ。

サバイバル時代に発見して驚いたけどもう慣れた。  
アナグラのみんなも驚いていたな。

榎博士なんか実に興味深いと言つて色々と食べ物を持つて来つて追いかけてきたけどすぐ逃げて、持つて来た食べ物はみんなで分けて美味しくいただきました。今思えば榎博士が俺がアナグラのみんなに受け入れやすくするようにワザと用意してくれたのかもしれないな。

「そういうや知つてるかもうすぐ二人目の新型神機使いがロシア支部から極東支部に配属されるそうだぜ」

誤魔化す為にタツミさんが別の話題を振る。

さすが隊長クラスだ。

情報が早い。

でもそんなにポンポン話していいのかな?

カノンさんもそんな事で誤魔化されないだろうし

「え？ そうなんですか楽しみだな、仲良くできればいいんだけど」

あつさり誤魔化された!!

いくらなんでもチョロすぎでしょ！

「（まあうちは大体これでうまくいってるんだ。タツミの奴もさすがに隊長クラスの機密は話さないからな）」

ブレンダンさんが小声で耳打ちしてくる。

そ、そなんですかってさりげなく僕の心の内を読まないでください。

仮面で表情を見えない筈なのになんで分かるんだろう。

何気にこの人もすぐえな。

「楽しみですねライダーさん」

「ソウダネー」

嬉しそうに話すカノンさんの見えない位置から僕にVサインを送るタツミさん。

第二部隊も第一部隊と違つた意味でうまくいってるんだな。

それにも新作な新型神機を使うゴッドイーターか。

カノンさんじやないけどどんなに人が来るんだろう。

ロシアから来る新たな神機使いの着任に楽しみと不安を胸に僕は仮面ライダーとして今日も戦うのであつた。

つづく

# 11話

「じゃあそれは向こうの机の横に運んでくれる」

「了解」

アナグラでの今日の仕事はリツカさんの作業場で神機を整備する手伝い。  
と言つても僕は整備ができる専門知識がないから大半は重い資材を運んだりする雑用がメインだけど。

「ほんと助かるよ、神機の素材の中には重たい物が多くてさ」「構いませんよ、これくらいお安い御用です」

確かに周囲には機材や工具などが散乱しており、神機の材料で僕の背丈以上ある大きな資材を持ち上げて指定された場所に壊れないよう優しく置く。

ライダーならこれくらい軽い軽い。

作業場では許可なく機材や材料には触らない。

特に保管されてある神機にはオラクル細胞があつて持ち主以外が触ると侵食されるからだ。

「じゃあ次は君のバトルホッパーを分解して調べさせてくれたら嬉しいな」

「それはダメです♪」

「ちえ♪」

言葉とは裏腹に笑顔のリツカさん。

こんなお約束なやりとりをしながら作業を続ける。

リツカさんが本気じやないのは分かつてるので僕もそれに乗る。

・・・冗談だよね？

ちなみにバトルホッパーは普段整備室に駐輪されており僕が呼んだらすぐ来てくれるようになつていて。

『業務連絡、ライダーさん至急エントランスに来てください。繰り返します・・・』

ヒバリさんの呼び出しの放送？なんだろ？今日は整備の手伝いをしてるから他の部隊に呼ばれる理由はない筈だけど？

「きっと今日来る新型神機使いが到着したんじゃないかな。君は前線に出るしその顔合わせだと思うよ。ここはいいから早く行つてきなよ」

ああ、そうか前にタツミさんが言つてた人がついに来たのか。

「じゃありツカさん、あとはお願ひします」

「手伝つてくれてありがとね、いつてらっしゃい」

リツカさんと別れてエントランスに上がるエレベーターに向かつた。

エレベーターが目的地のエントランスの階に着くと扉が開く。エントランスにはたくさんのゴッドイーターや一般職員の方々が集まっていた。どこに行けばいいのかな。

「おう、来たかライダーこつちだ」

キヨロキヨロとあたりを見回していたらリンドウさんが僕に気づいて手を振り手招きする。

リンドウの方に行くとツバキ教官と第一部隊の面々が勢ぞろいしており、その中央に見なれない銀髪の女の子がいた。

あれが噂の新型使いか。

・・・あの子もすごい恰好だな。

服の切り込みが深すぎて下から胸が見えちゃうんじゃないかな?

サクヤさんやジーナさんもそうだけど女性ゴッドイーターって基本すごい恰好しているよな。

嬉しくないと言えば嘘になる。

だつて僕だつて健全な男の子たがら…。

「ちょっとあなた！」

「ふ、ふあい！」

新しく来た子に声を掛けられる。

ヤバイ、変な事考えていたのがバレたのか。

焦つて声が裏返っちゃつたし。

「なんですかその変な恰好は！先ほどの人といい、この支部はふざけている人が多すぎます！」

ほつどうやら僕の考えてた事がバレたわけじやなかつたのか。

いやそれよりも格好に関してだけはあなたに言われたくないんですけど。

というか先ほどの人つて誰だ？

第一部隊のみんなの方を見るとコウタが顔を背けた。

おまえかコウタ！この子になにやらかしたんだ！

「ちよつと私の話を聞いてるんですか！そんな変な被り物までして！」

ぐいっと頭を女の子の両手に掴まれてしまう。

両手で掴まれているので女の子の顔が目の前に広がる。

性格は厳しそうだけどきれいな子だな。

素顔だつたら間違ひなく僕は赤面していたな。

仮面ライダーになつていてよかつた。

「何で抜けないんですか！このこの！」

「痛い痛い首が抜ける！」

つてそんな場合じやない。

やめてこのままだと愛と勇気だけが友達の餡子入りのヒーローやパトカーを弾き飛ばしてゆるめちゃんこつおい眼鏡つ子みたいに首が取れる。

「あ、違うのよアリサ。彼は、その···」

「その仮面が今のライダーの素顔なんだよ、つかそろそろ放してやれ。初対面なのに仲良すぎだろお前ら」

サクヤさんが困った顔して止めようとしたらリンドウさんがニヤニヤしながら余計なチヤチヤ入れる。

くそうリンドウさん、この状況を楽しんでるな。

覚えてろよ。

「キヤアアアア！」

「ふぎや！」

あのあと我に返つて今の自分の状況を理解したアリサさんに思いつきリビンタされてしまつた。

なんて理不尽。

「まあ親睦を深めたつて事で、ほらアリサ挨拶しろって」

「どこかですか・・・アリサ・イリーニチア・アミエーラです」

「・・・どうも仮面ライダーブラックですよろしく」

叩かれた頬を摩りながら互いに自己紹介をする。

「それでいつまでそんな被り物を被っているのですか？早く脱いでください」

「…申し訳ないけどリンドウさんも言つたけど今のこの仮面が今の素顔で脱ぐことはできなんいんだ」

「ふざけるのも・・・」

「アリサ、彼の言つてるのは本当よ、複雑な訳があつて今はその仮面が彼の素顔なの」  
アリサさんが怒鳴ろうとした所に僕の事情を知つてはいるサクヤさんがフオローしてくれた。

この件に関しては色々と複雑だから後日改めて説明するとサクヤさんが伝えたら渋々納得してくれた。

「彼女は実戦経験こそ少ないが、演習では抜群の成績を残している……追い抜かれないと精進するんだな」

「このまま何事もなく無事に挨拶が終わればよかつたんだけど…。」

「ねえねえ知ってる、ライダーは神機なしでアラガミを倒せるんだよ」

アリサさんの機嫌を取り戻す為にコウタがよりによつて僕の話題を振つてやらかしてくれました。

僕の自己紹介の時に神機なしでアラガミを倒せる事は機密事項だとツバキ教官から言われただろうが。

いくら彼女が極東支部に配属になつたからって支部長からの許可も出ていないのでコウタから伝えたらダメだろ。

何のためにサクヤさんが説明を後日にしたと思つてるんだ。

「…なんですかそれ？神機なしでアラガミを殺せるわけないじゃないですか。くだらな  
い嘘を言わないでください」

信用されてないね、無理なわけです。

「本当だつて、だつたらライダーをミッショソに連れてその目で確かめてみなつて」

「いいでしょ、ライダー！あなたには今度の私の初ミッショソに同行してもらいます。  
神機なしでアラガミと戦うなんて嘘をついた事を後悔して私の足を引っ張らないでく  
ださいね！」

おいおい勝手に決めないでよ。

それに言い出したのはコウタだろ。

それになんで僕が後悔しないといけないんだ。

そもそもツバキ教官が許可するわけない。

「…いいだろう、ライダー次のアリサの初ミッションお前も同行しろ、支部長には私から連絡しておく」

「ウエ?!Σ（0扇0；）!!

「いやいや僕関係ないですよね？」

「命令だ。行け」

「そ、そんな。」

「…諦めろ、ああなつた姉上はだれにも止められん」

僕の肩を手を置き横に首を振るリンドウさん。

「あ、あはは…次の任務は私も新型機の共同運用のテストで出撃するからよろしくね」  
ユウカも苦笑しながらも励まそうとしてくれている。

「大変ね、がんばってね」

「ふん、せいぜい死なないようにな」

そういうならサクヤさんかソーマ、どっちか僕と変わってくれませんか？

つて言いたいけど言つた所でダメなんだろうな。

これもすべてコウタの所為だ。

おのれコウタ。

「リンドウ、資料などの引継ぎをするので私と来るよう、あと藤木は機密事項の情報漏洩の罰として明日の朝までに部屋で謹慎して反省文を30枚書いて提出しろ」

「げ！ そんな！」

ツバキ教官の言葉にうなだれるコウタ。

そりやそりや、反省文で済んでよかつたな。

下手すりや営倉入りだつたぞ。

「その他の方は持ち場に戻れ、以上」

そう言うとツバキ教官とリンドウさんはエントランスから退室していった。

はあああ…コウタの件は少しは気が晴れたけどミッションに行くことには変わりないんだよな。

もう決まつた事だし仕方ない。

死なないようにやれるだけやりますか。

く

つ  
づ

# 12話

フェンリル極東支部、最上階にある支部長室。

支部長室にはソファーやテーブル、壁の近くの少しの装飾品が並べられており一枚の絵が飾られている。

そしてヨハネスが座っている支部長の椅子の後ろに地球儀と数冊の本、そして壁半分を覆う大きなフェンリルの紋章が掲げられていた。

「そうかライダー君はリンドウ君と新型使い二人のミッショント同行して行つたか」  
ツバキの報告を肘を机に付け腕を組んで聞くヨハネス。

「最初はどうなるかと思つたが報告書を見る限り彼は皆に受け入れられているようだな」

「そうだね彼はあの外見の所為でずいぶん苦労したようだからよかつたよ」

ヨハネスが読み終えた報告書をツバキの横にいた榊が手に取り目を通す。

「彼女も驚いているだろうね、なにしろ今まで信じてきた常識が覆されるのだから」

「楽しそうに笑う榊。

「…そうでしょうね、私も初めて報告を聞いたとき信じられませんでしたから」

そんな榊を見て悪趣味と思い呆れるツバキ。

だが榊の性格を知るツバキとヨハネスはいつものことなので大して気にしていない。

「最初はどうなるかと思っていたが彼が受け入れられているようでよかつた。何しろ君を筆頭に彼に対する不信感があつたからね」

「確かに今の彼は少しづつだけど受け入れ始められている。特にツバキ君はよく彼のトレーニングに付き合つてゐるらしいじやないか、どういう心境の変化だい？」  
ライダーがアナグラに来た頃、ツバキのライダーに対する視線が不信感の塊だつたを思い出し訪ねる榊。

「…確かに奴は人は違う姿をしています…そして私は奴のその容姿と能力に警戒心を持つたことは事実です、しかしそれは極東支部を守るために今もその時の判断は間違つていなかつたと思つています。ですが今は奴の根が眞面目だから少し認めただけです」

「すまない少しからかいたすぎたようだ許してくれ。君が教え子を心配していること分かつていてる」

「私もまだまだ未熟でした。リンンドウのいうとおり奴は改造されたとはいえた人の心までは失つていないです」

「かつてのこの地域のことわざというのにあつた百聞は一見にしかずつて奴だね」

自分の軽率な言葉にヨハネスが謝罪し、日本と呼ばれていた頃の言葉を思い出す榊。

「ツバキ君…ライダー君の事を引き続き任せると以上だ、下がつてよろしい」

「了解しました、失礼します」

一礼してツバキは退室する。

「しかし彼を改造したという組織って何者なんだろうね？」

「少なくとも本部ではないな。だが確実とはいきれん…あそこは魑魅魍魎の巣窟だ。我々のあざかり知らぬ所でなにか企んでいるかもしだれん。もしくはフエンリル以外の組織が失われていた過去の技術を見つけそれを彼の体内に施した可能性がある…いずれにしろ彼の遭遇は今は現状維持でいいだろう」

「……そうかい、じゃあ僕は仕事に戻るから失礼させてもらうよ」

榊も支部長室から出て、扉を背に上を見上げる。

(今は…ね、つまり段階が進めば彼の身が危険になるかもしれないな…特にアラガミに対する対抗策を独占していることで数少ない資源を管理している本部とつてその独占に亀裂を生じようと/orする彼の能力は邪魔でしかない…そのとき彼とここにいる神機使い達はどう動くのだろうね…そしてヨハン…君がやろうとしている事を知った時も…)

榊はライダーとヨハネスのこれから起ころうであろう出来事に一抹の不安を覚えるの

だつた。

その頃『贖罪の街』と呼ばれる旧ビル街を巢にしている研究サンプルとして監視をしていたアラガミ『シユウ』2体が捕食の兆候を見せ始めた為、始末するべく雨宮リンドウ、神咲ユウカ、新人のアリサ・イリーニチナ・アミエーラ、そして我らが仮面ライダーBLACKは現場である贖罪の街に急行していた。

（本当に神機を持つてこないなんて・・・）

ミツションに向かう道中、私、アリサ・イリーニチナ・アミエーラはロシア支部から極東支部に配属され、苛ついていた。

なんでいくら激戦区とはいえる新型の私がこんな世界の最果ての地に来なければならないのかと。

それに極東のゴッドイーター達は不真面目で本当にこれが私と同じ選ばれたゴッドイーターなのかと信じられなかつた。

そして極めつけは私達の乗るジープに奇妙なバイクで並走している男だ。

見た目も黒いジャケットと黒いズボンと赤いマフラーをして頭にアラガミの所為で今は少なくなつた虫のような仮面を被つてゐる。

ふざけた格好をしている上にもつとも許せないのがアラガミを神機なしで殺せるなんて子供でも分かる嘘をついてる事だ。

私はパパやママの仇をとる為に苦しくて辛い訓練に耐えてきた。

ゴッドマイターをバカにするのもいい加減にして欲しい。

アラガミは銃やミサイルなどの通常兵器さえも通じない。

それを素手で殺すと言い張るなんて…。

絶対に化けの皮を剥いでやる。

「どうしたアリサ、さつきからライダーの方をじつと見てるがそんなにあいつが気になるのか？」

そう言うのはヘラヘラしながらジープを運転している第一部隊でリーダーをしているリンクドウという男。

私になれなれしく話しかけてきたコウタつて人もそうですがあなたもゴッドマイターとしての自覚ないんですか。

これだから旧型は。

教えてあげますよ、旧型の時代は終わってこれからは新型の神機使いの時代だつてことを。

(いくらなんでも嫌われすぎだろう…)

先ほどからこつちを睨んでいるアリサの殺気に耐えながらバトルホッパーを運転し思わずため息が出そうになる。

これから先彼女とうまくやつていけるのかな。

不安になりながらも現場に到着した僕達はアラガミから見えない岩山の陰でミーティングを行う。

・・・相変わらずアリサが凄い眼でこつちを睨んできるな。

そりや僕が神機を持ってきてないから不思議に思うかもしないけどさ。

正直やりづらい。

「さて今日もいい仕事日和だ。無事に生きて帰つてくるよう以上

そんな僕の心境を知つてか知らずカリンドウさんはいつもの口調でミーティングを始める。

と思つたらすぐ終わつた。

「え、それだけなんですか？」

さすがに短すぎのようだ。

もつとこう相手の特性やそれに対処する各自の動きを相談するとかないんですか。

前に一緒だった第二部隊のタツミさんですら作戦とかあつてもう少し長かつたです

よ。

「サクヤさんも言つてたけどリンドウさんこういう人なの…言うことにいちいち気にしてたら身が持たないそよう」

ユウカが苦笑して僕に話しかける。

前にも同じことがあつたのか。

「いい加減ですね」

呆れた表情のアリサ

はつきり言うなこの子…。

「二人を除いて心が一つになつてるようでなによりだ」  
う、すみません…。

ダメだな、これから協力しないといけないのに。

「ハハッ…冗談だつて、そんな悲しい顔すんな」

相変わらず感覚が鋭いのか僕の気持ちを察して笑いながらフォローを入れる。

仮面で顔が隠れて表情は見えないはずなんだけどな。

「期待の新型使いが一人も入つて初の任務だがあんまし気張らずにまあいつもどおりにやれつてことで」

今日の任務は本部に報告する新型神機同士の共同運用データの収集も兼ねている。

これが成功すれば新型使いはどんどん増えるらしい

とりあえず邪魔にならないようにしないと。

「じゃあ命令はいつもどおり3つ」

3つか…どんな命令か知らないけど気を引き締めないと。

「死ぬな、死にそうになつたら逃げろ、そんで隠れろ、運がよければ不意をついてぶつ殺せ…あ、これじや4つか?」

なんてシンプルで分かりやすい命令…。

しかも数間違えてるし。

でもリンドウさんらしいな。

冗談を交えて緊張を解そうとしているのか。

「まあとにかく生き延びろ、それさえ守ればあとは万事どうにでもなる」

生き延びればどうにかなる…か。

そうですね、生き延びれば僕の体をこんな風に改造したあの神を一発ぶん殴ることができる。

「旧型は旧型なりの仕事していただければいいと思います」

「はつはつは…せいぜい期待に沿えるように頑張つてみるさ」

うわあこの子上官相手によくそんなことを言えるな…怖いもの知らずかそれともた

だの無謀なのか。

リンドウさん実力を知つてたらそんなセリフは絶対言えないよ。

言われた当の本人のリンドウさんも気にしてないのか我慢してゐるの表情と態度からは分からぬけど余裕だな。

生意気な後輩の態度も軽く受け流す。

これが大人の貫禄つて奴なのかな。

「キヤア！」

リンドウさんがアリサの肩を軽く叩くとアリサは悲鳴を上げその場から飛びのく。

「…ずいぶんと嫌われたもんだな」

これは傷つくな…。

そりや異性にいきなり触られたからつてそんなに過敏に反応しなくとも…

「アリサ、大丈夫？」

ユウカが慌てて声をかける。

「リンドウさん…さすがにセクハラはちょっと…」

ユウカの蔑むような視線がリンドウさんを貫く。

当事者じやないけどこれは結構きついものがあるな。

「え?! い、いやいやそんなつもりはないって！」

ワザとじゃないにしてもこうなった場合つてどうしても男性の方が立場が悪くなるよね。

僕も気を付けよう。

「あ…す、すみません！なんでもありません、大丈夫です」

「んーそそうだな、よしアリサ」

急にリンドウさんが右の人差し指の先を上に向ける。

「混乱したときはな空を見上げて動物に似た雲を見つけてみろ落ち着くぞ、それまでこを動くな…」これは命令だ。そのあとこっちに合流してくれいいな」「な、何でわたしがそんなこと…！」

「いいから探せ、な？」

ニカッと笑顔でリンドウさんがアリサに笑いかけたあと僕の方に近づいてくる。

「あとライダーお前も残つて一緒に探してやつてくれ、アリサを一人置いておくわけにはいかないからな」

そう言いながら神機を持つていらない左手で僕の耳を触るリンドウさん。

アリサが一人で平氣だと文句を言つているがリンドウさんは相手にしていない。

「僕もですか？分かりました…それについてもあんなことがあつたばかりだというのにそれでも僕に触れるなんてリンドウさんもしかしてそつちの趣味も…」

そう言うとサツとリンドウさんから距離を開けるユウカとアリサ。

「…ドン引きです」

「リンドウさん、好みは人それでするのでなんとも…」

「お、俺にそつちの趣味はねえよ！」

先ほどの冷静な態度と打って変わり慌てて否定する。

「冗談ですよ」

初対面の時からやられっぱなしなのでたまには仕返ししないと…。

それにリンドウさんが本当に好きな人は見てたら分かりますよ。

「…つたく、ほんとかわいい後輩たちだぜ。よしおしゃべりはここまでだ。ユウカ俺たちがまず先に行くぞ」

「はい！」

二人が滑り降りしていく出発した。

「なんで私がこんなことを…」

文句を言いながらも命令通り空を見て雲を探している。

僕も探し始めるか。

センシティブイヤーをONにしながらね。

さつきリンドウさんが僕の耳に触れたのはそういう意味なんだろうな。

僕らから数メートル離れたリンンドウさんとユウカが聞こえる。

普通の人間では声が聞こえない距離だが僕ならばつきりと聞き取れる距離だ。

「あいつのことなんだがな…どうも色々ケアリらしい、まあこんなご時世…皆いろんな悲劇を背負ってるつちやあ背負ってるんだが…」

なるほど確かにアリサにはあまり聞かれたくない内容だな。

これならわざとアリサに離れるような命令を出したのをうなづける。

「同じ新型のよしみだ…あの子の力になつてやれ、いいな?」

「はいもちろんです」

「うつししい返事だ、じゃあ行くか!…つて靴紐がほどけちまつてるな…悪い先に行つて偵察してきてくれ、結び終わつたら俺もすぐ向かうからよ」

「了解」

ユウカの足音が遠ざかっていく

「…あとライダー聞いてたんだろ?お前にもあの子の事を頼む、なんだかんだであの子がアナグラの中でいい意味でも悪い意味でも一番注目してんのがおまえさんのようだからな」

あ、やっぱり聞いているのに気づいてましたか。

分かりましたよリンンドウさん。

僕も力になれることがあつたら協力します。

「さつきからボケっと立っていますが眞面目に探しているんですか、私は早くこんな命令終わらせて合流したいんです」

「あ、はいすみません」

こんな調子だけど僕はアリサと仲良くやつていけるのだろうか。

つづく

# 13話

俺、仮面ライダーBLACKはリンドウさん、ユウカ、そして新たに極東支部に配属となつた新型の神機使い『アリサ・イリーニチナ・アミエーラ』と共に廃墟となつたビルが立ち並ぶ贖罪の街でシユウ討伐のミッションに参加していた。

だがその途中でリンドウさんがアリサに触るとアリサはなぜか取り乱し、彼女を落ち着かせるため空を見上げて動物の形に似た雲を俺と探すことになる。

その後なんとか動物に似た雲を見つけ、廃ビルの陰にいるリンドウさんとユウカと合流を果たす。

「遅くなつてすみません」

「おう、なんかあつたのか？」

「…実は僕の方は犬っぽい雲を見つけたんですけどその…アリサが見つけられなくて…」

俺が先に見つけたのがよつぱど悔しかつたのかそれとも自分で見つけたかつたのか。結局俺の手も借りず文句言つてた割には細長いヘビに似た雲を見つけるまで一人で探してたからな。

そうとう負けず嫌いだわこの子…。

「余計な事は言わないで下さい」

「ぐえつ！」

足を思いつきり蹴られた。

「ほんとの事なんだから蹴らなくともいいだろ」

そう言つたら合同戦闘訓練でダミーアラガミと戦つてた時と同じような鋭く射抜く  
ような眼で睨まれた。

やばい逆らつたら命がない…。

リンドウさん達に助けを求めるとして視線を合わせようとすると一人は俺から視  
線を逸らす。

「それヨリアラガミは？」

「お、おう…あそこだ」

おいこつちは無視か。

特にリンドウさん、あなたが命令出した結果こうなつたんでしょうが、責任取りなさ  
いよ。

まあ冗談がこれくらいにして状況が状況だから仕方ないか。

さてリンドウさんが指さす方向には一匹のシユウがコクーンメイデンを捕食してい

た。

コクーンメイデンも必死に抵抗したのだろう。放された毒針がシユウ達に突き刺さっている。

しかしその針も毒もシユウに通じず体内に吸収され捕食されていく。

シユウとは人の姿に似て背中に手のような形をした翼『翼手』を持つ中型のアラガミ。いかなる時も常に腕組みを解かず変わりに長く硬い翼手で攻撃をしてきて。

その上、攻撃方法は肉弾戦だけじゃなく翼手の掌にエネルギーを集中させて放出する火の玉みたいな攻撃を仕掛けてくる。

どういう原理だよってツッコミたい。

前に戦ったコンゴウがパワーならシユウはスピードとリーチも兼ね備えるやつかいな相手だ。

まともに二体同時に相手したら勝ち目はない。

そこでリンドウさんの指揮の元で作戦を決める。

作戦内容はまずアリサとユウカが砲撃モードで狙撃。

同時に俺とリンドウさんが飛び出してそれぞれシユウを相手にしながらシユウ同士が連携できないように闘いながら引き離していき、後から狙撃したアリサはリンドウさん、ユウカは俺と合流し2対1で各個撃破する。

作戦通り二匹のシユウを引き離す事に成功。

「さてここからが本番だ」

俺とユウカの前にシユウが立ち塞がる。

周囲に他のアラガミがいなかつたけどさつきのコクーンメイデンのようにこいつらに喰われたのか？

数が減つているのは助かるけどその分こいつの力はデータ以上の筈だ。  
早めに決着をつけないとマズイ。

速攻でこいつを倒してリンドウさん達と合流して残りのシユウを倒す。

目の前のシユウはかかつて来いと言わんばかりに翼手で手招きして挑発してくる。  
幸いこいつは今油断している。

倒すなら今しかない。

短期決戦だ！

シユウに向かつて全力で走る。

迎撃しようとシユウが両手から放された火球を避けながら距離を詰めて間合いに入る。  
あ、あちあち！これ普通の人が当たつたらやばい熱さだ。

「トオ！」

「ライダー待つて！うかつに飛び込んだらダメ！」

ユウカが止める声も聞かずライダージャンプして高く跳びいきなり必殺技の体勢に入る。

「ライダーキイイツク!!!」

決まつた！

そう思っていた。

しかし：

この時、俺は完全に忘れていた。

シユウの長い翼手が左右から伸びて俺の体を掴まれる。

「何!?」

そう、いきなり放つ必殺技は破られる確率が高い法則を。  
その法則通りにライダーキックは破られてしまった。

「くつ！放せ！」

しまつた油断していたのは俺の方だった。

ライダーキックで何体ものアラガミを葬つてこれたからこいつも簡単に倒せると慢心してしまつた。

今更後悔した所でもう遅く両手にガツチリ掴まれて抜け出す事ができない。

体をよじって抜け出そうとするがシユウの並外れた握力に握り潰されそうになる。

「グアアアアアアア!!」

「ライダー！」

骨がきしみ激痛が走り叫び声を上げ、ユウカが助けようと神機の銃口を向けるが射線の間に俺を出して盾にする。

「こ、これじゃ撃てない!?」

シユウの奴、俺がいたらユウカが攻撃できないと完全に理解してやがる。  
なんて悪知恵が働く奴なんだ。

伊達にこの周辺のアラガミを食い漁つてたわけじゃないって事か！

「ゴハッ！」

地面に叩きつけられて背中から激痛に襲われて肺の中の空気と体の中の血を無理やり吐き出される。

こ…このまま…だと意識が飛ぶ。

ユウカは動けそうにない。

仕方ない事だ。

まだ彼女はゴッドイーターになつてそんなに時間が経つていない。

仲間が盾にされたら混乱して攻撃できないのは当たり前だ。  
ドジつたな：でも自分の撒いた種だ。  
だから自分でどうにかする。

「パワーストライプス!!」

両手両足首にある黄色と赤のラインから蓄えられていたエネルギーが放出されシユウの指を押し返そうとする。

だがシユウも負けでいいない。

俺を握り潰そうと指にさらなる力が籠められる。

このままだと力負けする。

そう思つたその時。

「このおお!!」

シユウが俺に気を取られてる隙に神機をブレードに切り替えたユウカの斬撃がシユウの背中に直撃、よろけて力が抜けた瞬間に一気に力を開放して指を無理やりこじ開けて脱出に成功した。

「ゴホッ！ゴホッ！」

体中が痛いし口の中も血の味がする。

「ライダー大丈夫?」

転がりながら羽翼の届かない場所まで距離を開けて左腕を右手で抑えているとユウカが駆け寄つてくる。

「ああ、何とか…大丈夫だ」

あの翼手は厄介だな。あれをどうにかしてからじやないとライダー・キックもライダーパンチも通じない。

先に翼手から結合崩壊させないと。

こういう時の為に新しい技を考えないといけないな。

「ごめん…」

「なんでユウカが謝るの？」

「だつて私が早く助けられなかつたからライダーがひどい目に優しい子だな。この怪我は俺の自業自得なのに。」

「謝るのは俺の方だ、勝負に焦つた所為でいらぬ迷惑をかけた。」  
ゆつくりと痛みに耐えながら立ち上がる。

「すまない、だからこの件はこれで終わりだ」

「…分かつたお互い謝つたしこれで仕切り直しだね」

「ああ、第二ラウンドの幕開けだ！」

## 【アリサ side】

ユウカ達と分かれてだいたい一時間くらい経つただろうか。

私とリンドウさんはついにアラガミを追い詰める。

「ギヤアアアアアア!!」

断末魔を上げて首から血を吹き出してばつたりと倒れるアラガミ。

「ハアハア…」

「お疲れさん、あとは再生できないようにコアを取り出すか」

アラガミから流れる鼻につくような体液の匂い、この緊張感

これが実戦、演習とはまるで違う。

警戒しながら正確な動きでアラガミからコアを取り出している。

息切れの激しい私に対しリンドウさんは呼吸をまったく乱していない。

サボつていたわけじゃない。リンドウさんも積極的に闘っていた。

リンドウさんの神機は第一世代の近距離型の神機

銃型と違いシユウの間合い入り攻撃を避けながら動くので運動量は援護していた私以上の筈なのに。

リンドウさんはリーダーである程度の実力はあると思つていましたがまさかこれほどとは。

旧型の認識、いえこの人の認識を改めないといけない。  
いい加減のようですが実力は確かのようです。

「これでよしつとアリサ、ライダー達と合流するぞ」  
「は、はい」

この人の実力は分かつた。

でもあの神機を持つてこなかつたライダーというどうなんでしょうか?  
ユウカの足を引っ張つて邪魔になつてゐるかもしれない。

なんであんな人がフェンリルに所属してゐるのでしょうか?  
手遅れになる前に早く追い出さないと。  
だが現実はまつたく違つた。

「トオ  
「グギヤ」

ライダーの拳がアラガミの頭部を殴り飛ばす。  
通常兵器さえアラガミにはダメージを与えられない。  
ましてや人間の腕力など絶対に無理の筈。

にもかかわらずシユウは素手のライダーの攻撃にダメージを受けている。  
信じられない…。

アラガミを殺すのに絶対必要な神機を使わず素手で渡り合えるなんて。  
彼は本当に人間なんでしょうか。

もしかしてアイツもアラガミ！

パパ：ママ…。

「あいつは紛れもなく人間だよ、それだけは分かつてやつてくれ」

神機を持つ手に力を籠めたら背後からリンドウさんの声がして振り返る。

「あいつにも色々あつたんだ。詳しい事は知らねえがどうもあいつは誰かに体を弄られて人体改造されたらしい」

「じ、人体改造!?」

確かにライダーは人の姿とかけ離れた姿をしていると思つてましたがまさかそんな理由だつたなんて…。

一体誰が彼をあんな姿に…

「俺たちゴッドイーターは因果な商売だ、なにかを護る為に戦つてもアラガミを倒す力を見た奴ん中にはその力を見て恐怖してまるで化け物を見るような目で畏怖する」

：確かに私達ゴッドイーターも神機を使えるようにするために体内に腕輪からオラ

クル細胞を植え付けて定期的に補給しているから厳密に言えば人間じやないかもしません。

「でも私達は人間です、でも彼は…」

「そう確かに俺たちは人の形と心を保つているがライダーは人の姿じやねえ…」  
真剣な表情で先ほどのふざけた感じが一切ない。

「だがあいつは…心は人のままで口に出さねえが自分の身体が変わつていく恐怖と戦つてるんだ」

そう話すリンドウさんの顔は辛そうだった。

「アリサ、お前に昔何があつたか俺は知らねえ、旧型だの新型だの好きにすればいいさ、けどなライダーは…あいつのことは仲間として受け入れてくれ、頼むこのとおりだ」

あなたを旧型と馬鹿にしてた私に頭まで下げるなんて。

「…なんで彼をそこまで信用できるんですか？」

リンドウさんがそこまで彼を信用する理由が分からぬ。

「見ちまつたからな。あいつと初めて会つた時に自分の身体を盾にして人を守る姿を…人の心がなきやあんな事できねえよ」

心…そんな曖昧なものを感じるなんて…

でもなぜでしよう、普段の私なら呆れて鼻で笑つたでしようがリンドウさんの言葉と

今戦っている彼を見ると私も信じてみたくなったのは…。

「どうやら決まるみたいだな」

「このお！」

ユウカの砲撃がシユウの翼手に直撃し爆発し結合崩壊を起こす。

彼女も傷だらけで服も泥まみれだ。

それだけ激しい戦闘を繰り広げたのだろう。

爆煙が晴れると立っているのもやつとな満身創痍のシユウ。

「翼手の破壊を確認！今よ！ライダー」

シユウが怒りで活性化してユウカに襲い掛かろうと突進していく。

「させない！キングストーン！フラッショ!!」

ユウカを護るように割つて入つたライダーのベルトのバックルから光が放たれシユウが立ち止まりひるむ。

いつたい何をするつもり？

「トオ！」

両腕を構えた後、ライダーは自分の身長の数倍高く飛び上がる。

「なんてジャンプ力!?」

私たちゴッドイーターでもあんなに高く跳べない。

「ライダー・パアンチ!!!!」

ライダーの赤い拳がシユウの頭を殴り飛ばした衝撃で頭が結合崩壊を起こす。すごい威力。拳でアラガミの頭が碎けるなんて初めて見た…。

「ライダー・キイイック!!」

再び飛び上がったライダーの赤く輝いた右足がシユウの体を蹴り飛ばした。

「ぐ…ぐ…グギヤヤ!!」

赤い炎に包まれながらシユウは消滅する。

すごいそして恐ろしい強さ…。

炎の中に佇むライダーの背中に私は目を離せなかつた。

極東での初ミツショーンは驚きの連続だつた。

旧型使いながら高い実力を持つている雨宮リンクドウさんと人間とかけ離れた姿をしながらも人の心を持つている仮面ライダーBLACKという人物…。この激戦区である極東には驚くこと多すぎる。

そして一番驚いた衝撃の事実は…。

ミツシヨンが終わりヨハネス支部長への報告を終えてエントランスに集合した時だ。  
すべてはリンドウさんのこの一言で始まつた。

「いや、今日もよく働いた。ライダーこれからビールで一杯やる偶には付き合え  
けど。  
ミツシヨンが終わつてすぐお酒ですか、まあプライベートまではとやかく言いません

お酒つてそんなに美味しいんでしようか？

「え？俺、十五歳なんでお酒飲めませんよ、なんでか知らないけど配給品にもビールが混  
じついて飲まずに保管はしますけど」

一瞬あれだけ騒がしかつたエントランスが無音になる。

「「「十五歳!!」」

そして我に返つた人たちが一齊に驚いて私達の方に振り返る。

「えつと…い、言つてませんでしたつけ？」

「「「聞いてない！」」」

「ライダーって俺とタメだつたの？」

「し、知らなかつた」

コウタとユウカも知らなかつたようで驚いてます。

「あ、あいつ年下だつたのか…知つてか？ブレンダン」

「いや知らなかつた、ただ言えるのはタツミ、あいつの方がハタチ過ぎたお前より大人だつてことだ」

「なんだと！ どういう意味だ」

「ライダーさん年下だつたのか：だからいつもあんなに美味しそうに私のクツキー食べてくれてたのか。よしまだ作つて持つていてあげよう」

「あいつ年下だつたのか…なら年上の俺があいつを利用すればさらに稼げるようになるな」

「よしパシリに使えそうだ…いややつぱやめとこ」

「あらやつぱり年下だつたのね…アラガミを殴り倒すつて感覚を知りたいから彼のことをもつと知りたくなつたわ」

「ライダーさんは年下、なら無茶しないようにアドバイスするのもオペレーターの私の仕事ですね」

「彼は年下だつたのか、お姉さんの魅力で頼んだらバトルホッパーがどんな仕組みで動いてるか見せてくれるかな」

「ライダー未成年だからビール飲んだらダメだぞ。トウモロコシをやるからお兄さんに今すぐ全部渡しなさい」

「リンドウあなた最近の飲みすぎよ！ ライダー君もリンドウに渡さずにビールは次の配

給の時に返しておいてね』

突然のカミングアウトにエントランスが大騒ぎになる。

私も衝撃の事実を知り思考が停止する。

そう：彼、あんなに強かつたからてつきり年上かと思っていたライダーが実は私と同じ歳だつたなんて…。

いろいろ秘密がある彼がどういった人間かもつと知りたくなりました。

つづく

# 14 話

天界。

アラガミが世界中の大地と緑を食い漁り荒れ果てた荒野になつてしまつたゴッドイーターの世界と違ひ花が咲き乱れ、草木が生い茂り、川には水が流れ、鳥や馬などの動物が平和に暮らす緑豊かな世界である。

そしてその中央に巨大な神殿がそびえ立つていた。

この神殿にこそかつて一人の高校生を死に追いやった体内にキングストーンを埋め込んでゴッドイーターの世界に送り込んだ神と呼ばれる存在が住んでいるのである。

そして神殿の奥にある普段は誰も立ち入れない埃だらけの倉庫にはたくさんのガラクタが放置されその中にボロ布を被つた一台の白いバイクがあつた。

その名はロードセクター。

かつて先代仮面ライダーBLACKと共に秘密結社ゴルゴムと戦つた伝説の超マシンの同型機である。

本来なら神から転生した二代目BLACKの手に渡される筈だったがBLACKが反抗した事で神の怒りに触れロードセクターは譲渡されることなく神殿の倉庫に奥深く

くに封印されてしまっていたのだ。

そんな不遇な状況下の中。

ロードセクターは自身に内蔵されているRSコンピューターで主である仮面ライダーBLACKを探していた。

生体マシンのバトルホッパーと違いロードセクターはAIとコンピューターで動く完全な機械だ。

効率よく行動し無駄な動きはしない。

『N○10038ケンサクカイシ……ガイトウナシ……N○10039……』

しかしロードセクターはもてるすべての機能を使い膨大な情報の中から仮面ライダーを捜索している。

それはロードセクターに芽生えた命なのか？

それとも入力されているプログラムの所為なのか？

それは誰にも分からない。

ただ一つ分かっているのは。

『仮面ライダーと共に戦いたい』

それだけがロードセクターをつき動かしているのであつた。

だがその作業は決して簡単なものではない。

なぜならGEの世界といつても星の数だけ存在する。

そしてその世界は一つ一つが少しづつ違うのだ。

例えば神咲ユウカの性別が女性でなく男性として存在している世界。

オウガテイルの奇襲で命を落としたエリック・デアリフオーゲルヴァイデが運よく助かって生き延びた世界。

エリックの妹エリナ・デアリフオーゲルヴァイデが兄エリックを探しに鉄塔の森に訪れオウガテイルに襲われて亡くなる世界。

だがエリナ・デアリフオーゲルヴァイデは異世界から来た仮面ライダーBLACKの活躍で助けられた。

その事が原因で本来の時間の流れに僅かであるが小さな乱れが発生してしまう。

『ピッピッピッピ…ガイトイシマシタ』

そして今ロードセクターはその小さな乱れを発見。

あと数秒で消える小さな乱れを見つけられたのはまさに奇跡だった。

いやそれは執念のようなものが引き寄せた奇跡なのかも知れない。

その世界に仮面ライダーがいると確信し、ハンドル周辺にあるモニターとランプ、ヘッドライトがまるで歓喜をしめすかのように赤く激しく点滅した！

まずはライダーに役立ちそうな情報を神殿のコンピューターから抽出し始める。

しばらくして、すべての情報を集め終えたロードセクターは今まで一度も動かさなかつたエンジンを動かしフルスロットルで走り出して倉庫の扉をぶち抜いた。

「うわあ！」

「な、なんだ！」

慌てふためく神殿で生活するフードを纏っている神官たち。

彼等は神に護られ平穏に暮らしているので争い事に慣れていない。

そんな神官たちを一切気にせずロードセクターは走り抜いていく。

爆走するロードセクターを止めようと神官たちはとびつきブレーキをかけるが止まることなく、しがみつく神官を振り払いライダーのいるGE世界につながるゲートにたどり着いた。

「けつして奴を通すな！このままでは我々まで神のお怒りを受けることになるぞ！」

隊長格の神官がそう叫ぶと他の神官達の顔から血の気が失せて真っ青になり身体を張つても止めようする。

それだけ彼等たちとつて神の怒りは恐怖の対象なのだ。

だがロードセクターも負けていない。

アタックシールドと呼ばれるシールドを展開して最大の武器スパークリングアタックで神官たちをはじき飛ばしながらついにゲートをくぐり抜けるのに成功した。

残されたのは呆然と立ち尽くす神官たち。

「くつ！ヘルシユーターが完成していないこんな時に…性能は劣るが仕方あるまい、量産型デスランナー部隊に連絡しろ！ロードセクターを回収もしくは破壊しろとな！」

「は、はっ！分かりました!!」

我に返った神官が伝令を出すと神官たちが走り回る。

こうしてロードセクター追撃命令を受けたアラガミとは違う新たな災いの種が仮面ライダーBLACKのいるGE世界に向かっていった。

つづく

# 15話

ロードセクター脱走から数日後。

天界での騒動を知る由もない仮面ライダーBLACKはコウタやユウカと共に榎博士の研究室で講義を受けていた。

【ライダースイード】

「アーコロジーという言葉を知ってるかい？」

いやそれより榎博士、気になることがあるんですけど。

モニターに映し出されている『ペイラー榎のなぜなに講義』という文字。

それは気にしてないからいいんです。

文字の下にいるデフォルメされた指し棒を持つ榎博士とオウガテイルもいいんです。

けどその間にいる腕組みして首をかしげて頭の上に大きな『?』を出している黒くて赤い目の見覚えのあるデフォルメのキャラクター。

それもしかして俺ですか？

誰が描いたんだろう？

私、講義よりそつちの方が気になります。

「アーコロジーとは単体で生産、消費活動が自己完結している建物を指す言葉ですね」

おつと今は講義の方に集中しなきや。

えつと：極東支部には地下に向かつて食料や神機などの各種物資の生産を行うプラントがあつて、外周部には対アラガミ装甲壁や神機使いをはじめとした強固な防衛能力が存在しているつと：よしできた。

アーコロジーの説明が始まりその内容をしつかりとノートに書き写す。  
この時代、紙は大変貴重でこのノートは神機使いと同じ立場の俺にも配布されたものだ。

無駄にはできない。

榊博士の講義は勉強になるがその分覚えることも多くて大変だ。

内容が多くて頭が混乱しそう。

神機使いはただ神機を振り回せばいいってもんじやないんだな…。

俺つて前世の頃はそんなに勉強は好きじやなくてどちらかといえば嫌いなタイプだつたのに。

環境が変わつて心構えも変わつたんだろうな。

クイックイツ

榊博士の講義を聞いていたら突然服の袖を引っ張られる。

「(何?)」

「(ねえ、アリサは?)」

引っ張られた方を見ると隣に座っているユウカが小声で話しかけてきた。

「(…今日の座学の内容がアラガミとは関係のない座学でしたら興味ありませんと言つて第二部隊の任務に参加しに行つたとヒバリさんが言つてたよ)」

「(ありやりや…まああの子らしいといつたらあの子らしいけどこのままじゃさすがにいけないわね)」

「(そうだね;)」

榎博士に聞かれないように小さな声で返事する。

今日も座学が始まる前にアリサをエントランス内で探してたらアリサの伝言を預かっていたヒバリさんから伝えられた。

アリサ・イリーニチナ・アミエーラ…。

ここ数日彼女と過ごして気づいたけどアリサのアラガミに対する憎しみは他のゴッドィーターと違つて異常すぎる気がする。

噂ではアリサの見下すような態度と協調性のない行動で他の神機使いとも仲が悪いらしい。

新型つてだけでそんなにプライドが高くなるものなのか。

俺には理解できないな。

「ん…？」

ふと隣を見るとコウタが眠そうにしている。  
また深夜までバガラリー見てたな。

しようがない奴だ。

「ただそれにも問題があつてね、それは収納可能な人口に限りがあることなんだよ」  
「!？」

あれ？今まで暇そうにあくびしていたコウタが眠気をとぼしていきなり目を覚ました。

どうしたんだ？

「君たちも知つての通りこの極東支部の周囲には広大な外部居住区が形成されている、  
しかし彼らすべてを収容できるだけの規模はまだこの支部にはない、外周部に先ほど話  
したアラガミも捕食できない対アラガミ防壁を張り巡らせることが今できる最大限の  
対処策なんだ」

「…それだけで足りるのかな…現に装甲は頻繁に突破されている…」

珍しく不安そうに初めて榎博士の講義で質問するコウタ。

「だからその為にゴッドイーターの防衛班も配属されている」

確かに僕も何度か防衛班の第二部隊の応援に出撃している。時間がある時にはライダーの力で瓦礫の撤去をしたり壊された防壁の修復の手伝いも行つた。

だがコウタの言う通り人手と物資が足らずに完全に修理できていない箇所がいくつも存在し今でも応急处置で壁を塞いで監視している。

いくらそこを重点的に目を光らせても所詮は気休めでしかない。

しかもその数はどんどん増えていついて手が回らないのが現実だ。

このままだと確実に見落としができてしまい、アラガミに再び攻められる。

「そう…ですよね…すんません…」

「いや、すまない…コウタ君の…家族は外部居住区に住んでいるんだつたね…軽率な物言いを許してくれ」

「いえ…俺はただ…」

そうか、コウタの家族は外部居住区に住んでいたのか。

だから博士から絶対に大丈夫と言つてほしかつたんだろうな。

そういうや以前に第二部隊の隊長タツミさんから聞いたことある。

神機使いの親族もしくはそれに近い者は優先的に第8ハイブにある外部居住区の居住を得ることができると…。

その為アラガミから家族を護る為、危険な神機使いに志願する者が後をたたず大半は最初の適合試験で落とされ涙を呞み、またうまく合格できても実戦で大怪我や命を落とす者が多い…。

『まあこんなご時世…皆いろんな悲劇を背負つてるつちやあ背負つてるんだが…』

リンドウさんの言葉を思い出す。

ふだん明るくて調子のいいことを言うムードメーカーのコウタも家族を護る為に神機使いになつた口だつたのか。

「本当はアナグラを地下に向けて拡大して内部居住区を増やす計画もあつたんだけどね…」

地下か…確かに住民を避難させられる広さは確保できるけど落盤や酸素の問題があるしなによりアラガミに攻められたら我先に逃げようと混乱する。

そして地上に上がる地下エレベーターに乗るのに何度も分けなければならない。

そういや昔見た仮面ライダーBLACKでゴルゴムがマンションの地下に怪人牧場を作つて夜な夜な催眠術を掛けた住民から生体エネルギーを吸い取り怪人を育てる話があつて正氣を取り戻した住民が地上に上がるエレベーターに殺到して騒ぐ場面があつたな。

あれは逃げる人も少なく創作物だからまだ大きな混乱に描かれてなかつたけど現実

に起こつたら…。

いつアラガミに襲われるか地下が崩落するか分からぬ恐怖に耐えきれず一部の住民がパニックなつて暴徒と化したら避難がさらに難しくなつてしまふ。

地下に建設するのはあまりいい案とは言えないかもしれないな。

「でもその計画をより安全で完璧にしたのが『エイジス計画』なんだよね」

「…そうだね、極東支部の地下プラントの多くの資源リソースは海の向こうにあるエイジス島建設に割り当てられてるんだ…その話はまた今度にしようか」

なんだ？いつも説明好きの榎博士がエイジス計画の説明はあまり言いたくような素振りだな？

こうしてコウタの不安と俺の中に小さな疑問を残しながら榎博士の座学の時間は終わつた。

後にこの不安と疑問が同時に大きな鬨いと悲しい別れを呼び込む事になるとは知らぬまま…。

く

づ  
づ

# 16 話

## 【ユウカ side】

（コウタつてああ見えて結構複雑な事情を抱えてたんだな……）

榎博士の講義が終わりコウタは部屋に戻り私、神咲ユウカは同僚のライダーと一緒に講義内容をアリサに伝える為にエントランスに向かっていた。

今日の講義の中で私はコウタの家族が外部居住区に住んでいて家族を養う為にゴッドイーダーに志願したというコウタの意外な一面を知った。

普段のコウタは明るくすぐふざけて場を和ませるムードメーカー。

初めて会った時もいきなりガムを進めてきたけど最後のガムはもうコウタの口の中だつたという抜けている所があり、俺の方が少し先に来たから先輩だなどいつてきたりと正直第一印象が『何この人?』つて感じだつた。

その後、エントランスやミッショングで会つたりするたびにサクヤさんの好きな人って誰なんだろうなと話してきたりどつちがアラガミを多く狩れるか勝負を申し込まれたりとアリサの言葉を借りるなら少し浮ついたなにも考えていらない人なんだなと思つて

いた。

けどそれは私の勝手な思い込みでそんな浅はかな考えを恥じた。  
コウタにも背負つていて大事な存在があつたのだから。

私は、とある村の出身だつた。

村といつても極東支部の外部居住区に住むことができなかつた何組かの家族が寄せ集まつて廃材を積み上げただけの粗末なバリゲードの中であばら家を建てて生活している小さな集団だつた。

私は孤児で赤ちゃんの頃にかごの中に薄い毛布にくるまれ村の入口に放置されていたらしい。

理由は分からぬが食べ物も少ない時代だ。

口減らしの為に捨てられたのだろう。

村の人たちは厄介者だと見捨てようとしたけど一組の夫婦が育てると名乗り出る。

私を拾つてくれた夫婦は子供を流行り病で失い、自分達も元々身体が弱くもう子供が作れないと宣告されていた。

赤ん坊の私に子供の面影を見て身代わりだといじめてくる男の子がいて泣かされて泣いてたらいつもお母さんがギュッと抱きしめてくれた。

私はそれが嬉しかつた。

捨てられた事は辛くないといえば嘘になるけど、でもそれ以上に私は本当の父と母の  
ような愛情を受けて成長し幸せに暮らしていたのだから。

けどその幸せは突然を終わる。

住んでいた村をアラガミが襲撃してきたのだ。

「バリケードが食い破られたぞ！」

「もうだめだ！ うわああ！」

「にげ：ギヤアアアア！」

「神さま！！」

襲つて来たのはオウガテイルの群れ。

当時の力のない子供だつた私と武器を持たない村人では脅威の存在だつた。

村人は抵抗もできずただなすべもなく蹂躪されていく。

外から悲鳴や建物が壊される大きな音、恐ろしいアラガミの鳴き声が聞こえる中。

私は両親と一緒に家の中に隠れていた。

怖い、怖いよ：誰か助けて：

神様：。

お父さんは裏口の扉を少し開けて辺りを見回し、お母さんは金庫から必死に食料を出

してカバンに詰め込んでいた。

食料はなによりも貴重だからどの家も奪われないように金庫に締まっている。  
それがこの村の常識だ。

でももうそんなこと言つてられない事態になつていて。

アラガミにとつたらこんな金庫なんか簡単に噛み砕いてしまうのだから。

「いいか？このカバンを持つたらなにがあつても私達に構わぬ行くんだぞ」  
「静かになつたら裏口から出て行きなさい、いいわね」

お母さんがカバンを渡して怖くて振るえる私をいつもみたいに優しく抱きしめてくれた。  
そして今日はお父さんも一緒に力強く抱きしめてくれた。  
泣いていたらいつもしてくれた。

今日はお父さんも一緒だ。

いつもより暖かいな。

そう思うといつのまにか振るえが止まっていた。

「お父さん達も一緒に逃げようよ！」

「身体が弱い私たちがいたら足手まといになる、だからおまえだけ逃げなさい  
いや…私もお母さん達と一緒にいい！」

私は一人がやろうとする事を理解してしまい泣きながら父と母の袖を掴んで止めよ

うとする。

「ここは危ないの分かつて」

「ユウカと一緒にいたこの数年間は私たちは幸せだつたよ、だから私達の分まで生きて！」

袖を掴んでいた私の手から力が抜けて袖から離れゆつくり下ろされる。

二人の意思は固く止められなかつた。

「今ならこちら側にはアラガミはいない、さあ行くんだ！」

父と母が裏口の扉を開けると私は外に突き飛ばされた。

『……』

『……』

『……』

私は慌てて扉に駆け寄ろうとしたけど父と母のいつも見ていたあの優しい笑顔で私

にある言葉を残しながら扉は無常にも閉ざされた。

「お父さん……お母さん……」

涙を必死に抑え、家に背を向けて走り出した。

「……行つたか？」

「……ええ」

「あの子は幸せになるだろうか?」

「なる決まつてますわ、だつて私達の娘ですもの」

「そうだな、自慢の俺達の娘だ!」

「…愛しているぞ」

「ええ、私もよあなた!」

二人が玄関を開けるとそこには三四のオウガティルがこちらを振り向く。

「さあこつちに美味そうなエサがあるぞ、来い!」

「そうよ、こつちよ!」

お父さんとお母さんは畠仕事用の鍬や鎌を持つて自ら囂となりアラガミから私を逃がしてくれた。

私は振り返ることなく夢中で走り遠くまで逃げて気がついて振り返ると村のあつた方向から黒い煙が立ち上つていた。

村は滅びた…。

なにもかも無くなつた…。

美味しいお菓子を作つてくれた近所のおばさんも…。

一緒に遊んだ友達も…。

私をいじめた男の子も…。

私の家も……。

悲しかつたり楽しかつた思い出も……。

そしていつも温かくおかれりつて迎えてくれたお父さんとお母さんも……。  
なにもかも……。

『逃げろ！ ユウカ！』

『生きなさい私達の分まで』

『愛する我が娘よ！』

最後に見た父と母の笑顔と言葉を思い出す。

私は二度目の家族とあの温もりが永遠に失われた事を頭で理解して実感し声にならない叫ぶを上げた。

その後、アラガミに村を滅ぼされて両親を失つた私はショックと疲労で倒れていた所を巡回中のゴッドイーターに拾われて保護される。

保護され極東支部に運ばれた時、私に神機使い適正があると言われた。

もう少し早く私に神機使い適正があると分かつていればお父さんとお母さんを安全な壁の向こうに避難させて育ててくれた恩返しができたのに……。  
やつぱりこの世界に優しい神様なんていやしない。

いるのは人に害をあだなす偽りの神様だけだ。

ならそんな神様はすべて滅ぼそう。

生きてほしいと願つた両親の意思に背く事になるかも知れないと……。

私は生きる為にそして同じような境遇を減らせればと思いアラガミに対する憎しみを胸に秘めて泣きながら志願した。

そして今、神咲ユウカは極東支部で人類の敵アラガミを狩るゴッドイーターとしてここにいる。

そして現在。

私は歩きながらちらりと横目でもう一人の同僚を見る。

仮面ライダーBLACK。

バツタのような仮面と服の上からでも分かる筋肉質な体。神機なしでアラガミと戦える規格外な存在。

過去の経歴は年齢以外は一切分かつていない。

本当に私と同じ16歳だなんて信じられないけど……。

鉄塔の森にいた所を保護してそのままフェンリル入りしたという人物。彼にも何か言えない事情があるのかな。

「どうしたの？」

「え？ ううん、ねえコウタの事知つてた？」

講義の時、両親が生きているコウタの話を聞いてつい羨ましいと思つてしまつた。  
コウタを妬んでも仕方ないのに。

嫌な子だな私。

「…いやただシユウ討伐のミッショソの時にリンドウさんがアリサの態度を見てこんな時代だから誰かしら何か背負つて生きていると言つていたからコウタもアリサと同じようにゴツドイーターに志願した理由がなにがあるんじやないかと思つていたけどね」  
「リンドウさんが…そつか…」

そうだよねアラガミの所為で不幸になつたのは私だけじやない。

アリサの目を見てれば分かる。

あれは私と同じ大切なものを奪われた目だ。  
一時期の私もそうだった。

けど私を保護してくれた神機使いの人や支えてくれたアナグラの職員さん達がいたから悲しみから立ち直れた。

私を支えてくれた人達のように今度は私がアリサを支えられる人になりたい。  
悲しみを誤魔化す為にただアラガミと戦つて狩り尽くす存在だけになるのは辛すぎ  
るから。

だからアリサが話してくれるまで私は信じて待つてるよ。  
つづく

## 17話

【ライダースィード】

コウタの家庭環境とゴッドイーターに志願した理由を知り感傷に浸りながらユウカとエントランスに足を運ぶとなにやらいつもより騒がしい。なんだろ？いつもの仲間内でワイワイ騒いでいるというより言い争っているような感じだけど。

ソファの方に人だかりがある。

騒ぎの中心はあそこか。

「すみません通ります」

「ちょっと失礼します」

人だかりをかき分けながらユウカと向かっていく。

そこには…。

「何考えてんだ馬鹿野郎！」

「私は間違ったことはしてません！なによりもアラガミを撃退することが最優先にして被害が広まらないようにしたまでです」

「だからってまだ避難が終わっていない中で戦闘始める奴があるか！」

普段温厚なタツミさんが激怒してアリサと言い争いをしていたのである。  
確か今日はアリサは第二部隊に同行したと聞いていたけど。

「一体なにがあつたんですか？」

「ああ、それは…」

「おおライダー、それにユウカも！お前達も来たのか！ちようどいいお前らからもこの  
分からず屋に言つてやつてくれ」

近くにいた神機使いに言い争いの原因を訪ねようとしたらタツミさんが俺に気づいて僕を呼ぶ。

やつぱりこの姿と身長なら人ごみの中でも結構目立つんだな。

なにしろ変身したら身長がいきなり伸びていて、フエンリルに入隊した時に身体検査で詳しく測つてみたら身長が198, 7 cmと体重が87 kgだったから。

これもライダーになつた影響なんだろうか。

僕の身長は極東支部の中でも高身長のリンドウさんやシックザール支部長より高いからそりやすぐに気づくよね。

それで騒ぎの原因を聴くとタツミさんが怒る理由に納得した。

なんでも外部居住区の装甲壁を破壊したアラガミが居住区に侵入してしまった事態が

発生。

すぐに防衛班の第二部隊に出撃要請が入り、そばにいたアリサが同行を志願すると隊長のタツミさんがこれを承諾。

現場に到着したらコンゴウと戦つた時のようにまず住民の安全を最優先にすべく威嚇射撃しながらアラガミを引き離す作戦を立てる。

しかしアリサが住民の避難が完了する前にアラガミに対して砲撃をしてしまう。

それが文字通り引き金となり住民の目の前で戦闘が開始され、現場が逃げ惑う住民で大混乱になり戦闘と避難誘導を同時にしなければならない状況になってしまった。

負傷者が何人かでしまったが第二部隊の迅速な対応のおかげで転けた時の打撲や擦り傷で大した傷ではないらしい。

そして今、アリサの軽率な行動に対して市民の安全第一に考えているタツミさんが説教している最中だそうだ。

アラガミが住民に危害を加えようとしてやむを得ず発砲してしまったならともかくそうじやないなら、これはどう考えてもアリサに非がある。

タツミさんは現場を取り仕切る隊長なんだからアリサは上官の命令に従わなきやダメだろう…。

それにもしても居住区に家族がいるコウタがこの場にいなくてよかつた。

いたらコウタもタツミさん側に加わり余計収集が收拾がつかなくなつていただろうから…。

隣にいるユウカもそう思つたのかひきつた顔をしている。

「戦場に巻き込まれた人の気持ち考えた事あるのか！あんな所で戦闘が始まつたら住民がパニック状態になつて余計に收拾つかなくなるだろうが！戦術に関して頭が回るなら町の外でやつてる掃討戦とは作戦の自由度が違うつてことを理解して巻き込まれた人達の事も考えてやれよ！」

「被害を気にするならまず広がる前にアラガミを撃退すればいいだけです、なのに戦術より人の気持ちですか？そんな事でアラガミが撃退できることでも？話になりませんね」「なんだと！もういつぺん言つてみろ!!」

「落ち着けタツミ」

「タツミさん、暴力はダメです」

掴みかかろうとするタツミさんを必死に抑えるブレンダンさんとカノンさん。

ただ隠そつしているが表情をよく見ればブレンダンさんとカノンさんもアリサの言葉に怒つている。

自分達の仕事を否定されたんだ。

怒つて当然だろう。

ただアリサの言いたいことも分かる。

確かに彼女の言う通り被害が拡大する前にアラガミを撃退した方が早いだろう。  
けどタツミさんの言うようにパニックになつてしまつたら避難が遅れてそれだけ犠  
牲者が出てしまう。

そうなつてしまつたら防衛班はその存在意義を失うことになる。

住民を護りそしてアラガミも狩る。

口では簡単に言えるんだけどそう都合よくうまくいかない。  
アリサとタツミさんの言い争いはさらにヒートアップする。  
このままだとマズい。

「二人共、もうやめてください」

間に割つて入り二人の仲裁をする。

こんな時は大きなこの体は便利だな。

「ライダー？」

「なんですか？いきなり関係ないのに入つてこないでください」

「確かにアリサの言つてることは正しい、アラガミを狩る事に関してゴッドイーターと  
してなにも間違つていない。迅速にアラガミを倒せばそれだけ居住区の人達は安心す  
る。それは認めるよ」

「お、お前までそんな事を言うのか！」

「おや見直しましたよ、あなたもなかなか分かつていてるじゃないですか」「けど一つだけ大事な事を見落としているよ」

アリサの方を向いて目線に合わせて屈んで目をじっと見る。

「な、何ですか？」

傷つくからそんなに怯えないでよ。

「それと同時に第8ハイブに住んでいる人達の安全を護る事も大切なんだ」

「な、なぜです?!アラガミを駆逐する以上の優先すべき戦術なんか存在しません!・」

怯えながらも負けじと睨み返してきた。

「部隊にはそれぞれ役割が存在するんだ第一部隊が外で人類の脅威となる凶暴なアラガミの討伐なら第二部隊は戦う力のない人達をアラガミの脅威から護るのが仕事だ」  
外でアラガミを狩る第一部隊と内で住民を守護する第二部隊。

その二つが存在するからこそ極東支部はアラガミと戦える。

「タツミさん達第一部隊には人々をアラガミから護るという信念がある、その信念を貶す行為を僕は許さない」

「気持ちの次は信念ですか？あなたまでそんな甘い幻想を！・」

「居住区にいる住民の中にはアナグラで働いている人もいる。その人たちがいるから極

東支部や僕達はこうして活動できている、アナグラが機能しているのも君がこれまでここで食した食べ物もその一つだ』

「そ、それは…」

ツバキ教官からアナグラの内情を聞かされていたアリサが視線を逸らす。

第8ハイブの住民の中には自ら職員として志願しアナグラで働いている人達が何人も存在する。

外で集めた素材や薬、バレットを売つてくれるよろず屋のおじさんやいつもアナグラを清潔に保つてくれる清掃員のおばさんもその内の一人だ。

最初、おじさんとおばさんは僕の姿と力に警戒して怖がっていたけど時間が空いてる時に二人の雑用の手伝いをしていく事で徐々に警戒心を解いていき世間話をしてくれるようになりここで働いている理由を話してくれた。

よろず屋のおじさんはかつては国を護る軍人でゴッドイーターに志願したが神機との適合率がなかつた為にその願いは叶えられなかつた。

だから少しでもゴッドイーターの力になればと危険を承知で外に出てアラガミ同士の戦いで負けた死体から素材を削り取つたり、廃墟となつた病院から薬を回収したりツカさんの指導と軍人だつた知識を使って神機用の弾丸を製造してアナグラの許可を得てよろず屋を開き生活費を稼いでいる。

素材や薬を回収しているとアラガミに見つかってしまい何度も死にそうになりながらも命がけで逃げるおじさんをハイエナかハゲタカと言つて馬鹿にする心ないゴッドイーターもいるが神機の適性のない俺が家族を居住区に住まわせる為だからと笑っていた。

でもおじさんのおかげで素材が集めやすくなりいい武器が造られアラガミが狩りやすくなり回収した薬のおかげで生存率が上がり感謝しているゴッドイーターも数多く存在する。

そして清掃員のおばさんも子供がゴッドイーターとして頑張っているから自分もなにができる事はないかと上に掛け合つて清掃員として就職したそうだ。

そしてアラガミに破壊された防壁を直す際に無償で名乗り出て来て手伝つてくれた人達。

そんな人々の善意があつてアナグラは稼動している。

「忘れるなよアリサ、あの居住区にいる人達は僕達と同じ命がたつた一つしかない生きている人間なんだからな」

コンゴウとの戦いが終わり駆け寄つて来てこの姿を見ても感謝してくれた居住区の人達の笑顔を思い出す。

居住区に住んでいる人達は確かにあの場所で懸命に生きているんだ。

そんな人達を戦場に巻き込んでないがしろにするような行動を許す訳にはいかない。

「くつ！し、失礼します！」

アリサは悔しそうにエントランスから出て行つた。  
ちょつと言ひ過ぎたかな…。

けどこれから先、もし彼女が作戦ミスで人を殺めてしまつたら傷つくのは彼女の方  
だ。

「こ」で心を鬼にしてよく言つておかないと。

「…確かに戦術理論は重要だしあの歳であれだけ身についているなら頼もしいか…」

後ろからタツミさんに声を掛けられる。

あ、マズツつたな。

これは第二部隊の問題だ。

部外者の俺が割つて入つていい問題じやなかつたか。

いくらアリサの態度が許せなかつたとはいえないにやつちやつてんだよ俺！？

それにすげえ偉そうな事を言つてしまつてたし！

「す、すみませんタツミさん!?生意気な事を言つてしましました！」

慌てて頭を下げる。

「気にすんなよ、俺が言いたかつたことは全部ライダーが言つてくれたし新人の嬢ちや

んも分かつてくれたらしいんだけどな」

顔には出ない筈なのに考えを読まれた。

「そう…ですね…」

アリサ、分かつてくれたらしいんだけど。

「うう…ライダーさん、私感動しちゃいました、そこまで私達の事を思つてくれていたなんて…」

「ライダーお前いい奴だな…あとタツミは感情的にならずライダーをもう少し見習つて大人になれ」

カノンさんは泣いてるしブレンダンさんはなんかウンウン頷いちゃつてるよ。  
しかもさりげなくタツミさんに文句言つてるし。

あ、そういうやリンドウさんにアリサのこと頼まれてたんだ。  
けどこれで完全に嫌われたよな。

リンドウさんになんて言おう。

第一部隊

「やっぱお前防衛班に向いてるわ、うんうちに正式に異動してこいよ歓迎するぜ」

「い、いやそれは僕の一存では何とも言えません。ツバキ教官や支部長の許可がないと  
本部に目を付けられるとマズイからあまり表立つて行動しないでくれと釘を刺され  
てるんだよな。

「はつはつはそつか、じやあな俺たちはこれからツバキ教官に今日の任務の報告をしてくる。異動の件考えておいてくれよ」

「タツミではないが俺も歓迎する、いつでも来い」

「一緒に戦えることを楽しみにしてますね」

「……あとブレンダン、話あるから後でお前の部屋行くから逃げんなよ」

「……」

そう言つて僕の肩をポンと叩いてタツミさんとブレンダンさん、カノンさんがエレベーターの方に向かつていった。

騒ぎが終わり野次馬も解散したからこれでどうにか騒ぎは収まつたな。  
さて部屋に帰るかな。

そう思つたその時…。

「おいおいなんだ？あの新入りの偉そうな態度は？だから俺は口がでかいだけの甘ちやんは嫌いなんだよ」

どうやら新しい問題はもうからやつてきてしまつたようだ…。

つづく

# 18話

【ライダースイド】

「おいおいなんだ？あの新入りの偉そうな態度は？だから俺は口がでかいだけの甘ちゃんは嫌いなんだよ」

声がする方を向くと第三部隊のカレル・シユナイダーさん、小川シユンさん、ジーナ・ディキンソンさん達がやつて来ていた。

うわ：厄介な人達が話し掛けてきたな。

カレルさんをリーダーにした第三部隊。

第一部隊と同じ壁の外でアラガミを狩る部隊だ。

詳しい事はそれ以上は知らない。

なぜならこの部隊にはあまり近寄りたくないいい印象がないからだ。

正直あまり相手にしたくないんだけど…。

「命は一つしかないか、『人間』らしい事を言うじゃないか、え？『化け物』？」

特にカレルさんとシユンさん

この二人はあまり関わり合いたくないんだよな。

僕の仮面ライダーとしての姿と力に對して敵対心むき出しの態度で話しかけてくる  
からな

仕方ないかもしないけど相変わらず僕を化け物扱いしてくるし

自分でも納得しているが人から言われるときすがにいい気持ちがしない。

確かにアナグラにはまだ僕を今だに恐れて怪物扱いしている人もいる。

けど怖がっているのか大半は陰口ばかりで面と向かって言うのはこの人ぐらいだ。  
だからこちらも用がなければ話しかける義理もない。

「…そんなことを言うためにワザワザ来たんですか？」

不機嫌そうなユウカがいきなりけんか腰で話し掛ける。

「なんだと！先輩に対してなんだその口は!?」

「待て待てシユン俺たちは話し合いに来たんだ面倒ごとを起こすなよ」

ジュンさんが怒るがカレルさんが止める。

「話し合いつて俺に何の用ですか？」

先に挑発してきたのはそつちだろうが。

怒鳴り散らしたい感情を抑えながら冷静に話しかけてきた理由を尋ねる。

「次の任務にはお前とお前のバイクの力が必要だ。分け前をくれてやるから手伝え」「あなた達そんな頼み方ないでしょ！ライダーをなんだと思つてるのよ！」

「そいつはお情けでここに置いてもらつてある見た目通り人間じやない化け物だ、そんな奴をなんで人間扱いしなければならない」

「あなたは！」

「ユウカやめて、もういいから」

「で、でも！」

「……いいから僕は大丈夫だから」

僕の為に怒つてくれるのは嬉しいけどここで騒ぎを起こしてユウカに迷惑をかける訳にはいかない。

なんとかなだめて話を続けさせる。

正直化け物呼ばわりされるのは辛くて悲しいが今は我慢しないと…。

「それで任務の内容詳しく話してもらえますか？」

仕事の話なら聞かない訳にはいかない。

「いいだろう最近、搭乗者がいないバイクが暴走しているという噂があつてな、そのバイクの捕獲を俺たち第三部隊に命じられた」

「しかもこれは緊急任務なんで報酬の割がいいんだよ」

カレルさんとジ Yunさんの説明を聞きながら受けるかどうか考える。  
無人のバイクが一人で走り出すか。

確かに幽霊かバイクを捕食して特性を手に入れたアラガミじやないかぎり通常じやありえないよな。

「最初はお前のバトルホッパーだつたか？…そいつが抜け出して走り回つてゐるのかと思つたが整備士からアリバイ証言があつて違つていた、命拾いしたな」

「……バトルホッパーは僕が呼ばないかぎり勝手に動きません」

ただ呼ばないかぎり勝手に動かない。

これは半分嘘である。

かつてムカデ怪人の話で主人公の南光太郎が催眠状態で意識が朦朧もうろうとなり危機に陥つた時、バトルホッパーは自らの意思で動き光太郎を助けた。

それと同じようになんかが危機的状況に陥つてしまつたら自分で行動する。

ただこの状況でそれを話したら監視が強化されて一緒に戦つてくれる相棒に辛い思いさせるから話す気はない。

「なんでそんなにそのバイクにこだわるんですか？いくら報酬がいいからつてあなたがそれだけでこんないるかどうかも分からぬ不確かな情報だけで任務を受けるなんて思えないんですけど？」

カレルさんの話を聞いてたら違和感を感じた。

報酬がよくても肝心のバイクが見つかならなかつたら支払われる事はない。

そうなればジープの燃料費などの出費だけで赤字になる。

それにもしそのバイクが本当にアラガミだつたらノルンのデータにはない新種のアラガミという事になる。

好奇心旺盛なリンドウさんならともかく能力も特性も弱点も分かつていないうアラガミに対して慎重派のカレルさんがなんの策もなく報酬だけで受けるとはどうしても思えないをだよな…。

「鋭いな いいだろ教えてやる。そのバイクを俺たちが捕まえて金持ち連中に売るんだよ、上はアラガミでなければ好きにしろと言われているからな」

なるほどね、うまくいけば任務の報酬だけじゃなく現物支給もされて報酬の二重取りができるわけか。

報酬とバイクを売った金額が手に入るなら金銭欲の強いカレルさんがこの任務を受ける訳だ。

「アラガミを倒してくれるならほっておいても問題ないんじや」

まあ確かにユウカの言う通りなんだが、この人達の考え方なら、多分……。

「馬鹿か、そんな余計な事されたらこっちの商売あがつたりで稼げないだろうが」

だろうね、そうじやないかと思つた。

それにいくらアラガミを退治してくれるからってアナグラとしても任務中に遭遇し

て危害を受ける危険性があるから放置しておくわけにはいかないって事か。

情報元は一人でアラガミ退治していたらフェンリルに捕獲された僕。

「お金の為に戦つてるんですか！」

「当然だろ、まさかお前平和の為とかそんな青臭い事言うんじゃないだろうな？」

「あなたは！」

「ユウカ！ダメだ！」

カレルさんに平手打ちしようとユウカを羽交い締めして止める。

珍しいな冷静なユウカがこんなに感情的になつて激怒するなんて。

「なんで止めるのよ！」

羽交い締めで動けないユウカが首だけ動かして僕に向かつて怒鳴つてくる。

「さつきみたいに人命を巻き込むことならさすがに止めるけどアラガミと戦う事情や目的なんて人それぞれだ。僕たちが怒つていい事じやないよ、それに先に手を出したらどんな理由があろうとこちらが悪者になる」

これ以上僕の所為でアラガミとの戦闘でもないのにユウカに迷惑をかけられない。

「ほう、よくわかつてるじやないか」

「だからそちらもユウカを馬鹿にしたりしないでくださいね」

本当ならもつと言つてやりたいがこれぐらいなら言い返しても問題ないだろう。

「てめえなんだその言い方！」

「やめなさいジ Yun、ごめんなさいユウカ」

ジーナさんがシyunさんの前に手を差し出して止める。

そういうやジーナさんは二人と違つて僕になにも言わないな。

何を考えてるのかよく分からぬけど話の通じる人だといいが。

「じゃあそのミッショん、私も行くわ！」

ユウカがミッショんの同行に志願する。

「突然どうしたの？」

「あなた達がライダーに危害を加えないか見張る為よ」

「てめえ、俺たちが信用できないってのか！」

「あなたたちの態度を見たら信用できるわけないでしょ」

「これ以上増えると分け前が減るだろうが、隊長権限の命令だ。お前はついてくるな」

だがユウカの願いはカレルさんにあつさり却下されてしまった。

「くつ…」

悔しそうに顔を歪ませるユウカ。

僕やアリサのように他部隊のミッショんに同行するには任務を遂行する責任者である部隊長の許可が必要で第三部隊の隊長であるカレルさんにそう言われたらユウカは

従うしかない。

「ごめんねユウカ、心配してくれてありがとう  
申し訳なさいっぱいで頭を下げる。」

「いいのよ、第一部隊のみんなも第二部隊のタツミさん達もあなたの味方だから気を付けてね」

「うん、ありがとう」

最初僕を受け入れてくれたリンンドウさんの第一部隊、そしてこんな異形の姿なのに自分部隊に誘ってくれたタツミさんの第二部隊。

感謝しても仕切れないよ。

「仲良しひつこも時間の無駄だからその辺にしておけ、詳しく述べ内容を知りたければ受け付けの竹内に聞きな」

「……分かりました、先にツバキ教官から出撃許可を貰つてくるので失礼します」  
いろいろ文句を言いたいけど今は我慢だ。

「早くしろよ」

ジュンさんの声を背にツバキ教官が仕事をしていると思われる執務室に向かう。  
神機使いは普通はツバキ教官から許可を貰わなくとも出撃できるが普通ではない改  
造人間の僕がミツショーンに参加する為にはツバキ教官の許しが必要なのである。

ツバキ教官の執務室の前で軽く深呼吸をして心を落ち着かせる。

心を落ち着かせずにノックしちゃうと改造人間の影響で強くなつた力でドアをこわしそうになるんだよね。

深呼吸してドアを軽くノックする。

「誰だ？」

「ライダーです。ツバキ教官、今お時間よろしいでしょうか？」

「ライダーか、入れ」

ドアの向こうから返事があつて執務室に入ると椅子に座つたツバキ教官が資料をまとめていた。

機密事項かもしれないからできるだけ見ないようにしないとな。

「何の用だ？」

「第三部隊のミッショilonに参加する為の許可をいただきたく参りました」

そう言うと一瞬だけツバキ教官の眉が動いた気がした。

「第三部隊とだと？ミッショilonとは第三部隊が受け持つてゐる暴走バイクの件か？」

「はい、暴走バイク捕獲の為にぼ：自分とバトルホッパーの力を貸してほしいと要請が入りましたので」

そう言うとツバキ教官が手を組み少し考へるように目を閉じる。

数秒ほどすると目を開いて手を離した。

「分かった許可する、退室してもいいぞ」

「ありがとうございます」

頭を下げ礼を言い退室しようとツバキ教官に背を向けると

「待て……気をつけろよ」

「は、はい？」

不意をつくように言われ驚きながらも返事をして執務室から出る。

珍しいな、ツバキ教官が気をつけろなんて。

今まで一度もそんな事言わなかつたのに。

それにしても気をつけろか…。

そうだな、うわついてないでどんなミッショングも何があるかわからない。  
氣を引き締めて望まないといけない。

きっとツバキ教官はこんな俺の心を見抜いて忠告したんだろうな。  
よし許可を下りたし次は受付に行つてミッショングの受注に行くか。

エレベータに乗りエントランスで降りると受付でオペレーターの竹内ヒバリさんが  
対応していた。

「ヒバリさん、ミッショングの受注をお願いします」

「ライダーさん、ここにちは、どのミッショングループに参加しますか?」

ヒバリさんが他の人と変わらない優しい笑顔で対応してくれる。

僕を怖がらない数少ない中の一人だ。

最初は怖がっていたけどミッションに参加できない時に支給された配給品や在庫管理の数量確認を手伝つたりあとは…うん、まあ雑用の休憩中に言い寄つてくるタツミさんに対する愚痴を聞かされたりと……。

そういうや膨大な配給品を確認してた時にこんなことあつたつけ?

ミッション中や仕事中で忙しい時にデートや食事に誘つてくるのでどうにかならないと言われてもな……。び

「僕もタツミさんの戦えない人達を護ろうとする信念と実力は尊敬できるんですが普段の生活はちょっと無理です」

つい本音を言つてしまつたらクスッと笑う。

「そうですね、普段もう少し真面目だつたら私も考えるんですけど……」

あらかわいい。

「き、聞いてないですよね!」

その後、ヒバリさんは自分が何を言つたか気づいたみたいで真っ赤な顔して慌てながら詰め寄つて来た。

残念僕は難聴系主人公じゃないのでバツチリ聞いてしまいました。  
でも安心して下さい。

さつきの言葉は誰にも言わずに僕の胸にしまつておきます。

「え？なんですか？最後の方はよく聞こえませんでした」

そう言うと安心したのかホッと息を吐いていた。

うん、こんなひどい時代ですけど二人共いつまでも仲良くしてくください。  
世紀王になつてしまつた僕にはもう手に入らないかけがえのない時間ですから大切  
にしてくださいね。

さて思い出はこの辺で終わらせて現実に戻るか。

「ヒバリさん、任務で聞きたい事があるんですが？今いいですか？」

「はい、なんですか？」

「ミッショーンの同行要請が入つたので第三部隊が受け持つた暴走バイク捕獲命令の内容  
について聞かせてください。

「……大丈夫なんですか？第三部隊の方々はライダーさんの事をその……あまりいい感  
情を持つていなーいんじや？」

言葉を選びながら訪ねてくる。

そこには受付の仕事でなく僕を心配する竹内ヒバリ個人がいた。

ヒバリさんもしつてたか。

どうやらアナグラ内で第三部隊での僕の評価は有名らしい。

そうか、だからあの時ツバキ教官は僕に気をつけろと。

僕の所為で教官まで迷惑かけてしまつていたのか。

「僕は大丈夫です、それに受けるか受けないかは内容を聞いてから決めます」

「分かりました、これも仕事ですので任務内容を説明させていただきます」

仕事モードに切り替わり顔つきが変わり端末を操作し任務内容を呼び出す。

彼女もプロなんだなと改めて思った。

「最近観察対象のアラガミが次々ロストしていき、つい先日も愚者の空母に現れたコクーンメイデンも消失したと報告がありました、監視班の報告では無人のバイクのような乗り物がコクーンメイデンが跳ね飛ばしていたと報告があつたんです」

端末を操作し終え、指を止めると顔を上げ説明が始まる。

跳ね飛ばしたつて随分アグレッシブなバイクだな。

「目標はその後監視網を抜けた報告はなく今だに愚者の空母近辺に潜伏していると思われます」

愚者の空母とは付近にはかつて神機のない頃アラガミと戦闘し破壊された軍艦や空母の兵器といった残骸が撤去されず今も存在している場所の名称である。

まつたくアラガミと必死に戦った人達が眠っている場所なのに愚者だなんて誰が名付けたか知らないけどひどい名前を付けるものだ。

「あと、捕獲したバイクはその部隊で好きに扱つていいって聞いたんですか？」  
疑うわけじゃないけど一応これも確認しておくか。

「は、はいバイクに至つてはアラガミならば破壊、そうでなければ捕獲した部隊に任せるとなつていま……！」

ヒバリさんが端末を操作しながら説明してくれていた表情が驚き強張る。  
どうしたんだ急に？

僕に驚いたというより僕の後ろ見て驚いてるような。

「これで信じてくれたか？そこでだ幽靈バイクを捕まえるためにお前のバイクと運転技術が必要だ、俺たちに力を貸せ。さつきも言つたがそれなりの分け前はくれてやる」

「？」

背後に出撃準備を終え、神機の入つたアタシユケースを持つたやたら上から目線のカレルさんと第三部隊の面々とその後ろには不服げなユウカが立つっていた。

そうかさつきのヒバリさんの反応の原因は第三部隊が来たからか。

カレルさんの態度に僕を見るヒバリさんも心配そうな顔をしている。

今回の件は僕の所為でみんなに心配かけてしまったな。

やつぱり改組人間である僕は寂しさに負け組織に所属して誰かと一緒にいるべきではなかつたのかも知れないな。

今さら言つても後の祭りか。

頭を切り替えよう。

それにもしても無人で走る暴走バイクか…ライダーとして興味があるな。

そもそもバトルホッパー以外で無人で走るバイクなんて仮面ライダーのバイクでなければありえない。

…いやもう一台ある。

BLACKのもう一台のあのバイクなら…。

いや、そんなわけないか。

あのバイクがこのゴッドイーターの世界にいる筈がない。

それにもし幽霊バイクの正体がアラガミなら大変な事になる。

よしカレルさんの口車に乗るのは癪だけどこのミッショソ受けてみるか。

「分かりました。行きます」

「物分かりがよくて結構。じゃあ今から出撃するからお前は櫛の所にあるバイクを持つてきて準備しろ」

「分かりました」

そうだついでにリツカさんに事情を話して捕獲する時に使えそうな鎖みたいな物がないか聞いてみよう。

こうして、ヒバリさんにミッションの受注をしてもらい僕は第三部隊と共に幽霊バイク捕獲に乗り出した。

つづく

# 19話

【ライダー side】

無人で走る謎の幽霊バイクを捕獲するべく手掛かりを求めて俺、仮面ライダーBLA CKはリツカさんから借りた捕獲用の鎖を肩に担いで横にいるバトルホッパーと一緒にカレルさん率いる第三部隊と共に最後の目撃情報があつた『愚者の空母』に訪れていた。

「よしここで二手に分かれて捜索するぞ、見つけたら信号弾で知らせろ」

第三部隊隊長のカレルさんが指示が出る。

「組分けはどうするのさ？ 言つとくけど僕はその化け物と組むのはいやだよ、二人になつた所を襲われたくないからね」

皮肉交じりに言つてくるジ Yunさん。

俺は第一、第二部隊と違い第三部隊からはいい印象を持たれていない。だから第三部隊にはあまり近づかないようにしてたんだけど。でも幽霊バイクの件をほつておくわけにはいかない。

下手に放置しておいたら自走できるバトルホッパーにまで仲間と思われ疑いの目が向けられる可能性がある。

それだけは何としても避けたい。

だから早急にこの事件を解決しなければ。

「あら、だつたら私がライダーと組ませてもらうわ、彼の戦い方は近距離タイプで遠距離タイプの私と相性がいいし、彼とは一度組んでみたかったのよ」  
 「ジーナか、よしいいだろう。それにジュンは俺の目の届く範囲に置いておかないとまた抜け駆けして取り逃がしそうだからな」

「なんだとカレル!? めえ！」

「本当の事だろ、前のミッショーンはその所為で儲けそこなつたんだからな」

「じゃあ決まりね、私達はA地区を捜すから、二人はB地区をお願い。行きましょうライダーダー」

怒鳴り合うジュンさんとカレルさんを放置してジーナさんは俺の手首を引っ張つていく。

「え? ほつておいていいんですか?」

「いつものことなんだから相手にするだけ時間の無駄よ」

引つ張られながら後ろ振り返ると「人は気づくことなく言い争いを続けていた。

あ、これなら大丈夫かもしないな。

いまだ言い争うカレルさん達を放置して俺達は今いた場所からかなり離れたA地区に移動し幽霊バイク捜索を始める。

それにしても鉄塔の森や贖罪の街もそだつたけどこの愚者の空母も草や木、鳥などの動物もいなく生命の息吹を感じられないな。

あるのは魚のいないオイルで濁った海とそのオイルを垂れ流したであろう錆びて朽ち果てた巨大な軍艦だけだ…。

ひどいな、これもアラガミの仕業なのか。

「感傷に浸つていてるところ悪いんだけどまずはお仕事しなければダメよ」

改めてアラガミに対する怒りが芽生えようとしたら背後からジーナさんに声をかけられる。

「あ、すみません捜索を開始します」

いけない、いけない今回ここに来たのはアラガミを倒すためじやなくて幽霊バイク捜索の為だった。

俺達はまず見晴らしのいい岩山に移動してそこを仮拠点とする。

双眼鏡を使って辺りを見回すジーナさん。

僕も望遠能力のあるマルチアイを使って探しているがバイクはおろかアラガミ一匹

すら見つからない。

「アラガミまでいないつて事は噂の幽霊バイクが駆逐したんでしょうか?」

「だとしたら少しマズイわね…」

双眼鏡で探しているジーナさんがぽつりと返事を返した。

「え? どうしてですか?」

アラガミがいなのはこちらにとつてもいい事の筈なのに。

まさかジーナさんもカレルさんみたいに儲からないって言う気なのか。

「いずれ榎博士の座学で習うかもしれないけどアラガミは何を食するかは特殊な信号<sup>パルス</sup>」

偏食場<sup>へんしょくば</sup>で食事の傾向を決めているの、細かい事は榎博士に聞きなさい

偏食場<sup>へんしょくば</sup>か、帰つたらさつそく聞いてみよう。

「話を戻すけどこらのアラガミがいなくなつたつて事はこの縄張りが空いたつて事よ。そしたらこの縄張りを狙つて他の地区にいたアラガミが一齊に集まつてくる恐れがあるのよ」

しまつたそれは考えもしなかつた。

もし一齊に集まつてしまつたらアラガミ同士が喰い合つてもつと強いアラガミが生まれてしまうじゃないか。

「状況を理解したようね、覚えておきなさい確かにアラガミを駆逐するのは私たちゴツ

ドイーターの仕事だけどただ闇雲にアラガミを始末するだけじゃダメ。ある程度はどうしても残して縄張りを安定させておかなくてはならないの」

「……分かりました」

ただ倒すだけじゃ駄目なのか。

難しい問題だよな。

のか。

まだまだ知らない事が山積みだな…。

あれからかれこれ三時間ぐらい搜索しているが影も形も痕跡すら見つからない。

「これだけ探しても見つからないなんてもう移動してしまったんでしょうか?」

「どうかしらね? 他で見つかった報告もないし私の勘もまだこの辺りにいるつて言つて るのよね」

勘ですか…当たるのかな。

「あら疑つてるの? 私の勘つてこれでも結構当たるのよ」

「う、疑つてなんかいませんつて」

リツカさんやカノンさんもそうだけどなんで俺の考えることが分かるんだろう。

俺つて分かりやすいのかな。

それともアナグラの女性陣はみんな勘が鋭いのか。

そういえばジーナさんはカレルさん達と違つて俺を化け物じやなくちゃんと名前で呼んで普通に接して話しかけてくれる。

できるだけ避けていたからあまり話した事なかつたのに。

「あの…ジーナさん」

「なにかしら？」

どんな結果になるか分からぬけど勇気を出して尋ねてみるか。

「どうして普通に俺と接してくれるんですか？」

「え？」

そういうとジーナさんはきよとんした顔になる。

普段クールなジーナさんが見せない表情で珍しいものを見てしまつた。

「いえ俺の事…怖くないんですか？それに…」

「どうして私はカレルやシ Yun みたいに化け物と呼ばないつて？」

いきなり確信をついてきた！

「は、はい…」

観念して正直に話す。

「なぜかしらね、あなたを見ていると二人の言うような化け物とは思えないからかしらね」

「それも勘ですか？」

「ええそうよ、それに知つてる？勘つて経験を積み重ねてきた物の結果でできてるものなの」

確かにそれ本か何かで見たな。

「そして私の勘が言つてるわ、あなたは悪人ではないとね、だから人とは違う姿や力なんてどうでもいい」

なんだらうジーナさんの言葉にものすごい自信と説得力があるな。

俺もこんな風になれたら変われたら少しは違うのかな。

「私が本当に怖いのは人間の姿をしていても腹の底で何を考えてるか分からぬ支部長のようない人間ね」

なんでそこで支部長が出てきたんだろう。

「あの確かに支部長は何を考えてるか分からぬ人かもしだせんが何もそこまで悪く言う必要ないのでは……？」

爆弾付きの首輪を巻かれたけど俺を極東支部に招き入れてくれた恩人だからあまり悪いわないとほしい。

「そう？ ただあまり人を信用しすぎると裏切られた時、手痛いしつペ返しを食らうわよ」「確かに俺に悪意をぶつけてくる人はいます……しかしそれでも受け入れてくれた人を信じていきたいんです」

アナグラの中には第一部隊のリンドウさん達や第二部隊のタツミさん達のように俺を仲間として受け入れてくれる人達はいる。

けど反対に今でも怖がっている人やこの異形の姿に嫌悪感を感じている人は少なくない。

だからといってそれをどうにかしようとは思わない。

無理に何とかしようとすれば反発が起こり神機使い同士で派閥ができるてしまう。

そうなれば任務に支障ができる犠牲者が出てしまうかも知れない。

だからこのままの状態を維持するしかないんだ…。

辛くないといえば嘘になるけど俺を信じてくれる人達がいてくれるなら今はそれだけでいい。

「そう、それなら悪くないと思うわ、けど……」

ジーナさんがなにか言おうとした時、バイクのエンジン音が近づいてきた。

「どうやら現れたみたいね、おしゃべりはおしまい、仕事するわよ」

「はい！」

気持ちを切り替えて音がする方に向かうと人が乗つてている五台の黒いバイクが一台の白い無人バイクを追い詰めていた。

「先客がいたか、下手に乱入してトラブルになるのはごめんだし、どうする？」

そんな…なんであるバイクは…それにあいつらは…。

見覚えのある白いバイクと黒いバイクに乗る者達。

それは仮面ライダーBLACKを見たものなら誰でも知つていてる。

黒いバイクはデスランナー。

乗つてているのはテストロイド。

どちらも仮面ライダーBLACKに出てくるゴルゴムが造つたバイクとロボット。

そして白いバイクは仮面ライダーBLACKのもう一台の頼れる仲間ロードセクターだ。

バカな！なんでこの世界にいるんだ？！

「ライダー！」

「え、は、はい」

ジーナさんの声で思考の渦から現実に戻される。

「どうしたの呆然として？あのバイクの事何か知つてるの？」

「あれは…あのバイクは…」

説明しようとしたらロードセクター側に新たな動きがあつた。

「もう逃げられんぞ！ カアアアア！」

センシティブイヤーを発動していた為、テストロイドの声が聞こえてきた。

五体のテストロイド達が一斉に奇声を上げるとヘルメットが割れ、黒いジャケットの下で何かが蠢き<sup>うごめ</sup>、やがて虫の足のような物が服を引き裂きながら出てきて見覚えのある五体の蜘蛛の怪物が現れた。

「シャアアアア！」

五体の蜘蛛の怪物達はそれぞれ口から綿のような糸を吐きロードセクターのタイヤやハンドルに巻き付き動けなくなる。

動きを封じられたロードセクターは逃げようとタイヤを回転させようとするがこびり付いた糸の所為で思うように回らずその隙に五蜘蛛の怪物達はロードセクターとの距離を詰める。

「なにあれ!? あれもアラガミなの…？」

「まさかあれははクモ怪人!」

クモ怪人、それは仮面ライダーBLACK1話に出てきた文字通り蜘蛛と人間を合わせたような秘密結社ゴルゴムの怪人。

男性型と女性型の計五体の怪人で集団戦を得意とし口から吐く糸で相手を動きを封

じて襲い掛かる戦法を得意とする恐ろしい相手である。

「クモカイジン？あなた、あの怪物が何だか知ってるの？」

「……ジーナさんは動かないでください、いくぞバトルホッパー！」

「ち、ちよつと待ちなさい」

俺の声に反応してバトルホッパーがこつちに走つてくる。

俺はジーナさんの静止を振り切りバトルホッパーに飛び乗るとロードセクターの方に走り出した。

「一体どうしたっていうのよ…」

残されたのは事情を知らないジーナさんだけだった。

バトルホッパーを運転しながら状況を頭の中で整理する。

おそらくロードセクターは俺やバトルホッパーと同じであの神の所からやつてきたんだろう。

ロードセクターを開発するなんて今のこの世界の科学力ではまず無理だ。

そして今ロードセクターを捕まえようとしている仮面ライダーBLACKに出てきたクモ怪人。

ならアラガミやこの世界の生き物でなく神の仲間だ。

なぜロードセクターとクモ怪人が世界に来て争っているのか分からぬけどこれは

チヤンスだ。

クモ怪人から神の本拠地に行く方法を聞き出してやる！

俺はバトルホッパーを最高速度してロードセクターとクモ怪人の元に向かつて行つた。

つづく

# 20話

【三人称 side】

「手間をかかせおつて！このガラクタが！」

神の元から脱走したロードセクターに追撃者の男性型クモ怪人が怒鳴る。

五体のクモ怪人に何重にも束ねられた頑丈な白い糸が纏わりつきロードセクターは身動きが取れずにいた。

しかし逃げ出した事を後悔はしていない。

完成してすぐ冷たい暗闇の倉庫に押し込まれたがこの広い世界で思う存分走りませ  
れたのだから。

しかし一つだけ心残りがあるとすれば自分の主である新たなる仮面ライダーBLA  
CKに会えなかつた事だ。

おそらくこのまま捕まれば脱走した処罰としてバラバラに解体されてしまうだろう。

一目でもいい。

その姿か見たかつた。

ロードセクターがすべてを諦め絶望の闇にひれ伏しかけたその時。

ブオオオオオ!!

バイクのエンジン音と共に彼は……希望という名の太陽の光を身に纏つた黒き勇者が駆けつけた。

### 【ライダースイード】

俺は持ってきた鎖を司令塔のクモ怪人目掛けて投げる。

「グオッ！」

投げられた鎖はクモ怪人を縛り上げて動きを封じる。

とつぜんの出来事に動搖してキヨロキヨロとするほかの四体のクモ怪人達。

司令塔が動けなくなりパニックに陥っている。

俺はそんなクモ怪人達を背後からバトルホッパーの突撃技『ダイナミックスマッシュ』で跳ね飛ばしロードセクターを護るようにバトルホッパーをUターンさせてクモ

怪人達の方に向き立ち塞がる。

「?」

俺の顔を見て倒れながら驚愕しているクモ怪人達とライトを点滅させて喜んでいるようなロードセクター。

この隙にバトルホッパーから降りてロードセクターに纏わりついている糸をライ

ダーチョップで断ち切つた。

「き、貴様まさか！」

どうにか鎖をほどき地面に叩きつけた司令塔のクモ怪人は驚きの声を出す。

「ああそっさ、お前たちの思つてゐる通り俺はお前たちの言う神からこの世界に堕とされた…」

クモ怪人達の方に振り向いた。

「仮面ライダー！」

右手を突き出し、左手は腰に添え右手を握り左斜め下に振り下ろす。

「BLACK!!」

左手は腰に添え、右手を空に高く振り上げる。

そして最後に空に向けていた右手の拳を力を込めて握り直した。

身体が覚えていているかのように自然と身体が思うように動く。

まつたくいつか変身して悪いやつと戦うんだつて子供だつた頃の夢がこんな  
神様の夫婦げんか最悪な形で叶ってしまうんだから世の中何が起こるか分からん。

いや今はそんな昔の事より目の前の敵に集中しないと。

「これはいい、まさか神のご加護もなくまだ生きていたとは、貴様からキングストーンを取り出して我が神に捧げる手土産にしてくれる」

「貴様ら、やはりあいつの手の者か！」

両手を拳にして戦う構えをとる。

「やれ！」

「シャアアアア！」

問答無用とばかりに二体のクモ怪人が襲いかかってくる。

「ロードセクター早く逃げろ！」

俺の声を聞いたロードセクターは走り去る。

襲いかかってきた二体のクモ怪人がしがみついてくる。

「こいつらまさか!？」

しがみつかれて動けない中、残りのクモ怪人はデスライナーに乗りロードセクターを追つて行ってしまった。

くつ！俺を足止めしてその間にロードセクターを捕らえる作戦か。

そうはさせない！早くこいつらを倒して後を追わないと。

羽交い締めるクモ怪人を振り払い腹を拳で殴る。

もう一体のクモ怪人の顔を殴り飛ばしさらに起き上がるこうとした所に横から頭に向けてハイキックをして追い打ちをかけた。

「ば、バカな能力があるとはいえるが、戰いに関しては素人の筈、なのになぜ戦闘訓練

を受けている我らと互角に戦える!?

当たり前だ。

俺は右も左も分かず頼れる人もいないこの世界で試行錯誤しながらどうにかアラガミと戦い、何度も苦戦しながらバトルホッパーと共に今日まで生き残ってきた。

目の前にある血や肉はゲームでなく本物でアラガミとはいえ命を奪つた事実に嫌悪感を感じ吐き気を催しかけ身体の震えが止まらなかつたが何度もアラガミと戦つているうちに慣れたのかその嫌悪感もなくなり震えも止まつた。

それにアラガミを上手く倒せた時もあれば失敗して命からがら逃げたのは一度や二度じやない。

傷を負つて動けなくなつても頼れるのは自分とバトルホッパーだけだつた。

負けた日は動けなくとも腹は減る。

そんな時は痛みの走る身体を引きずりながら食料と水をかき集め傷を癒しながら力を使いこなすためにどう動けばいいどう立ち回ればいいかと仮面ライダーの動きを記憶を頼りに思い出し何日も考え抜いた。

俺は今まで自分を鍛え色々試して生き残つてきた。

それだけじゃないアナグラではツバキ教官やリンンドウさんに厳しく鍛えてもらつたおかげで相手がゴルゴムの怪人でも十分に自分のスペックを引き出させている。

これなら相手がゴルゴム怪人でも十分渡り合える！

ありがとうございますツバキ教官、リンドウさん。

……何度も臨死体験しかけて死ぬかと思いましたがそれだけの価値はありましたよ。

「今だ！トオ!!」

ジャンプして右腕を振り上げる。

「ライダー……」

着地同時に右のライダーチョップがクモ怪人に直撃。

「ダブルチョップ!!」

さらに左の手刀がもう一体のクモ怪人を横一線に切り裂いた。

ライダーダブルチョップ。

集団戦用に特訓して編み出した左右同時に放つライダーチョップの強化技だ。

まさか初めて使う相手がアラガミでなくゴルゴム怪人でこんなに早く役に立つとは思わなかつたな。

「グギヤヤ!!」

身体を切り裂かれた二体のクモ怪人炎に包まれ消滅した。

「後はこれをどうするべきか…」

俺はクモ怪人が乗っていたデスライナーに近づく。

持つて帰つてアナグラの戦力増加に使いたいがなにが仕掛けられているか分からな  
い。

だからといってここに放置するにしてもアラガミに捕食でもされて特性を取り込ま  
れたらそれこそ厄介だ。

なら少し勿体な気もするが破壊するしかない。

「ライダー・パンチ！」

エンジンとコンピューターを破壊し衝撃で火花が出てガソリンに引火してデスライ  
ナーは爆発炎上した。

「これでよし、急いで後を追わないと」

バトルホッパーに飛び乗り急いで後を追いかけた。

つづく

# 21話

【ライダースイド】

手下クモ怪人二体を倒した俺はバトルホッパーで残りのクモ怪人を追っていた。

「あれだ！」

しばらく走っているとクモ怪人のデスライナー軍団が見えてくる。

しめた！ロードセクターも奴らのバイクも整地を走るオンロードタイプのマシンだからアラガミの所為で荒れ地になつていてこの道に手こずつて思うようにスピードが出せないんだ。

アクセルをフルスロットルに回して荒れ地を走るオフロードタイプのバトルホッパーのスピードがどんどん上がっていく。

そしてバトルホッパーは自身の最高時速である500kmに達した。だが最高速で追いかけているにもかかわらず距離は縮まらない。

「くつ！さすがにすごい速さだ」

確かにバトルホッパーは他のバイクと比べかなりの馬力と速度が出る。

しかし荒れ地で走るオンロードマシンとはいえデスランナーは最高速度960km

のロードセクターに対抗して造られたマシン。

バトルホッパーの速度をはるかに上回る。

TVと違い改造されているのか 800kmに達しても風圧に耐えきれず爆発する様子もない。

おまけにこの距離だ。

いくらバトルホッパーでもこの差を埋めるのは難しい。

「どうしたらしいんだ？」

なにか策はないかと思考を張り巡らせようとしたその時。

突如、一体のクモ怪人のデスランナーのハンドルが爆発してコントロールを失い隣を走っていた残りのデスランナーに衝突、二体のクモ怪人達はバイクから投げ出されハンドルが壊れたデスランナーは爆発した。

「今のは狙撃！ 一体誰が？」

マルチアイで銃弾が飛んできた方を確認して見る。

「ジーナさん！」

そこにはここからかなり離れた場所から先回りしていたであろうジーナさんが神機を構えて白い煙が立っている銃口を向けていた。  
ありがとうございますジーナさん。

「くそあの人間め！邪魔をしおつて！」

司令塔のクモ怪人が忌々しく吐き捨てるように怒鳴る。

「トア！」

「グア！」

バトルホッパーからジャンプしてデスランナーを破壊されたクモ怪人を押し倒し顔にパンチをする。

「貴様なぜもうここに！まさかもう我が同胞を!?」

俺が来た事がよほど予想外だったか驚く司令塔のクモ怪人達は動搖を隠せていない。

「クモ怪人、お前達にロードセクターは渡さない！」

「小癩な！」

すぐに頭を切り替えてクモ怪人達は俺に遅いかかかって來た。

「トオウ」

突つ込んできたクモ怪人に合わせて軽くジャンプしながらハイキックを叩き込みもう一体のクモ怪人の振りかぶる腕を自分の左腕で受け止めガードしカウンターの要領で空いている右で殴り飛ばした。さらに起き上がった最初にハイキックを喰らわせたクモ怪人を巴投げで投げ飛ばしパンチで殴つてフラフラのクモ怪人にぶつける。

「ま、まさかライダーがここまで力をつけていたとは・・・こうなれば！」

俺の予想以上の戦闘能力に驚き逃げ出そうとする司令塔のクモ怪人。

「待て！」

「行かせはせんぞ仮面ライダー！」

追いかけようとしたら背後から手下クモ怪人の口から糸を吐きかけられる。  
「くっ！しまった!?」

身体にクモ怪人の強靭な糸が纏わりついて動きが鈍くなってしまう。  
「シャアアアア」

さらに追い打ちをかけるようにもう一体の手下クモ怪人も糸を吐き出す。  
二体のクモ怪人は動き回りながら糸を吐き続けていく。

やがて俺の身体に大量の糸が纏わり付き繭のようにグルグル巻きにされてしまい身動きが取れず地面に転がつてしまつた。

「ふふふどうだ、もうどう足搔いても動けまい」「体が・・・」

もがいて糸を払いのけようとするが腕がうまく動かない。

「あとは貴様をバラバラにして！」

「キングストーンを引きずり出すだけだ！」

「おい」

「おうよ！」

アイコンタクトを交わすクモ怪人達。  
こいつら何をする気だ？

「仲間の仇だ！ 思い知れ仮面ライダー！」  
クモ怪人が倒れてたデスライナーを起こし乗り込む。

デスライナーは一直線にこちらに向かつて来た。

こいつ、デスライナーを俺にぶつける気か！？

冗談じやない、そんな事されたらいくらなんでもさすがに無事じやすまないぞ。  
どうする！ そうだ！

こうなつたら特訓して編み出した第二の技を使えばもしかしたらこのピンチ切り抜けられるかも。

「トオウ！」

そうと決まれば糸の纏わり付いた動き辛い身体をなんとか起こして立ち上がり空高くジャンプする。

「バカめ！ 我らの糸だらけのそんな体勢でまともにライダー・キックが放てるものか！」  
確かにそうだな、お前の言う通り今の状態でライダーキックは無理だ。

普通のライダー キックならな。

「フラッシュ！」

空中にいる俺のベルトのバツクルから周囲を真っ白に照らす強烈な光が放たれた。

「ぐつ！め、目が！」

バツクルから放たれる強烈な閃光でクモ怪人達の目が眩む。

それと同時に閃光を浴びた体に纏わりついていた糸が高温の熱で消滅した。

「キツイイツク！」

糸が取れて自由になつた俺はライダー キックをデスライナーに搭乗しているクモ怪人目掛けて叩き込んだ。

「グギヤアアアア」

ライダー キックを喰らつたクモ怪人はデスライナーから投げ出され身体から白い煙を出しながら地面を転がり

「ア、ア、アギヤアアアア」

炎に包まれ爆発した。

「フラッシュ キック。」

本来は強烈な閃光で相手の視界を奪い動けなくなつた相手にライダー キックを叩き込む技である。

俺が戦っているアラガミは集団で襲つてくるのがほとんどで1対1で戦うのはごくまれだ。

だが俺の使えた技はパンチとキック。

単独で戦う相手向きだ。

集団戦に向いていない。

かといって他のゴッドイーターのように神機を使えと言われてもオラクル細胞に適合しない俺は神機を扱えない。

榎博士曰く、例え俺にオラクル細胞を注入したとしても体内のキングストーンがオラクル細胞を結合崩壊させるらしい。

だがそのおかげでオラクル細胞の塊であるアラガミに神機なしでダメージを与えられるのだと仮説を立ててくれた。

だがそれでも集団戦で不利なのは変わりない。

そこで戦闘経験の豊富なリンクさんに相談してアドバイスを貰い生まれたのがこのフラッシュユキックだ。

多分初めて会った時にキングストーンフラッシュユをリンクさん達に浴びせて目を眩ませたのがヒントになつたんだろうな。

ただこの技は味方のいる時に使つたら味方の目まで潰してしまって一人の時にし

か使えない。

まあ、分かれて探索してる時にアラガミに襲われても攻撃しながら光で自分の居場所を知らせるいい技だとリンクさんがビール片手に笑いながら自画自賛してたけど実際そうだから反論できない。

ただこの技は仮面ライダーが好きな人や華麗な戦いを信条にしていたエリナちゃんのお兄ちゃんのエリックさんが見たらきっと怒るだろうな。

目潰しなんかして攻撃するお前なんか仮面ライダーとは認めない。

そう言われても仕方ない行為だ。

仮面ライダーが使う技にしたら少し卑怯かもしだれないな。

けどアラガミとの命掛かっている戦場でそんな甘い事は言つてられない。

例え卑怯で泥臭かろうが生き残る為だ。

それがどんなに不様であろうとも・・・。

強くて優しく格好いい仮面ライダーのように振る舞うのはやっぱり難しいな・・・。

それに今回この技を使つたのはもう一つ訳がある。

それは糸を吹き飛ばす為だ。

キングストーンフラッシュは光と共に熱とエネルギーを放出するのでもしかしたら熱とエネルギーで糸を払いのけられるのではないかと半分賭けではあつたがどうやら

その通りだつたようでもまくいった。

とりあえずダブルチョップとフラッシュキックは完成したな。

まだ一度も成功していない大技が一つある。

これが完成すれば今のライダー・キック以上の技になる筈だ。

なんとしてもそれを完成させなきや。

「バ、バカ来るな!!」

声をした方を見ると乗り手を失つたデスライナーは暴れ馬のように暴走し光から目が回復したクモ怪人に迫つていた。

ガツ！

そしてデスライナーはクモ怪人に衝突、クモ怪人を巻き込みデスライナーは爆発四散した。

一步間違えれば俺がああなつていたのか。

身震いしながらも四体目も擊破したことを喜んだ。

あとは司令塔のクモ怪人だけだ。

そういえば司令塔のクモ怪人はどこに行つたんだ？

さつきから姿が見えない。

辺りを見回してクモ怪人を探していると

「下等な人間が！よくも我らの邪魔してくれたな先に始末してやる！」

怒り狂う司令塔のクモ怪人の声。

「・・・いつたいなんなのクモの怪物は？」

ジーナさんの悲痛な叫びをセンシティブイヤード捉えた。

あいつまさか邪魔された腹いせにジーナさんの方に向かつたんじや！

俺はバトルホッパーに跨ると急いでクモ怪人と戦っているジーナさんの方に向かつた。

つづく

## 22話

【ジーナ side】

「ハアハアハア……」

何者なのこの怪物は？

私の前には怪物がいる。

別にこの時代、アラガミと呼ばれる怪物がその辺にいるから珍しくもない。  
けどこいつはどうもアラガミとは違う気がする。

私達、第三部隊はとある任務で愚者の空母に訪れていた。

任務内容は無人で走る幽霊バイクの噂の調査と捕獲。

話を聞いた時は最初はデマか単なる見間違いかと思い正直最初は調査だけからアラガミを撃ち抜く事ができないしいるかどうかも分からぬ幽霊の調査なんてバカバカしくて参加したくなかったが報酬の良さに釣られたりーダーのカレルが受けてしまい部隊の一人である私もついていくしかなかつた。

そんな時カレルが最近アナグラで話題になつてゐる仮面ライダーを連れて行くとい出す。

彼はバトルホツパーと言うバイクを所有しており幽霊バイク捕獲に役立つだろうと  
いう理由だ。

私も彼に少なからず興味があつたから反対する理由はなく賛成した。

それからカレルとシユンが彼に失礼なことを言つてユウカを怒らせたりと一悶着  
あつたがどうにか説得し私達は幽霊バイクが目撃された現場に向かう。

カレル達と二手に分かれて私はライダーと共に捜索する。

なんとか標的のバイクは発見したけどそこに見たことない怪物もいた。

人の形しているが見た目は蜘蛛そのもの。

アラガミかと思つたけど人語を操り、しかも人間のようにバイクに乗る事もできる。

ライダーはこの生き物がなんのか知つているかのような口ぶりだつたけど？

なんとか距離をとりながらバレット弾を撃ち込む。

効いていないわけではないわね。

けど致命的なダメージは与えられていないみたい。

「シャアアア！」

「くっ！」

アラガミに比べて動きが速いし人の言葉を話せるくらい知能が高く私が発砲できな  
いようにと距離を詰めてくる。

これはきつい……かな……。

「さすがはゴッドイーター、ただの人間のように一筋縄ではいかんか」  
むこうは余裕そうね……。

「だが！」

来る？

「所詮我らの敵ではない」

いきなり口から白い糸のような物を吐き出してきて神機に絡みつく。  
「しまつ!?」

吐き出された糸に神機を奪われ遠くに放り投げられてしまった。

「くっ」

放り投げれた神機を見て啞然とした隙をつかれてさらに吐き出された糸が私を縛り付けた。

「さて本来なら観察対処に手を出す訳にはいかんのだが貴様は我々の姿を目撃しあまつさえ任務の妨害までおこなつた。決して許せるものではない」

観察対象？任務？こいつのようないい奴が他にもいるの？もしかしてライダーはこいつと同じ？

いえ、そんなわけないわ。

彼はこいつなんかとはとは違う。

「貴様はここで始末する。恨むなら仮面ライダーに手を貸した自分を恨むのだな」。

蜘蛛の怪物が縛られ動けない私に迫る。

「これまでなの・・・」

その時私は死を覚悟した。

【ライダー side】

「させるとか！」

ドガツ!!

神機が放置され、蜘蛛の糸に縛られて身動きのとれない状態で地面に転がるジーナさんを発見した。

ジーナさんはなんとか糸を取ろうと必死にもがきながらクモ怪人から逃げようとしていた。

早く助け出さないと！

バトルホッパーからクモ怪人目掛けて跳んで押し倒し動きを封じる。

「ジーナさん、今だ！」

「ええ分かつた…」

クモ怪人と組み合っている間に糸はバトルホッパーが払い除け、ジーナさんは神機を拾いに行つたのを見計らうとすぐに立ち上がりつてワン・ツーと右、左のパンチでクモ怪人の顔を殴り飛ばす。

「…ライダー跳んで」

「！」

背後から声をしてすぐにジャンプする。

その後すぐにジーナさんの拾い上げた神機から発射されたバレットが俺の立っていた場所を通り抜けてクモ怪人に直撃する。

「グギヤ！」

バレットがクモ怪人の身体に当たり爆発する。

「…やつぱりこのバレットもイマイチ効果が薄いわね」

確かにアラガミには効果があるバレットも怪人相手だと効果はほとんどないようだ。

「お、おのれ…もう許さん！デスランナー来い！」

クモ怪人に呼ばれたデスランナーが襲つてきて俺とジーナさんは間一髪避ける。

「こうなれば二人まとめて始末してくれる」

クモ怪人がデスランナーに乗り込むとこちらに向かつて突進してきた。

「トア！」

突進するデスランナーをなんとか避けるがジャンプ中にクモ怪人に殴られ体勢を崩し背中を強打してしまう。

「ぐつ！」

「かかつたな！」

クモ怪人の口から吐き出された糸が俺の首に巻き付いた。

「しまった！」

「このまま引きずりまわし貴様の身体をズタズタにしてから崖下に突き落としてくれるわ」

クモ怪人がデスランナーのスロットルを回すと発進して俺は上向きに倒れたままデスランナーに引っ張られてしまつた。

「ライダー！」

ジーナさんが叫ぶが今の場所からどんどん離れて行きジーナさんの姿が小さくなつていく。

く・・・苦しい・・・

デスランナーはスピードを上げていきそれに比例して俺の首に巻き付いた糸はきつく締まり地面をこする背中は摩擦熱の痛みと熱さが容赦なく襲つて來た。

首に巻き付いた糸を取ろうとするが頑丈に巻き付いて取る事ができない。

この先にあるのはには数百メートル以上ある底の見えない谷底。

いくら仮面ライダーでもあの高さから落ちたらただやすまない。

ここで墮とされたらクモ怪人の次の標的はジーナさんやロードセクターだ。

このままじや奴の思い通りになつてしまふ・・・。

落ちるわけにはいかない。

「バトルホッパー！」

意識が朦朧としながらもなんとかバトルホッパーを呼ぶ事ができた。

「苦しいか？苦しいだろう仮面ライダー、だが我が同胞が受けた苦しみはこんなものではないぞ・・・ハツハツハ」

クモ怪人の不気味な笑い声が聞こえる。

し・・・知るか、先に手を出してきたのはお前たちだろう・・・。  
だ・・・だめ・・・だ、息ができない・・・意識が・・・

「ふつはつは。貴様を始末してからキングストーンを返してもらう

糸を掴む手にも力が入らず放しかけたその時。

不意に引っ張る力がなくなり息ができるようになつた。

「ハアハアハア・・・」

俺は失われた酸素を一気に肺の中に入れる。

「一体どうして？」

息を整えながらクモ怪人の方を見ると

「ええい！邪魔するな！どかんか！」

クモ怪人が怒鳴るその先に真正面からデスライナーとぶつかって進行を妨げるバトルホツパーの姿があつた。

しかし馬力の差から徐々に押されていくバトルホツパー。

その上、敵はデスライナーだけではない。

「このガラクタが！」

デスライナーに乗るクモ怪人の容赦ない攻撃が身動きの取れないバトルホツパーを傷つけられていく。

このままでは俺だけじゃなくバトルホツパーまで破壊されてしまう。

・・・そうだ！

俺の命、お前に預ける。

だから力を貸してくれ。

「ロードセクター！」

目を赤く点滅させながらロードセクターを呼ぶ。

「とどめだ貴様から消えろ！バトルホッパー」

「バトルホッパー！」

クモ怪人が両腕を振り上げバトルホッパーに叩き込もうとした時。

ガシャン！

真横から赤い閃光が突っ込んで来てデスランナーとクモ怪人は勢いよく吹つ飛ばされた。

「ぐあああ！」

吹つ飛ばされたデスライナーも火花を散らしながら真横に転がり続けて燃料が漏れて引火したのか大爆発を起こした。

一体何が？

赤い閃光の正体、それは・・・。

「あれは・・・？」

赤い閃光が走り去った方向を見るとそこには見覚えのある白いバイクが走り去つて行つた。

「そうかさつきのはロードセクター最大の必殺技スパークリングアタック」

力を貸してくれてありがとうロードセクター。

おまえがいてくれなかつたら俺もバトルホッパーもどうなつていたか。

「お、おのれ：やはり貴様も我らを裏切るのかロードセクター！！」

フラフラになりながら立ち上がるクモ怪人。

身体から血のような体液を流しすでに満身創痍のクモ怪人。

「今だ！トオア！！」

空高くジャンプする。

「ライダー キイイック!!」

そのまま空中で体制を変え摩擦熱で紅く発光する右足でクモ怪人の身体を蹴り飛ばした。

「ギヤアア!!!」

白い煙を出しながら転がるクモ怪人。

これで決着はついた。

あとはこれでクモ怪人から僕をこの世界に送り込んだ神のいる場所を聞き出して奴の居所に乗り込めばすべて解決する。

そう思っていた。

いや思い込んでしまっていた。

しかしこの時は俺は浮かれて忘れていた。

この後、世紀末の辛い現実と改造人間の哀しい宿命を改めて思い知らされる事に…。

つ  
づ  
く

## 23話

【ライダー side】

「さあ答えろ！お前達はどうやつてこの世界に来た？どうやつたら俺を仮面ライダーBLACKに改造したアイツらの所に行ける？」

俺の命と平和な日常を奪い、改造人間に造り替えGEの世界に無理やり送り込んだ神の居所を聞き出す為、ロードセクターを狙つて現れた満身創痍のクモ怪人の胸ぐらを掴んで締め上げ尋問していた。

・・・いやあんな奴は神様じゃない。

真面目な本物の神様に失礼だ。

次からは邪神と呼ぶことにする。

ようやく元の世界に戻る手がかりを見つけて感情が高ぶり、俺の声にわずかながら怒気が含まれているが気にする余裕はない。

力を加減して倒さないようになりダメージを喰らわせたのはこいつの口を割らす為だ。

「バ、バカな奴だ」

「何！」

「た、例え天界に向かう方法を知った所で貴様ごときがあの方に勝てる筈がなかろう。大人しく従つていれば神は様々な恩恵を与えたのにな・・・クツクツク・・・貴様は神の恩恵もなしにこれからたつた一人で呪いのような五万年という膨大な時の流れの中を生きていくのだ・・・」

血を流し痛みに苦しみながらも吐き捨てるように語るクモ怪人に対する憐れみよりも今言つた事が脳裏に焼き付く。

こいつ今何を言つた!?

「も、もしかして?この身体は姿や能力だけじゃなくて寿命も本来の仮面ライダーBLACKとおなじだというのか!」

数秒ほど経つて脳が理解してしまつた。

確かにその可能性があるかもしさないと考えてしまつた時がある。

そんな事ないと無理やり頭の中でフタをしていた。

けど今脆くも残酷に崩れ去る：。

テレビ番組の仮面ライダーBLACKに出てくるゴルゴムの怪人達は強靭な肉体を持ち寿命は人間の寿命に比べ約三万年とかなり長いという設定がある。

それは怪人達の強さと寿命に憧れ、自ら怪人に改造される事と引き替えにゴルゴムの

悪事に手を貸す愚かな権力者達が少なからず存在するほどだ。

権力者達はなんでそんな物に憧れていたのだろう。

実際なつてしまつた僕には今だに理解できない。

そしてその怪人達の中で頂点に立つ仮面ライダーBLACK。いや創世王候補である世紀王は五万年に一度選ばれる。

それは三万年生きる怪人と違い創世王の寿命が五万年と長いからだ。つまり創世王候補である俺の寿命は最低でも五万年……。

俺が天寿を全うし再び邪神と対峙する為には、このアラガミの巣くう地獄の中を死なずにたつた一人で五万年の間生き残らなければならないのか……。

はつは……じよ、冗談だろ……。

今まで何度もアラガミと戦い傷つき、時には同じ人間からいわれのない迫害を受けてきた。

でもそれはこんな目に遭わせた邪神に復讐する為と耐え忍んできたのに。

それを五万年も耐えなければいけないなんて……。

「ついでに教えてやろう、なぜ貴様が人間の姿になれないのか、それはお前の変身機能にロックが掛けられているからだ」

変身機能にロックだと?

僕が元の人間に戻れないのはそれが原因か。

「何でそんな物を？」

「お前の仲間と思う人間達も後たつた百年ぼっちで死ぬ、そうなればまたひとりで生きていかなければならぬ……人間の輪の中に入れず未来永劫苦しみつづけるそれが貴様への天罰だ！」

天罰だと!? 勝手なことばかり言いやがって!!

確かにクモ怪人の言う通りこの数ヶ月の間、怖がれて石を投げられたりアラガミと勘違いされ攻撃され続けた。

それがまた繰り返される……。

いやだ……。

「どうした？ 何か思い当たつて嫌な事でもあつたのか？ ん？」

「き、貴様！」

「ぐつ！」

怒りに任せ醜悪な表情を浮かべるクモ怪人の顔をパンチで殴り飛ばす。

「ふ、ふつふつふ、私を殴った所でなにも変わらないというのに無様だな」「黙れ！ 死にたくなかつたら今すぐにそのロツクを解除しろ！」

クモ怪人の首を掴み上下に振る。

「クツクツク無駄だ、奇跡でも起こらんかぎりロックは我らが神にしか解除できん……それに任務に失敗した私は処刑されるだけ、どのみち天界に生きて帰れんよ……ならばここで絶望し苦しむ貴様の哀れな姿を笑いながら地獄に堕ちてやる」

こいつは本気だ。

死ぬ覚悟ができてしまつていてる。

もうなにをやつても口を割る事はない。

「なんでおまえらの……おまえらの……所為で俺はこんな理不尽な目にあわなくちゃいけないんだ！」

虫の息で抵抗する力も残つていないクモ怪人を怒りに任せて力いっぱい殴り続ける。「ぐほっ！ がはっ！」

殴り飛ばす度にクモ怪人の口から赤い体液が噴出され顔や榎博士から貰ったジャケットに飛び散る。

だがそれでも俺の怒りは収まらずクモ怪人の首を左手で掴み上げ持ち上げる。  
「ハアハアハア……ライダアアパアアンチ!!」

「やめなさい！」

「!?」

とどめとばかりに拳をふりあげたら声がして我に返る。

気がつくと目の前に血だらけのクモ怪人。

すでに息はなく手足は力無く揺れて眼も濁り完全に死んでいた。

これを僕がやつたのか？

「ひい!?」

自分のやつたことが怖くなつて首を掴んでいた手を放しクモ怪人は力なく地面に倒れて動かなかつた。

僕は…僕は…。

両手を見るとクモ怪人の血で真つ赤に染まつてしまつていた。  
いくら相手が憎い邪神の手先だつたからつてなんてことを…。  
もしこれが怪人じやなくてただの人間だつたら…。

「う！オエエエ！」

思わず想像してしまつた光景に耐えきれず嘔吐してしまう。

「ハアハアハア……！」

胃の中の物をすべて吐き出し息を整えていたら背中を摩られる感触で振り返る。

「……ジーナさ……ん？」

ハンカチを差し出す悲しそうな表情をしたジーナさんに呆然としていたがすぐにこの惨状を思い出して飛び離れる。

「ち、違うんだ、僕は…僕は…」

ほんの数分前に偉そうなことをジーナさんに言つてたのにも関わらず、こんな残酷な行為を怒りに任せてやつてしまつた。

僕は人間の自由と平和を守る仮面ライダーなのに…。  
なにが人を護りたいだ…！

僕はカレルさんの言う見た目通りの化け物じやないか！  
ジーナさんに見られてしまつた。

今回の事は当然、支部長や信頼してくれた榎博士、ツバキ教官にも報告されるだろう。  
そうなつたらもう僕はアナグラにいられない。  
人間離れした腕力を持ち感情をコントロールできない危険人物を誰が好き好んでそ  
ばに置くのだろうか。

せつかく受け入れてくれたリンンドウさんやユウカ達と知り会えたのに…。  
そんな人を失望させてしまった。

おそらく僕はアラガミと同じように討伐対象になるだろう。  
違うな、その前にこの首に仕掛けられた爆弾で『処理』される。  
嫌だ！死にたくない！

「安心しなさい…あれは人間じゃない…アラガミと同じ私たちを襲つた敵よ。それに今

回の出来事は誰にも報告する気はないわ…」

「え？」

「顔を上げるといつのまにかジーナさんが目の前にまで来ていた。

ジーナさんは地面に膝を付けて腰を下ろすと持っていたハンカチで僕の顔を優しく

拭き始めた。

「あ、あの…？」

「動かないで拭きづらいわ……人の顔を拭くなんて初めてで手加減が分からんんだから……目の所も拭いてあげる。なるべく優しく拭くけど痛かつたら言いなさい」

「は、はい……」

顔を拭いたあと、ハンカチを裏返しにして僕の赤い複眼を拭いていく。

それは泣いている子供の涙を拭うように優しく。

少しヒリヒリするが痛いってほどじやないので我慢した。

「終わつたわよ……」

「あ、あの…」

「何？ハンカチなら気にしないでいいわ、あとで洗うから」

「あ、いえそれもありますけどそれよりも僕の事が怖く…ないんですか？」  
さつきの戦いと呼べない暴力をジーナさんは、見てた筈なのに…。

「もちろん怖いに決まっているでしょ」  
ビクツ！

「そ、そう…ですよね」

あつさりそう言われ、さすかにショックを受ける。

やつぱり僕はここにいたら：

「でもね…それ以上に安心しているのよ。あなたが他の人と同じ年相応の16歳の青年だつたことに」

「この人は何言つてるんだろ。

あんなのが年相応な訳ない。

「どういう意味か分からないつて感じね、でも普通の16歳の青年ならつい怒りに身を任せてしまふなんてよくあることよ」

「そんな事…」

「ないと言い切れるかしら？むしろさつきあなたが蜘蛛の怪物を追いかける前に言つていたのを聞いてそつちの方が歪んでいると思つたわ。だつて無理して悟つたフリなんてしてるんだもの…」

思わず黙り込んでしまう。

「そうかもしない。

俺は仮面ライダーBLACKの姿に惹かれていつのまにか自分を殺して仮面ライダーにならなくちゃいけないと脅迫概念に囚われていたのかかもしれない。でもそれは無理だ。

僕は僕：仮面ライダーは仮面ライダー。

同じ存在じゃない。

間違いもある。

けどそのままにしておけない。

間違つてたら正せばいい。

「どんな聖人君子でも人は誰でも自分の中に残酷なケモノが一匹や二匹がいるものよ：もちろん私の中にもね」

ジーナさんは自分の腕輪に触れながら静かに話し始める。

「でもそのケモノに負けて自分で自由に制御できない限りはアラガミのように本能だけで暴れる化け物になり果ててしまう・・・」

確かに僕は・・・自分の中の“ケモノ”を制御できなかつたからこんな事態を引き起こしてしまつた。

今の僕はBLACKの能力は知識として分かつていても心がついていけずに振り回されて制御出来ていない。

ジーナさんの言う通り、これからは肉体面だけじゃなくて精神面も鍛えていかなくちゃならないな。

「それにはあなた一人で崩壊するほど極東支部はやわじやない……だから私達に後ろめたさなんて持たずにはつきり嫌と言つて自分に素直に生きなさい……それがあなたを心配する仲間の為でもあるのよ」

そう言われて少しだけ気が楽になつたような気がした。

言われてみれば極東支部は支部長を始め、榎博士やツバキ教官、リンードウさんといった優秀な人達がたくさんいる。

そつか、俺は自分はもう人間じゃないから心のどこかで線引きしてアナグラのみんなを信じ切れていたんだな。

第一部隊や第二部隊のみんな、仲良くなつた人達から拒絶されるのを恐れて一人で抱え込んでしまいその心の弱さが今回の事態を招いてしまつた。

帰つたらまずリンードウさんやツバキ教官に胸の内を打ち明けて相談してみよう。  
「ありがとうございますジーナさ……」

「おい聞こえるか？」

突如遮るように通信機からカレルさんからの通信が入る。

なんだろ？ カレルさんの口調がいつもの傲慢な口調じやなくてなんか焦っているよ

うな感じたけど。

「こちらジーナ、どうしたのカレル？」

ジーナさんが通信を繋げる

「どうしたもこうしたもじやない！こつちにクアドリガが出やがつて今交戦中だ！お前らどこにいる！すぐに援護に来い！」

「なんですって！」

連絡を受けたジーナさんが驚きの声を上げる。

普段冷静な彼女でさえこの通信内容は予想外すぎる事態だつた。

「くそ！？クアドリガのいる情報なんてなかつたのに！」

通信機から聞こえる轟音と爆発音、そしてシウンさんの悲痛な声。

クアドリガ、ノルンのデータで読んだことがある。

戦艦や戦車、人類が作つた兵器を大量に捕食したオラクル細胞がその特性を取り込み

自ら体内でミサイルや砲弾を製造を行い攻撃するんでもない凶悪な大型アラガミだ。

そうか愚者の空母には破壊された無数の戦艦の残骸がある。

ここは奴の餌場には最適つて訳か。

そんな厄介な奴がカレルさん達の方に。

急いで救援に向かわないと。

カレルさんたちのいるポイントに向かおうとジーナさんが背を向けると。

「行くの……？」

背後からジーナさんに声を掛けられ振り返ると辛そうな表情があつた。

「……はい」

「例え助けてもあの二人の性格からして感謝しない……むしろ逆、安全が確保されたらまた罵倒されるかもしれない……」

確かにジーナさんの言う通りかもしれない。

あの二人の性格ならコウタやアリサ達と違い神機なしで戦う僕を見て戦いが終わつたら恐怖し罵倒してくるだろう。

けど……。

そうだとしても……！

目の前で誰かが苦しんでいる所なんて見たくない！！

(BGM はるかなる愛にかけて)

「それでも行きます、自分で決めた事に後悔だけはしたくないです」

「……そう分かったそれがあなたの答えなのね、なら行きなさい、私もできるだけのフォ

ローをする……けどここからかなり距離があるわよ」

確かにここからカレルさん達のいる場所までかなりのかなりの距離がある。

バトルホッパーはさつき僕を助けようとしてクモ怪人から受けたダメージがまだ再生していない。

なら自力で走つていくしかないか。

考えている暇なんてない。

一分一秒でも早く救援に向かわないと間に合わない。

そう思つたその時……。

コン

ん？背中に何か当たり振り返るといつのまにかロードセクターが停まつていた。

「ロードセクター？どうした？」

ファンファン！

なんだろ？なにか訴えかけている。

「・・・もしかして乗れつて言つてるんじゃないの？」

ジーナさんの言葉に反応して、ライトが点滅する。

「力を貸してくれるのか！ロードセクターありがとう！」

素早くロードセクターに跨りスロットルを動かすとエンジン音が大きくなる。

お前がいてくれるなら百人力だ。

「ジーナさん先に向かいます。いくぞ！ロードセクター！」

スロットルをフルで回すとロードセクターは俺を乗せて猛スピードで走り出した。  
速い！凄いスピードだ。

これなら絶対に間に合う！

目的地はアラガミと戦う仲間の元に。

俺は戦う！今は目の前に苦しんでいる人達の助けになる為に！

仮面ライダーとして、一人の『人間』として！！

つづく

## 24話

ジーナ S i d o

「ふう、ほんと手のかかる後輩ね」

白いバイクで走り去るライダーを見送り私、ジーナ・デイキンソンは笑みをこぼしていた。

それにもしても彼、やっぱり無理をしていたのね。

彼自身は素直な優しい子で味方も多いけどそのバツタのような見た目と驚異的な身体能力からどうしてもカレルやシユンのように蔑む目や恐れる目を向ける職員や神機使いが多い。

今回なんとか助言できたけど少しは彼の負担は軽減されたかしら。

それにもケモノか・・もつとも私たちにはケモノよりおぞましいモオラクル細胞ノが潜んで

いるのに偉そうな事言つたわね。

彼が知つたら何というかしら。

自分の右手首に付けられている腕輪を見ながら呆れるように微笑む。

その微笑みがただの自虐かそれとも後輩を導けた喜びなのか。

自分自身でも分からなかつた。

…さて今はこの状況をなんとかしないとね。

振り返る視線の先にはこちらに向かつてくる無数のオウガテイルとザイゴートの群れ。

そして私の足元には彼に殴り倒され血を流して死んでいるクモの怪物。

どうやらこのクモの怪物の血の匂いを嗅ぎつけてアラガミ達はやつてきたようね。仕方ないわ。

放置してクアドリガと合流でもされたら厄介だし。

ここで殲滅しておきましょう。

「あら？」

気持ちを戦闘態勢に切り替え神機を構えると彼の緑のバイクがエンジンを吹かしながら横に立つ。

「どうしたの？ あなたの…主人様はもう行っちゃたわよ、動けるようになつたなら早く行きなさい」

語りかけても無反応だ。

彼の言葉以外は通じないのかしら？

でも人の言葉は分るみたいでよく分解しようとするとリツカから逃げ回っているのを

見かけてたからそれはない筈よね。

「…もしかして手伝ってくれるのかしら？」

ファン！ファン！

まるでそうちと言わんばかりに目のようなライトが点滅する。

もしかして私が彼を助けた恩返しのつもりなのかしら？

カレルとシュン  
だとしたら主人思いの優しいバイクね。

あの二人にもその優しさがほんの少しだけでもいかないかしら。

「ありがとう、確かバトルホッパーだつたかしら？手伝いお願ひね」

こうして私とバトルホッパーとの共同戦線が幕を開くのだつた。

カレル S i d o

まったく今日はついてないぜ。

金払いのいい楽な仕事だと思つて受けてみたらまさか大型のクアドリガが出てきやがるなんてな。

ミツシヨン中に俺カレル・シュナイダーと同僚である小川シユンは突如現れた大型アラガミ「クアドリガ」に襲撃され奴の放つミサイルの爆発で俺たちは窮地に追い込まれていた。

シユンはクアドリガのミサイルの爆発に巻き込まれて氣絶してゐるから役に立てねえ  
シジーナにはすぐ來るように連絡したが距離が離れすぎてまず間に合わねえだらうし  
……あんなポツつと出のバツタ野郎は來るかさえ分からねえ。

おまけに今回は楽なミッショソだと思つてバレットもそんなに持つてきていない。  
状況は最悪だ。

走りながら放つクアドリガのミサイルを避けながらなんとか打開策を考えようとす  
るがこの状況では考える暇もない。

「おいシユン生きてるか？」

「…うるさいな、まだ生きてるよ」

意識を取り戻しすぐさま悪態を吐くシユン。

相変わらず生意気な奴だ。

だが奴はすでにもはや戦力には数えられん。

「くそ！バイクのエンジン音みたいな耳鳴りまでしてきやがった！」

チイシユンの奴まだ寝ぼけてやがるのか。

それはクアドリガの発するエンジン音だろうが。

バイクのエンジン音なんてそんなの俺にはまったく聞こえねえぞ。

くそ！俺には金を稼いで金持ちになり幸せになるつて夢があるんだ。

なのにこんな所で死んでたまるか。

それにしてもさつきからうるせえアラガミだぜ。

・・・・までなんだこれは？

最初はクアドリガのエンジン音だけだと思つていたが冷静になると音が二重に聞こえる…だと…？

まさか…？

音が近づいてきている方向を見る。

そこには白いバイクに乗つたアイツ<sup>バッタ野郎</sup>がこつちに向かつてきていた。

何しに来たんだアイツは！

ただ突つ込んでくるだけじやミサイルを撃つてくるクアドリガのいい的になるだけだぞ！

案の定、クアドリガが無数のミサイルをアイツに発射してしまつた。

ミサイルの雨が迫る。

だがアイツのバイクはスピードを緩めるどころかさらに加速していく。

「アタックシールド！」

バイクの前と後ろから何かが出てきてフードのように覆う。

あんなんで防げるわけねえだろ。

クアドリガのミサイルは雨風じやねえんだぞ。

もうダメだ。あいつはミサイルの直撃を受けて爆死する。

俺もシュンもそう思っていたが予想に反した事態が起きた。

おいおい嘘だろ。

バイクの前方に赤い閃光に覆われながらあの無数のミサイルが爆発する中をバイクで突つ走つて来やがった。

ガシャアアアン！

白いバイクはそのまま猛スピードでクアドリガに直撃して金属同士がぶつかる大きな嫌な音が発生した。

と同時にクアドリガの馬の足のような履帶を破壊する。

足を破壊されバランスを崩して倒れるクアドリガ。

なんて破壊力だ。

神機でもそこまでの破壊力はないぞ。

「プラズマジェット！」

ターンしてクアドリガに背を向けるとバイクから白いガスのようなものが勢いよくクアドリガに噴出される。

何を浴びせられたか知らないがもがき苦しむクアドリガ。

その間にあいつは俺たちの方にやつてきた。

「カレルさん、シュンさん大丈夫ですか？怪我は？」

「おまえどうして？それにそのバイクはまさか？」

「話は後です、今のうちに回復して態勢を立て直してください」

「あ、ああ…」

そうだな、色々聞きたい事があるが今はそれ所じやない。

金はあつても自分の命がなかつたら意味がないからな。

あいつの言う事聞くのは悔しいが今は言う通りにさせてもらうぜ。

「おい立て！一且退くぞ」

「あ、ああ…」

シュンの奴に肩を貸して無理やり立たせる。

シュンに貸した借りはいづれ金銭的な意味で返してもらうか。

そんな事を考えながらシュンと共にバッタ野郎から離れクアドリガの攻撃が届かな  
い距離まで下がる

あの岩場の影がいいな。

シュンを寝かせて懐から回復剤を探す。

くそが！調査部の奴らいい加減な仕事しやがつて。

この損害の請求は高くつくから覚悟しろよ。

ライダースイド

よしカレルさんもシウンさんも怪我はしているが意識ははつきりしていたし大丈夫みたいだな。

あとはクアドリガを倒すだけだ。

しかしながら大きさなんだ。

足を破壊されたとはいえ目の前にいるクアドリガの威圧感は今まで闘つたコンゴウやシユウとは比べものにならない。

これが小型のオウガテイルや中型のシユウでなく大型のアラガミの威圧感。これからも闘わなければならぬ怪物達。

俺は倒せるのか。

いや弱気になるな。

アラガミの中にはクアドリガよりもつてかいやつも存在する。

ここで立ち止まるわけにはいかない。

「いくぞ！ ロードセクター」

自分を振るい立たせ怒り狂うクアドリガに立ち向かつて走りだした。

つ  
づ  
く

# 25話

カレル side

「す、すげえ・・・」

隣でジュンの驚きの声を上げている。

そりやそりや。

『アタックシールド!』

目の前で白いバイクを器用に操りながらクラドリガから放たれるミサイル攻撃を避けながらバイクごと体当たりするどんでもない奴<sup>(ライダ)</sup>がいるんだからな。

神機なしでアラガミと戦っている噂を聞いていた時、俺は信じていなかつた。

黒い筋肉に覆われた化け物ような見た目  
アラガミ以上の力。

そんな奴に背中を任せられない。

俺は奴と距離を置いていた。

いつ本性をむき出しになつて襲つてくるかわからぬからだ

今回の任務はあいつのバイクの腕が必要だつたから仕方なく部隊に加えた

俺は金以外信じていない。

だから俺は向こうから関わってこないよう奴を徹底的に罵倒した。

それがお互にとつて一番いい選択だと思ったからだ

だが奴はそんな俺を助けにきやがつた。

なぜだ？

「どうやらそつちはまだ終わってないみたいね」

「ジーナか・・・」

考えがまとまらない中、後ろを振り返るとあいつの確かバトルホッパーとかいう緑のバイクに乗るジーナの姿があつた。

確かあのバイクは前にライダー以外の奴が無断で乗ろうとして振り落とされてたのになんで乗ってるんだ。

「それで？あなた達はあれだけ彼に偉そうなことを言つて呑気にサボり中かしら？」

「なんだと俺たちは身体を休めてるだけだ。お前らこそ俺達がなにやつてんだ」

「よせよ、ジーナの言つてることはもつともだ」

悔しいがあまり動けない。

今はあいつに頼るしかねえ。

「とりあえず回復させるわ」

ジーナの神機の銃口が俺たちに向けられ発射され回復弾が拡散し、緑の球体が俺とシュンを覆い受けた傷が癒されていく。

少しは楽になつた。

これなら何とか動けそうだな。

「おいマズイぞ！」

シュンの指さす方を見ると爆発でバイクから投げ出されて空を舞うバツタ野郎の姿があつた。

何やつてんだアイツ!?

ライダースィド

「ぐあ・・・あ・・・」

俺はなんとか直撃は免れたけどミサイルの爆風をモロに受けてしまいロードセクターから放り出されてしまつた。

地面に叩きつけられた時に背中を強打してしまい息がしづらい。

爆風と同時に発生した強烈な熱風で火傷してしまつたのか黒い身体から白い痕がついて熱の所為か少しだけ白煙が上がつている。

そ、 そうだロードセクターは？

起き上がるることもできず首だけを何とか動かしてロードセクターを探す。

・・・みつけた。

ロードセクターは横倒しになつて動けないでいた。

そうだクアドリガはどうなつている。

ガシン！ ガシン！

大きな足音を立てながらこちらに迫つてくるクアドリガ。

倒れている僕の前まで来ると再生した前足を大きく振り上げる。

このまま踏み潰される！

早く起き上がらないと・・・。

「く・くううう・・・ハアハアハア」

だ、 だめだ逃げたいけど体が動かない。

今の爆発とクモ怪人との戦いで受けたダメージで体が動かない。  
これまでか。

そして無情にも振り下ろされるクアドリガの前足。

「くつ!？」

覚悟を決めて衝撃に備えようとした瞬間。

二つの爆発音が聞こえた。

上を見上げると前足を大きく振り上げたままバランスを崩し煙を出しながら後ろに倒っていくクアドリガ。

いつたい何が？

「ジユン早くそいつを回収しに行け、いつまでもそんな所で寝ていられたら邪魔だ。ジーナは奴が起き上がりつてこれないよう俺と一緒に撃ちまくれ！ただし絶対に二人に当てるなよ。特に死にぞ<sup>ヲ</sup>イ<sup>タ</sup>ダ<sup>一</sup>いの方にはな」

この声・・・カレルさん？

「ふふふ・・・了解」

「おいカレル！それはどういう意味だ！俺には当てていって事かよ！」

「うるさい！無駄口叩いてないで報酬の分け前を受け取りたかつたら俺の命令どおりにしろ！」

「くそ覚えてろよ！」

文句を言いながらも僕の方に走つてやつてくるジユンさん。

「ほら早く立て！これでさつきの借りは返したぞ」

そう言つてジユンさんは動けない僕に肩を貸してクアドリガに撃ち続けているカレルさん達の方に向かう。

僕と一緒にいたくない・・・まして僕に触れたくない言つていたジユンさんなのに・・・。

「ありが・・・とう・・・ございます」

「!?だ、黙つてさつさと走れ！」

朦朧とする意識の中、ジユンさんの顔が赤くなつてゐるのが見えた。

走りながらなんとかカレルさん達のいる所にたどり着き岩を背にもたれかかり座り込む。

ハアハア・・・。

息をするだけで体に痛みが走る。

どこか体の中を痛めてしまつたのか。

「すみません足手まといなつてしまつて・・・」

「ああまつたくだ、おいジーナ、ジユン早く回復錠か回復弾を使つてやれ」

「無理だよ、こいつは俺達と違うから回復錠や回復弾を使つても効かないらしいんだ」

そう俺にゴッドイーター用に調合された回復弾や回復錠を使用してもなんの意味もない。

ない。

「じゃあどうするんだよ！コイツこのままだと死ぬぞ！それにこのままだと・・・」

そうだ俺だけじゃない。

こうしている間にもクアドリガに撃ち込んでいるバレット弾には限りがある。このままだといずれ弾切れを起こしてしまい足止めができなくなつたクアドリガにみんなが餌食になつてしまふ。

かといつて動けない僕がいたら撤退できない。  
ならば・・・。

「俺の事はいいですから早く撤退してください」  
そうするしかみんなが助かる道はない。

「黙れ！この部隊の隊長は俺だ。お前が偉そうに命令するな」  
気持ちは嬉しいですけどそもそも言つてられない。

「でもこの状況じゃ・・・」

「・・・カレル足止め変わつてちようだい」

「おいどうする気だ？」

ジーナさんが砲撃をやめてこちらを向く。

足止めを止める訳にもいかず慌ててカレルさんが自分の神機で砲撃を再開し始めた。

「確かこっちのポケットに・・・あつた」

ジーナさんは自分のポケットから一つのバレットを取り出して神機にセットする。  
そして・・・銃口を俺に向けてきた！

え？ な、何！？

「おい何するつもりだ？ こいつに回復弾は効かないのに」

「時間がないの、黙つてみてなさい」

あのジーナさん、目が怖いです。

「まさか動けなくて邪魔なコイツにトドメをさす気なのか？」

そ、 そうなんですか！？

バンツ！

バレット弾は放たれて僕の胸に直撃する。

「うわ！ やめろ！」

本当にとどめをさされたのだろうか。

思わず歯を食いしばる。

・・・痛くない？

それどころかさつきまでの痛みが引いていく。

よく見ると身体に淡い緑の光が覆っている。

これってまさか回復弾。

でもどうして？

僕には回復弾は効かないのに。

やがて光は收まり傷と痛みは完全に消えて立ち上がるようになった。

「お、おいお前大丈夫なのか？」

心配そうに声をかけるジュンさん。

「は、はいそれどころかさっきまでの痛みも無くなりました」

呆然としながら自分の腕を見る。

クモ怪人にバイクで引き回されて受けた背中の痛みもない。

「どうやら上手くいったみたいね」

「おいどういうことだジーナ？」

「そうだよこいつに回復弾は効かないんだろ」

ジーナさんの声で現実に引き戻つたカレルさんとジュンさんがジーナさんに詰め寄る。

「ええ普通の回復弾ならね、でもこの彼用に調合された回復弾なら別よ」

「どういうことですか？」

「今撃つた回復弾はあなたを捕獲した時に手に入れたデータを元に榎博士が開発した試作品らしいのよ、もしもの時があるかもしれないからと榎博士が私に預けていたのよ」「榎博士が？」

「ええ帰つたらちゃんとお礼を言つておきなさい、造るのに結構大変だったみたいで完

成したのはこの試作品ひとつだけだつたらしいから」

「分かりました」

榎博士、ありがとう。

「さてゆつくり休めたな。そろそろこつちから反撃に移るぞ」

カレルさんが声を掛ける。

その顔はリンドウさんやタツミさん、部隊長特有の戦う顔になつていた。  
「奴の結合崩壊を起こさせる箇所はミサイルポッドと排熱器官そして前面装甲だそこで・・・」

作戦の説明が始まり数分で終わる。

「まずは私から・・・」

ジーナさんがクアドリガの攻撃方法であるミサイルポットを狙撃する。

誘爆し破壊されミサイルポットから火を吹く。

次にカレルさんが神機を構え狙撃する。

「ジーナほどじやないが俺もそれなりに狙撃はできるんだよ」

狙いは廃熱機関。

ミサイルポットが破壊されフラフラしている所にカレルさんの神機から発射されたバレットが排熱期間内に入つて爆発した。

「よし行け！シユン、バツタ野郎！」

「おう！」

「はい！」

シユンさんと共に走り出し苦しんでいるクアドリガの前に立つ。  
行くぞ！はあああ！！

「ライダー・ダブルチョップ！」

左右の腕からほぼ同時に全面装甲に向かってクロスの形で放つ。  
くつきすがに固いな！

だが亀裂は入った。

「ライダー変われ！うおおおお!!」

ザツシユ！ザシユ！

シユンさんの神機から放たれる斬撃が亀裂を大きくする。

「シユンさん代わります」

「ああ！」

「トオ！」

シユンさんが後ろに下がるの確認した俺は空高くジャンプする。

「ライダーアアアア！キイイック！」

バギギギギ!!!

渾身のライダー・キックがついにクアドリガの自慢の厚い装甲が完全に破壊した。

「くたばれ！くそ野郎!!」

『ガアアアアアアア!!』

装甲がなくなつたクアドリガの皮膚にシュンさんがロングブレードを突き刺すとクアドリガは叫び声をあげながらやがて<sup>うずくま</sup>蹲るように倒れ込み動かなくなつた。

「よしコアを取り出すぐ！」

カレルさん達が慣れた手つきでクアドリガの死体を解体してコアと素材を取り出していく。

コアと素材を取り除かれたこのクアドリガは二度と動くことはないだろう。

「大物のコアが手に入るとは思わぬ収穫だな、臨時報酬が楽しみだ」

「そうだなあとはこのバイクを持って帰れば任務完了だ」

「ああ多少のトラブルはあつたが大儲けだ」

嬉しそうに談笑するカレルさんとシュンさん。

そうだ僕らの本来の任務はロードセクターを捕まえることだつたんだ。

「カレルさん、シュンさんお話があります」

「ん？なんだよ？分け前のことか？心配するなお前にもちゃんと払つてやるよ」

「分け前はいりません、ロードセクター・・・そのバイクを俺にください」

俺に言葉に二人の表情が変わる。

「おいおい何言つてんだ！お前！」

「そうだあまり調子に乗るなよ、これは任務だからそんな事できるわけないだろ」

シユンさんが怒鳴る。

そりやそりや、俺は第三部隊からしたらせつかく苦労して手に入れた手柄を横から奪つて独占しようとしている。

それに下手したら任務失敗扱いになつて第三部隊の評価が下がつてしまふかも知れないんだから。

せつかく第三部隊の人たちと戦い通してだけど少しは仲良くなれてよかつたけどロードセクターを守るため引くわけにはいかない。

俺を信じてロードセクターは来てくれて助けてくれた。

例え極東支部の人たちを敵にまわす事になつても・・・。

「どういうことだ？お前はこのバイクがなんなか知つてるような口ぶりだな」

「ええこいつはロードセクター、アラガミに対抗する為に俺を改造した組織が造つた俺専用のマシンです」

さすがに邪神が造つたなんて言えやしないから俺がフエンリルに入隊した時に用意

されたカバーストーリーを利用させてもらつた。

『俺はアラガミとの戦う為にある組織に改造された人間』

組織のことは上層部が詮索するなど戒厳令が敷かれているからこれ以上は追及されないだろう。

嘘をつくのに躊躇いはあるけど今は仕方ない。

「なるほど、だがよその所為で俺の部隊の信用が落ちる結果になつてもか？」

そうきたか。

それを言われるときつい。

けどここで引くわけにはいかない。

「ヨハネス支部長には僕が話します、みなさんに迷惑はかけません報酬でも足りないなら僕の貯金をすべて出します、だからロードセクターを僕にくださいお願ひします」

「本気だな」

「ええ…全部持つて行つて結構です、それでも足りないならあなたたちの任務もすべて無償で手伝います」

俺を信じてロードセクターは来てくれたんだ。

例え極東支部の人達に嫌われることになつても…。

最悪の場合、第三部隊の奴隸に成り果てるかもしないけど後悔はしない。

「ふつ・・・いいだろうそのバイクはくれてやるから分け前の報酬はすべて貰う、お前の金は要らん。これで貸し借りなしだ。持つていけ仮面ライダー」  
え？ 今僕の名前を？

「勘違いするな、お前にそのバイクを売つてやつたのはその方が金持ちに売るより儲かると判断しからだ。いわば未来への投資だからな！ だからお前の手が空いてるときに俺の仕事を手伝つてもらう、いいな！」

「ふふよかつたわね、カレルはお金にならない投資は絶対にしない主義なの」

「それって」

「つまり口ではああ言つてるけどあなたを認めたつて事よ」

「ふん」

「まあうちの評価なんてそんなに高くないんだけどねこの間の任務の失敗もカレルとシウンがケンカして標的に逃げられたし、まあすぐに対象のアラガミは別の部隊が対処してくれて大事にはならなかつたのが救いね」

「うるせえ！ 余計な事言うな」

こうして俺は新たなる仲間『ロードセクター』を手に入れた。

だが喜んでばかりはいられない。

『貴様は神の恩恵もなしにこれからたつた一人で呪いのような五万年という膨大な時の

流れの中を生きていくのだ・・・』

僕はこれから気の遠くなるほどの長い時間戦い続けると共にこれから敵はアラガミだけでなくゴルゴム怪人操る邪神との戦いにも生き残らなければならない  
クモ怪人が残した怨嗟の言葉が俺の心中に深く突き刺していたのだった。

つづく